鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（2）

KU NITI DEN

九日田遺跡

（姶良郡栗野町）

１９９３年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序　　文

昭和５４年に発掘調査された九日田遺跡の報告書は諸般の事情により長く未刊のままでしたが，ここに約１４年ぶりに報告書として刊行できることになりました。

九日田遺跡からは多種の出土品が発見されましたが，殊に縄文時代後期の出水式土器の出土は従来不明な点が少なくなかった後期前半の土器編年研究に大いに寄与するものと思います。

この報告書がこれからの文化財保護や学術研究のため広く活用されることを願っています。

おわりに，発掘調査及び報告書作成に御指導，御協力をいただきました関係者各位に心から感謝の意を表します。

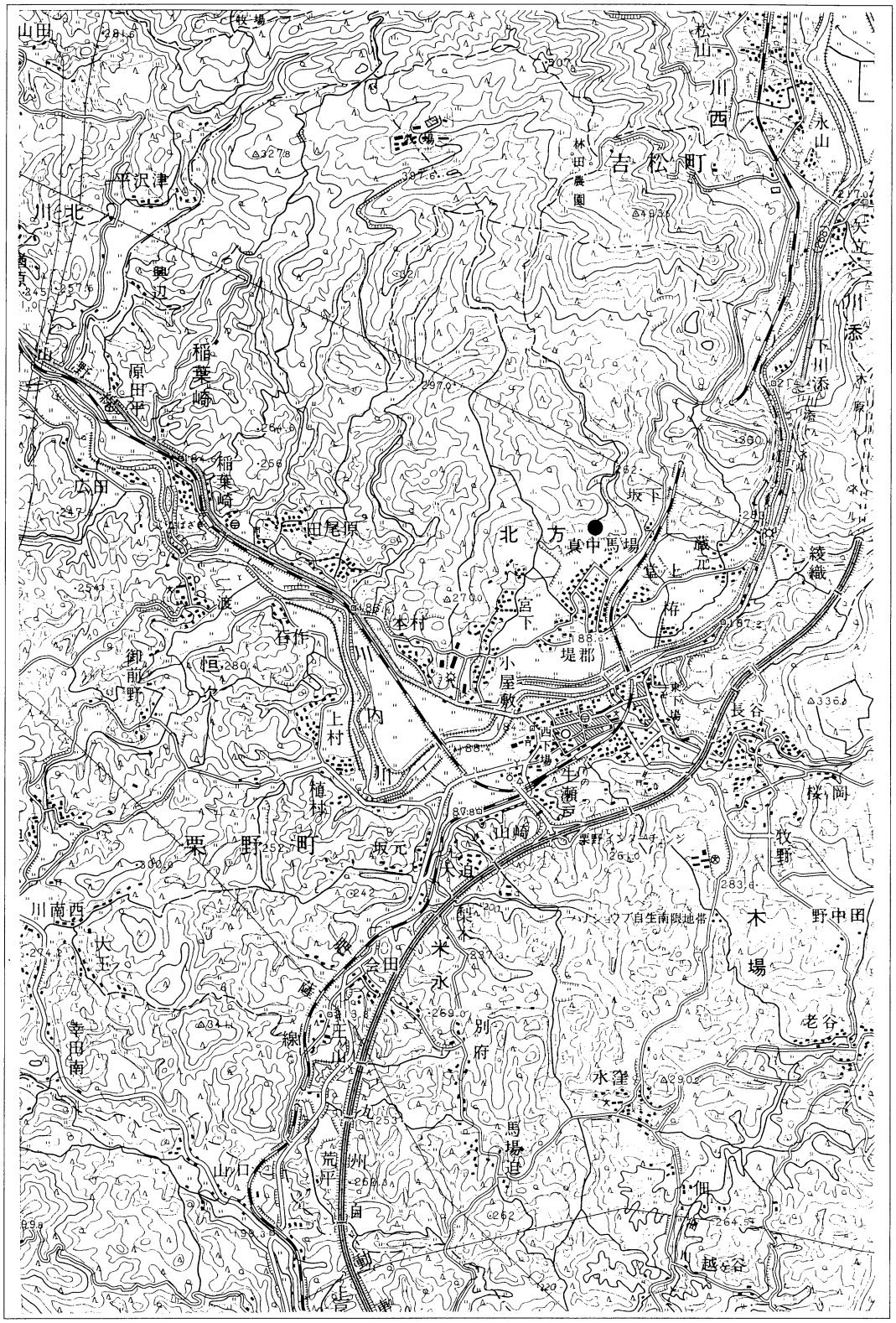
平成５年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　　長　　大久保　忠　昭

報告書抄録

フリガナ	クニチデン イセキ
書名	九日田遺跡
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	2
編著者名	池畑　耕一
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－56　鹿児島県姶良郡姶良町平松6252
発行年月日	1993年3月30日
フリガナ	クニチデン イセキ
所収遺跡名	九日田遺跡
フリガナ	アイラグン クリノチョウキタカタアザ クニチデン
所在地	姶良郡栗野町北方字九日田
調査期間	19790122～19790126，19790416～19790503
調査面積	665㎡
調査原因	県営ほ場整備事業

	主な時代	主な遺構	主な時代	主な遺物	出土量	特記
出土遺物・遺構等	縄文時代 平安時代	土坑1基 古道	旧石器時代	細石核・細石刃・三稜尖頭器・トラピーズ・スクレイパー	12点	
			縄文時代	中期末～後期中葉の土器(並木式・阿高式・岩崎上層式・鐘崎式・出水式など)晩期の土器(黒川式・夜臼式など)石器(石鏃・石斧など)	パンケース約20箱 パンケース1箱 176点	
			平安時代	土師器・須恵器など	パンケース3箱	



九日田遺跡位置図（５万分の１）

例　　言

1．　この報告書は，県営ほ場整備事業（北方地区）に伴って発掘調査された九日田遺跡の発掘調査報告書である。

2．　本書の執筆・遺物実測・トレース・写真撮影等は主として池畑耕一が担当したが，拓本・遺物実測・原稿浄書等に整理作業員の協力を得た。

3．　本書に用いた遺物番号は土器・土製品と石器に分けて通し番号とし，石器は番号の前にＳを付した。本文及び挿図・図版の番号は一致する。

4．　原則として縄文土器・土製品は２．５分の１，須恵器は２分の１，土師器・研磨土器は３分の１，小形石器は10分の９，石斧は２分の１，大形石器は３分の１の縮尺とした。

目　　次

序　文
例　言
目　次
第１章　発掘調査の経過 …… 7
　第１節　発掘調査に至るまでの経過 …… 7
　第２節　発掘調査の組織 …… 7
　第３節　調査の経過及び日誌抄 …… 8
第２章　遺跡の環境 …… 10
　第１節　地理的環境 …… 10
　第２節　歴史的環境 …… 10
第３章　層序…… 16
第４章　調査の概要…… 17
　第１節　概要 …… 17
　第２節　旧石器時代 …… 20
　第３節　縄文時代 …… 22
　第４節　弥生時代 …… 82
　第５節　平安時代 …… 82
第５章　まとめにかえて …… 90

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡分布図 …… 13
第２図　柱状断面図 …… 16
第３図　整備前の水田区画と試掘グリッド配置図 … 18
第４図　整備後の水田区画と本調査トレンチ位置図 19
第５図　石器(１) …… 20
第６図　石器(２) …… 21
第７図　土　坑 …… 22
第８図　縄文土器(１) …… 23
第９図　縄文土器(２) …… 24
第10図　縄文土器(３) …… 25
第11図　縄文土器(４) …… 27
第12図　縄文土器(５) …… 28
第13図　縄文土器(６) …… 29
第14図　縄文土器(７) …… 30
第15図　縄文土器(８) …… 31
第16図　縄文土器(９) …… 32
第17図　縄文土器(10) …… 34
第18図　縄文土器(11) …… 35
第19図　縄文土器(12) …… 36
第20図　縄文土器(13) …… 38

第21図　縄文土器(14)　……　39
第22図　縄文土器(15)　……　40
第23図　縄文土器(16)　……　41
第24図　縄文土器(17)　……　42
第25図　縄文土器(18)　……　43
第26図　縄文土器(19)　……　44
第27図　縄文土器(20)　……　46
第28図　縄文土器(21)　……　47
第29図　縄文土器(22)　……　48
第30図　縄文土器(23)　……　49
第31図　縄文土器(24)　……　50
第32図　縄文土器(25)　……　51
第33図　縄文土器(26)　……　52
第34図　縄文土器(27)　……　53
第35図　縄文土器(28)　……　54
第36図　縄文土器(29)　……　55
第37図　縄文土器(30)　……　56
第38図　縄文土器(31)　……　57
第39図　縄文土器(32)　……　59
第40図　縄文土器(33)　……　61
第41図　縄文土器(34)　……　62
第42図　縄文土器(35)　……　63
第43図　縄文土器(36)　……　64
第44図　縄文土器(37)　……　65
第45図　縄文土器(38)　……　66
第46図　縄文土器(39)　……　68
第47図　縄文土器(40)　……　69
第48図　土製品(1)　……　71
第49図　土製品(2)　……　72
第50図　石　器(3)　……　73
第51図　石　器(4)　……　75
第52図　石　器(5)　……　76
第53図　石　器(6)　……　77
第54図　石　器(7)　……　78
第55図　石　器(8)　……　79
第56図　石　器(9)　……　80
第57図　石　器(10)　……　81
第58図　弥生土器　……　82
第59図　土 師 器　……　84
第60図　内面研磨土師器　……　86
第61図　須恵器(1)　……　87
第62図　須恵器(2)　……　88
第63図　須恵器(3)・磁　器　…　89
第64図　石製品　……　89

図 版 目 次

図　版　1　近　景
図　版　2　3区・遺物出土状況
図　版　3　遺物出土状況
図　版　4　遺物出土状況
図　版　5　縄文土器
図　版　6　縄文土器
図　版　7　縄文土器
図　版　8　縄文土器
図　版　9　縄文土器
図　版　10　縄文土器
図　版　11　縄文土器
図　版　12　縄文土器
図　版　13　縄文土器
図　版　14　縄文土器
図　版　15　縄文土器・弥生土器
図　版　16　土 製 品
図　版　17　須恵器・青磁
図　版　18　石　器
図　版　19　石　器
図　版　20　石　器
図　版　21　石　器
図　版　22　石器・縄文土器底部

第１章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至るまでの経過

昭和５４年１月上旬，栗野町の一住民から県文化課へ，栗野町北方での県営圃場整備事業に伴う工事によって多量の土器が出ているという情報が寄せられた。県文化課はただちに事業主体である加治木耕地事務所と連絡をとり，工事のストップを命じるとともに１月１１日に現地調査を行った結果，広い範囲に土器等が散布していた。すでに工事がほとんど終了していたため当日は区画ごとに土器を取り上げ，記録にとどめた。地層の状況把握にも努めた。工事はもう完了に近く，中断が長引くと各所に支障が及ぶと考えられたため，文化課と加治木耕地事務所と打ち合わせた結果，とりあえず遺構・包含層残存の確認調査を早急にすることとなった。

第２節　発掘調査の組織

１．現地調査

事業主体	鹿児島県農政部		
調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	国分正明（昭和５３年度）
		〃	井之口恒雄（昭和５４年度）
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課長	谷崎哲夫（昭和５３年度）
	〃	〃	山下典夫（昭和５４年度）
調査企画者	〃	専門員	本蔵久三
調査担当者	〃	主事	池畑耕一
	〃	〃	青崎和憲
事務担当	〃	管理係長	中条亨
		主事	伊地知千晴（昭和５３年度）
		主査	安藤幸次（昭和５４年度）
		主事	天辰京子

２．整理作業

調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	大久保忠昭
調査企画者	〃	次長兼総務課長	水口俊雄
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎勝洋
調査担当者	〃	文化財主事	池畑耕一

調査事務担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター　主　　査　　下園勝一
〃　　主　　事　　中村和代

第３節　調査の経過及び日誌抄

１．確認調査

確認調査は昭和５４年１月２２日から１月２６日まで実施した。

日　誌　抄

１月２２日（月）　道具搬入，休憩所設営，クイ打ち。調査について作業員に説明をする。
グリッド１～１２掘り下げ。
１月２３日（火）　グリッド２・３・６・１３～２３掘り下げ。
グリッド１～１２断面清掃，写真撮影。
１月２４日（水）　グリッド１５・１８～２３・２６～３４掘り下げ。
グリッド１３～２３・２６・２７断面清掃，写真撮影。
１月２５日（木）　グリッド２８～３０・３３～３７掘り下げ。
グリッド２８～３２断面清掃，写真撮影。
１月２６日（金）　グリッド３３～３７壁面清掃，写真撮影。
調査地の東方低地のグリッド３８掘り下げ。
発掘機材を搬出。

２．本調査

確認調査の結果を踏まえて，再度両者で打合せた結果，耕作地の部分はこれ以上削平せずに現状のまま耕作土を盛ることにした。ただ遺跡の中央部を東西に貫く排水路（幅1.5m）の部分は設計変更が不可能なため，この部分について昭和５４年度事業として発掘調査を実施することになった。

調査は昭和５４年４月１６日（月）から５月３日（木）まで行った。

日　誌　抄

４月１６日（月）　発掘用具搬入，休憩所設定。トレンチにクイを打つ。
３区表土はぎ。
４月１７日（火）　２区～４区の１・２層掘りあげ。
４月１８日（水）　２区１層，６・７区の３・４層掘りあげ。
４月１９日（木）　雨のため外の作業中止。
４月２０日（金）　４～６区２層，８区４層掘りあげ。
４区・６区実測・取りあげ。

4月21日（土）　1～6区の2・3層掘りあげ。
　　3・4区実測・取りあげ。
4月23日（月）　2～5区の2～4層掘りあげ。
　　3・4区実測・取りあげ。
4月24日（火）　2～4区の3・4層，7・8区の3・4層掘りあげ。
　　2・3・7・8区取りあげ。
4月25日（水）　1・2区の3・4層，5・6区の2～4層掘りあげ。
　　1・2・5・6区実測・取りあげ。
4月26日（木）　雨のため中止。
4月27日（金）　1～8区の3・4層掘りあげ。
　　2・3区実測・取りあげ。
4月28日（土）　1～6区の3・4層掘りあげ。
　　2・3・5・6区実測・取りあげ。
4月30日（月）　会議のため中止。
5月　1日（火）　雨のため中止。
5月　2日（水）　2～7区3・4層掘りあげ。5区炉跡実測。
　　2・4・6区実測・取りあげ。
5月　3日（木）　2～5区3・4層，8区3・4層掘りあげ。
5月　4日（金）　北壁面清掃，写真撮影，実測。発掘用具撤去。

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

遺跡の所在する栗野町は，鹿児島市街地から北東に約４４ｋｍいった鹿児島県の北部に位置している。東は，霧島火山帯の一分峯栗野岳で宮崎県えびの市と境を接している。北は熊峯を境にして吉松町と接し，西は伊佐郡菱刈町に接している。西南隅に国見岳があり，南は牧園，横川両町と境を接している。全体的に霧島火山群を噴出源とする火山灰土に覆われ，地形が複雑である。

熊本県白髪岳に源を発する川内川は，吉松町境にある峡谷をうがって栗野町にはいると，それまでの南向きを北西方向へと流れを変える。その周辺部には沖積地の盆地をつくり，米作地帯を形成している。以前は川内川の氾濫のたびに中央低地は泥海化していたが，護岸工事の進歩によって近年ようやく被害を僅少に止めるようになった。沖積地のまわりの台地には川内川の氾濫による礫層が堆積している。

九日田遺跡は，鹿児島県姶良郡栗野町北方字九日田に所在し，北側の山地から緩やかに下降する東側に向かった台地の端部にある。標高は約２６０ｍ，低地の水田とは比高約１０ｍあり，川内川との比高は約８０ｍである。

前方には東から南に向かって川内川が蛇行して流れている。川内川流域の低地には水田，集落があるが，九日田遺跡はそこから一段高くなった水田にある。元来，南へ下る傾斜面であったようだが，現在は開墾していくつかの段をもって南へ落ちている。

第２節　歴史的環境

栗野町には旧石器時代から近世まで長期にわたって多くの遺跡が存在している。それは高い山から低地にくだる先端付近に集中している感がある。ここでは時代を追って概要を紹介したい。

１．旧石器時代

栗野町で最も古いのはナイフ形石器文化である。木場Ａ，木場Ａ－２，射場平，池ノ迫Ｂなどの遺跡でナイフ形石器や三稜尖頭器などの出土遺物が出ており，木場Ａ遺跡では集石遺構も４基発見されている。次の細石器文化も木場Ａ・木場Ａ－２・諏訪・麦生田遺跡などで出土している。麦生田遺跡は九日田遺跡の北西側に隣接しており，傾斜面の上位に位置している。

２．縄文時代

縄文時代の遺跡は早期から晩期までほぼ連続して存在しており，山間部から低地まで広い範囲に分布している。早期のものは柿木原・永山Ａ・木場Ａ・山崎Ａ・Ｂ・諏訪・諏訪岡・花ノ木・上佐牟田Ａ・射場平・大水堀・二渡などの遺跡で撚糸文土器・押型文土器・手向山式土器・前平式土器・吉田式土器・石坂式土器・塞ノ神式土器・平栫式土器などの土器，石鏃・石匙・掻器・磨石などの石器が出ている。前期の遺跡には柿木原・木場Ａ・山崎Ｂ・花ノ木・上佐牟田Ａ・射

場平・大水堀などがあり，轟式土器・曽畑式土器などが出ている。早期から前期へは継続している遺跡が多い。早期の遺構として集石がみられ，諏訪（１基）・花ノ木（１９基）・山崎Ｂ（１７基）・山崎Ａ（１基）などの遺跡で発見されている。

また，花ノ木遺跡では炉跡と思われるもの１，貯蔵穴１，土坑９などが，山崎Ｂ遺跡では土坑６が発見されている。

中期の遺跡には，中尾・本堂・永山Ａ・諏訪岡・山崎Ｂ・上掛・射場平・池添などがある。阿高式土器が多く，他に並木式土器が出ている。

後期の土器は，岩崎・南福寺・出水・市来・鐘崎・西平などの型式が，平田・中尾・諏訪・上掛などの遺跡で出ている。

晩期には中尾・宮下・山崎Ｂ遺跡で黒川式土器が出ているが，山崎Ｂ遺跡では上加世田式土器も出ている。

こうしてみると，後・晩期に比べて，早・前・中期の遺跡が割合に多く分布しており，当時の自然環境の中での生業の変化をうかがうことができる。

３．弥生・古墳時代

上佐牟田遺跡で，山ノ口式土器の完形壺形土器が出土し，他にも多くの遺跡で，後期の土器が出土したといわれているが，古墳時代との区別が不明のため後期の遺跡と断定できる所はない。堤郡遺跡では石斧・石錘などとともに石庖丁が採集されている。

古墳時代になると散布地が増加する。天神原・田尾原・老神原・北方地下式横穴群・本堂・柿木原・北方中尾・永山Ａ・永山Ｂ・諏訪岡・木場Ａ・花ノ木・踏切Ａ・踏切Ｂ・下佐牟田・城ケ尾Ｂ・池ノ迫Ａ・池ノ迫Ｂ・上佐牟田Ｂ・西原・日当野・老谷Ａ・肥・老谷Ｂなど各地で出土しているが，本格的に調査された所がないため集落規模などはっきりしていない。北方では墓もいくつか発見されている。昭和９年，寺師見国によって地下式横穴が調査され，人骨３体，鉄剣１，鉄鏃２１が発見されている。昭和１９年には梅原末治・寺師見国などによって北方３号古墳が調査されている。直径１５～１８ｍ，高さ３ｍほどの円墳で，内部主体は方形の板石積石室のようである。鉄剣１と鉄鏃５１が副葬されていた。現在消滅している。寺師の当時の記録によれば他にも２基の高塚古墳があったとされているが，そのうちの１基が現在も真中馬場に残っている。昭和４５年には，栗野町教育委員会によって小屋敷で２基の地下式横穴が調査された。ともに玄室は隅丸の長方形で平入である。１号は２体，２号は３体の合葬である。１号からは鉄剣１，鉄鏃１０，骨鏃３が出ている。２号からは鉄刀１が出ている。北方ではこの他にも池ノ川・原・堂ノ上・中郡で地下式横穴が見つかっている。

４．歴史時代

延喜式にある古代の駅のうち，大隅国府と島津駅，あるいは真斫駅の間にある大水駅の位置は現在まで不明であるが，その比定地として栗野を挙げる説がある。大水堀などの字名，距離からみた位置設定であるが，考古学的な裏付けは今のところできていない。

九州縦貫自動車道に伴って調査された山崎Ｂ遺跡では，７棟の掘立柱建物とともに刻書土器・墨書土器・越窯青磁など古代における貴重品が出土しており，当時としては強い権力を持った人

が住んでいたことを示している。近くにある木場Ｃ遺跡でも類似の出土品が出ており，この周辺に特殊な人々の集落のあったことが予想される。

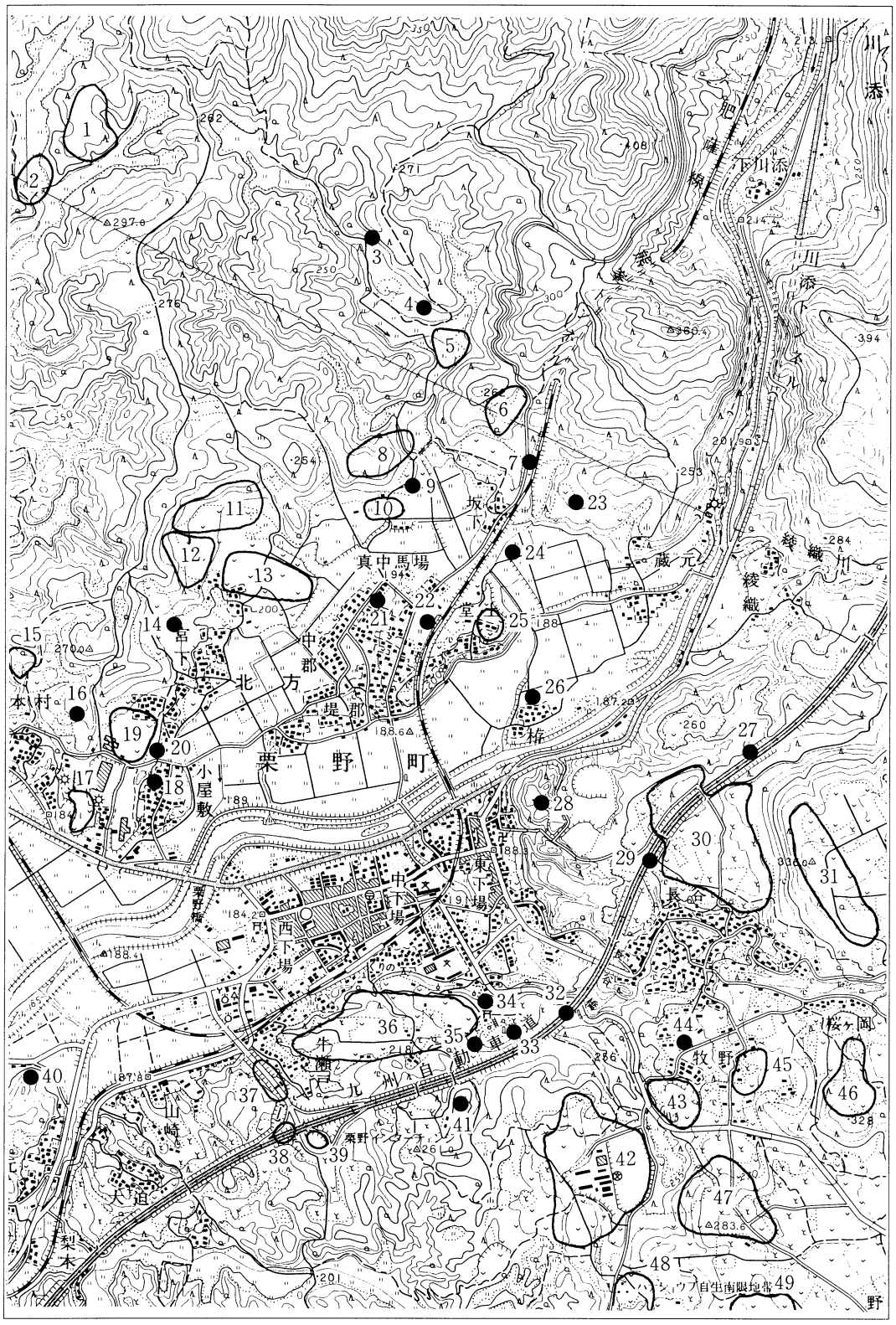
山崎Ｂ遺跡では中世のものと思われる堀様の遺構も出ている。中や周辺からは１５・１６世紀頃の青磁・白磁・陶器などが出土しており，この頃のものと考えられている。この地は江戸時代には東大寺大仏殿の柱が運ばれた道筋に当たっており，中世にも重要な道筋だった可能性がある。この堀様遺構は道とも考えられている。

栗野城(松尾城)は鹿児島県では希有な石垣をもった平城である。城内の調査がされていないため時期等不明だが，その周辺にある木場Ａ遺跡では青磁・白磁など中世の遺物や，道路など関連性のある遺構が発見されている。

これらの他にも町内各地で古代・中世の出土品が発見されており，この時期には集落の広がったことがわかる。なお，田尾原・稲葉崎には県指定史跡の供養塔群がある。

参考文献

1 『栗野町郷土史』栗野町　1975
2 林昭男・米満重満「栗野町の遺跡について」『鹿児島考古』８号　1973
3 鹿児島県教育委員会『花ノ木遺跡』(『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』１)　1975
4 鹿児島県教育委員会『山崎Ａ・Ｃ遺跡，木場Ｃ遺跡』
(『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』17)　1981
5 鹿児島県教育委員会『山崎Ｂ遺跡』(『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』18)　1982
6 鹿児島県教育委員会『木場Ａ遺跡・木場Ａ－２遺跡・木場Ｂ遺跡・堀ノ内遺跡』
(『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』21)　1982
7 鹿児島県教育委員会『国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書－昭和60年度』　(『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』37)　1986
8 五味克夫「栗野町稲葉崎・田尾原供養塔群」『鹿児島県文化財調査報告書』第13集　1966
9 河口貞徳「北方地下式横穴」『鹿児島考古』５号　1971
10池畑耕一「高塚古墳の南限とその築造時期」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会　1990



第１図　周辺の遺跡分布図

遺跡地名表

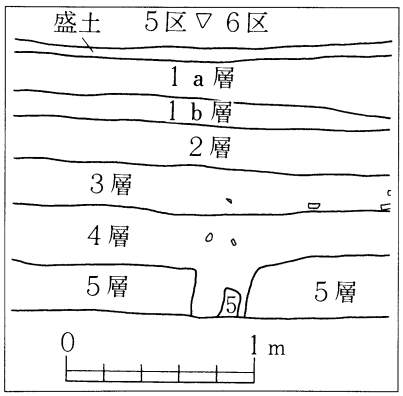
番号	遺　跡　名	所　在　地	地　形	時　代	遺　物　等	備　考
1	平田	田尾原　平田	台　地	縄	縄文(鐘崎)	
2	中尾	〃　中尾	〃	縄・歴	縄文(阿高・並木・南福寺・岩崎・西平・黒川)土師・須恵	
3	山ノ口B	北方　山ノ口	〃	弥生	土器	
4	山ノ口A	〃　〃	〃	縄(前)・弥・古	土器・成川式	
5	永山A	〃　永山	〃	縄・古	縄文(押型文・阿高式)石鏃・石匙	
6	永山B	〃　〃	〃	古・歴	土師器	
7	正階寺	〃　正階寺	〃	縄		
8	北方中尾	〃　中尾	〃	縄・古・歴	縄文・石鏃・土師	
9	麦生田	〃　麦生田	〃	旧石	細石刃・細石刃核	
10	九日田	〃　九日田	〃	旧石・縄・歴	縄文土器(出水),土師等	本報告書
11	本堂	〃　本堂	〃	縄・古・歴	縄文(阿高式)・成川・土師・石鏃	
12	宮下	〃　宮下	斜面地	縄・弥	土器・石鏃	
13	柿木原	〃　柿木原	〃	縄(早・前)・古・歴	縄文(押型文・轟式・曽畑式)・凹石・磨石・石鏃・石斧・土師・須恵	
14	宮下	〃　宮下	斜面地	縄・弥	縄文(黒川)・石鏃	
15	原	〃　原	台　地	古・歴	土師器	
16	彦崎城跡	〃　本村	〃	中世		
17	西ノ口	〃　西ノ口	〃	歴	土師器	
18	迫山	米永　迫山	〃	弥	弥生土器	
19	北方地下式横穴群	北方　小屋敷	〃	古・歴	鉄鏃・鉄剣・鉄刀・骨鏃・土師器	
20	池ノ川	〃　池ノ川	〃	弥(後)	土器片	
21	北方真中場馬	〃　真中馬場	沖積地	古	鉄剣・鉄鏃・人骨	地下式横穴
22	堂ノ上	〃　堂ノ上	舌　状台　地	弥(後)・古	土器片・土師器	〃 地下式板石積石室
23	宇都	〃　宇都	台　地	縄・古	土器・黒曜石・土師器	
24	真中馬場	〃　真中馬場	〃	縄・弥	弥生土器・黒曜石	
25	立野原	〃　立野原	〃	古	土師器	
26	上郡	〃　上郡	沖積地	弥生		
27	木場A－2	木場　本城	台　地	旧石・縄	三稜尖頭器・ナイフ・細石器	昭和53・54年調査
28	栗野城跡	〃	〃	中世		

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
29	木場B	木場　内堀	台地	縄・弥・古・歴	市来式・土師器・石鏃	昭和54年調査
30	木場A	〃　外堀	〃	旧石～歴	ナイフ・縄文	昭和54・55・63年調査
31	楠原	〃　楠原	〃	縄・古	縄文・剝片・土師器	
32	木場C	〃　諏訪岡	〃	縄・歴	縄文(岩崎)・土師	
33	諏訪岡	〃　〃	〃	古	土師・須恵	
34	諏訪岡	〃　〃	平地	弥(後)	土器	
35	諏訪岡	〃　〃	台地	縄(早・中・後)	押型文・阿高式・出水式・市来式・御領式	
36	諏訪	〃　〃	〃	旧・縄・古	縄文(前平・塞ノ神・西平・南福寺・入佐)須恵器・細石刃・スクレ・石匙・石鏃・石錐・石錘	平成4年調査
37	山崎B	〃　牛瀬戸	〃	縄(早～晩)歴	縄文(前平・吉田・塞ノ神・平栫・押型文・手向山・轟・阿高・指宿・市来・上加世田・黒川)・土師・青磁など	
38	山崎C	〃　〃	〃	縄(後)・古・歴	縄文・石鏃・石斧・土師器	
39	山崎A	〃　〃	〃	〃	縄文(出水・岩崎・市来)・土師器・須恵器・青磁・古銭	
40	下坂元	米永　下坂元	斜面	弥(後)		
41	九池	上ノ原	台地	縄・弥・古	土器・土師器	
42	花ノ木	木場　花ノ木等	〃	縄(早)・古	縄文(押型文・平栫・塞ノ神)	昭和49年調査，集石・土坑
43	牧野	〃　牧野	〃	縄	黒曜石剝片等	
44	射場平	〃　射場平		旧石器・縄(早・前)	ナイフ・縄文(撚糸文・押型文・轟・曽畑)	
45	踏切A	〃　踏切	〃	縄・古	縄文土器・土師器	
46	踏切B	〃　〃	〃	〃	〃	
47	城ケ尾B	〃　城ケ尾	〃	古・歴	土師器	
48	池ノ迫A	〃　池ノ迫	〃	縄・歴	縄文・土師器・黒曜石剝片	
49	池ノ迫B	〃　〃	〃	旧石・縄・古歴	ナイフ形石器・縄文土器・土師器・黒曜石剝片	

第3章　層　　序

工事中発見だったため部分的に削平を受けている所が多いが，基本的には次のような層をなしている。2層～4層が包含層で，それ以外には遺物が含まれていない。

1層（耕作土）　褐色の砂質土であるが，大きく2つに分かれる所もあり，下の方がやや黒みを帯びている。ここは水田であるため1層の下部には鉄分が固まって堅くなっている。場所によっては1層の上に盛土がある。



第2図　柱状断面図

2層（黒ニガ）　俗に黒ニガと呼ばれている黒色火山灰土で，土師器の包含層である。礫も多く含まれる。

3層（アカホヤ）　俗にアカホヤと呼ばれる黄褐色砂質土で，この層が当遺跡では主要な包含層となる。後期～晩期の土器が入っている。アカホヤの下部には幸屋火砕流と呼ばれる黄褐色軽石層が堆積している所が多いが，ここでは部分的に残っているのみで残存度は良くない。

4層　パミスを含んだ暗黒褐色土である。

5層　明茶褐色軽石層で，上層の土が入り込みやすく各所に落ち込みが見られる。

6層　暗茶褐色粘質土で微石粒を多く含んでいる。

7層　この台地を形づくっているシラスである。厚く堆積している。

第４章　調査の概要

第１節　概要

１．試掘調査

遺跡が発見された時，工事はほとんど終わっていたため，元の地形は残っていなかった。そのためグリッドは整地された段（４段になっていた）にほぼ平行に設定した。最上段は東南隅を基点にして２０ｍごとに２ｍ×２ｍのグリッドを設定し，南から１・２・３……１２と呼称した。グリッド１～３は上層が削平され，盛土の下には黒色土がみられる。その下にはパミス層，シラス層と続く。グリッド３のパミス層は厚い。グリッド４～８は土師器を包含している黒色土層が残存している。グリッド７ではこの層に礫が多く見られる。その下にはアカホヤ層があり，グリッド５・６・８では縄文時代後期の土器が包含されている。さらにパミス層へと続く。グリッド９・１０はアカホヤ層以下が残っており，グリッド１０ではアカホヤ層に縄文時代後期の土器が含まれる。グリッド９～１１にはパミス層がみられない。グリッド１２ではパミス層がまだらに残っている。グリッド１１・１２にはアカホヤ層がない。アカホヤ層に黒色土の落ち込みがいくつかみられる。

二段目は東南隅を基点にして４０ｍごとに２ｍ×２ｍのグリッドを設定して，南からグリッド１３・１４・１５……１９と呼称した。グリッド１３は黒色土以下だけが残っている。グリッド１４～１７は土師器を包含する黒色土以下が残っており，グリッド１４・１６・１７は水田層も残っている。アカホヤ層には縄文時代後・晩期の土器が含まれており，特にグリッド１６・１７には多い。グリッド１８は盛土が厚く１ｍ以上ある。グリッド１９・２０には遺物がない。

四段目も東南隅を基点にして４０ｍごとに２ｍ×２ｍのグリッドを設定し，南からグリッド２０・２１・２２と名付けた。グリッド２０は盛土の下に黒色土，パミス層と続く。グリッド２１も耕作土の下に黒色土，パミス層と続く。グリッド２２は黒色土・パミス・シラスと続くがパミス層に黒色土のはいったピットが４本見られる。

三段目も同様に東南隅を基点にして４０ｍごとに２ｍ×２ｍのグリッドを設定し，南からグリッド２３・２４……２７と名付けた。グリッド２３は耕作土以下残っているが，グリッド２４・２５は耕作土が削られている。グリッド２６は盛土の下にアカホヤ層がある。グリッド２７はもとの土手にあたっており，東および北は盛土が厚い。

グリッド２８～３４は一段目，二段目と，一段目の上の段のうちアカホヤ層が表面付近にある周辺に設定した。

調査面積は約１８５㎡である。

２．本調査

計画された排水路の幅は１．５ｍであったが，本調査は工事中の掘削，遺構の広がり等を考えて広くとって幅３ｍで実施した。調査区域は三段目に遺物の出土が少なく，四段目にはほとんど

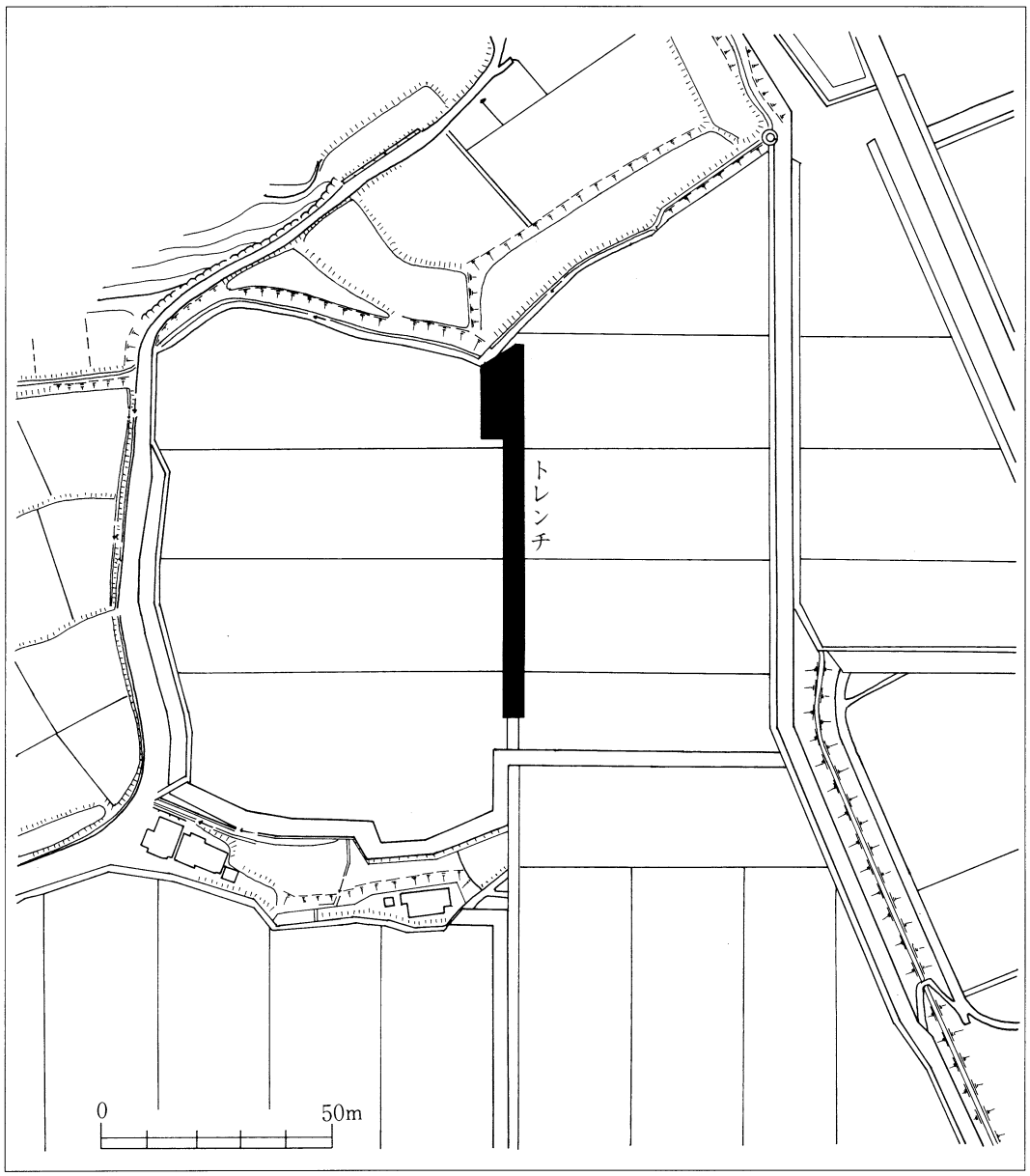
出なかったという試掘調査の結果を考慮して長さ８０ｍに限定した。西側は工事予定のされているぎりぎりまで設定したが，東側は土器の多く出土する周辺までに限定して実施した。

西の方から１０ｍおきに区の設定をし，それぞれ１区，２区……８区と呼んだ。１・２区については排水路が両方に広がるという工事の関係で南へ３ｍ拡張し，６ｍ幅に拡張した。

６層は１区で西から東へ向かってかなりの傾斜で下降しているが，２区になると安定して，やや落ち込むところもあるが，ほぼ水平になっている。主たる包含層となる３層は１区の中間部あたりから東に残っており，東へ向かって緩やかに下降しているが，６区あたりからほぼ水平になっている。

第３図　整備前の水田区画と試掘グリッド配置図

土器・石器などは層位的には2層・3層と4層から多く出ているが，4層は直上のみに限られる。ほぼ全域に密集した出土状況を示しているが，アカホヤ（3層）の残っていない1区西半分と，5区の東半分以東では出土量が少なく，7・8区にはほとんど出土していない。平安時代の土師器等は主として4区から6区にかけて散布しており，5区東半分と6区で縄文土器がほとんど出土しないのと対象的である。アカホヤ上面で柱穴が4検出されたが，調査面積が狭かったためつながりを確認出来なかった。黒色土が入っていることから平安時代のものである可能性がある。



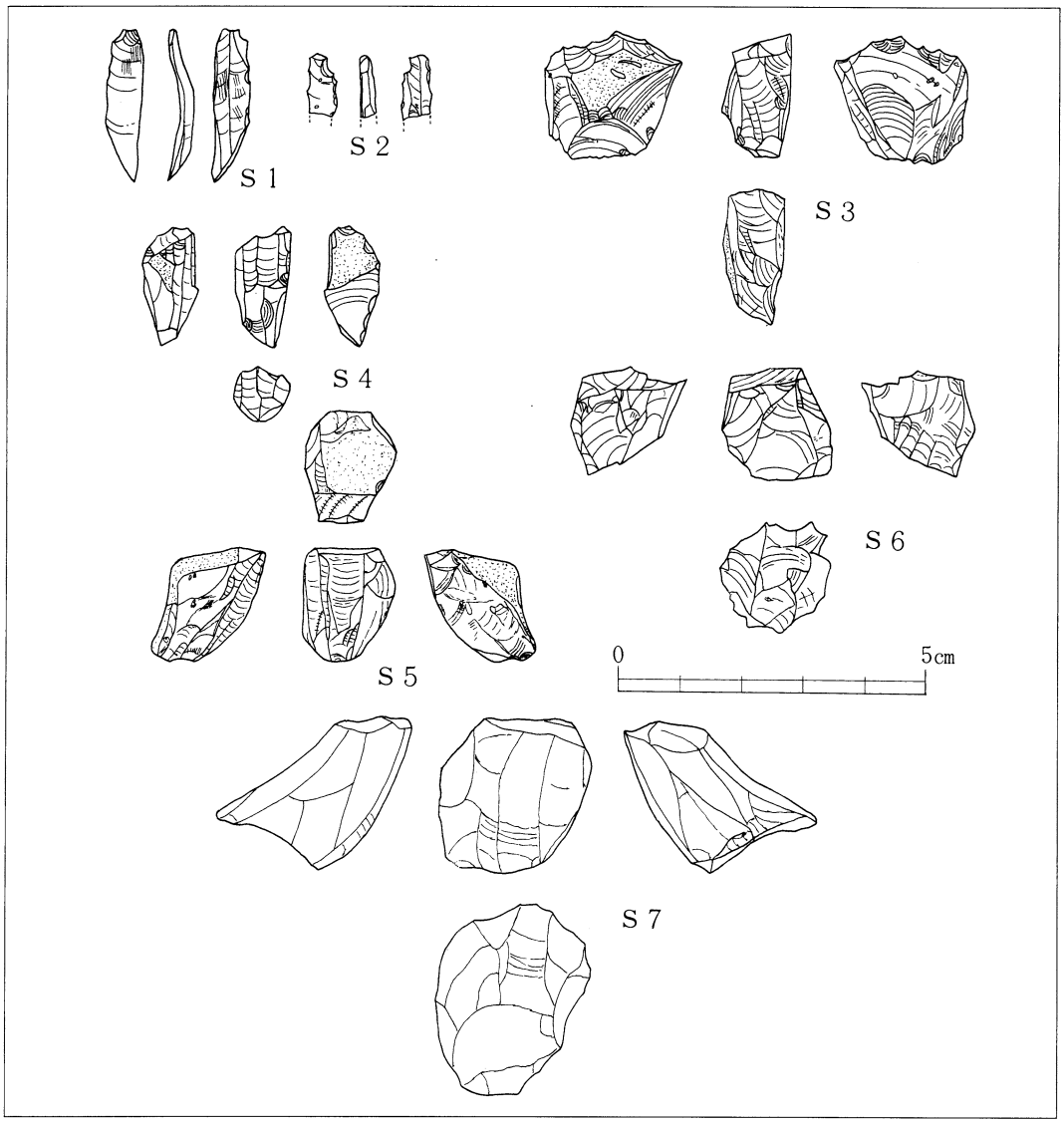
第4図　整備後の水田区画と本調査トレンチ位置図

第２節　旧石器時代

隣接した麦生田遺跡では多くの細石刃・細石刃核が採集されている。当遺跡もその延長部にあると思われ，数点の石器が採集されている。図化した石器の他にもピエスエスキーユなどの旧石器時代に属する石器が含まれていると思われるが，識別できなかった。

１．細石刃（第５図**Ｓ１・Ｓ２**）

２点出土している。**Ｓ１**は長さ２．５cmの完形品である。良質の黒曜石で作られており，外に強く弯曲している。表面の中央に稜が１本あり，右側辺は刃こぼれが目立つ。**Ｓ２**は長さ１cmの頭部である。灰黒色を呈する良質の黒曜石を用い，表面の中央に２本の稜がある。表面は下から打痕がみられ，裏面の右側辺には刃こぼれがみられる。



第５図　石　　器（1）

2．細石刃核（第５図**Ｓ３～Ｓ７**）

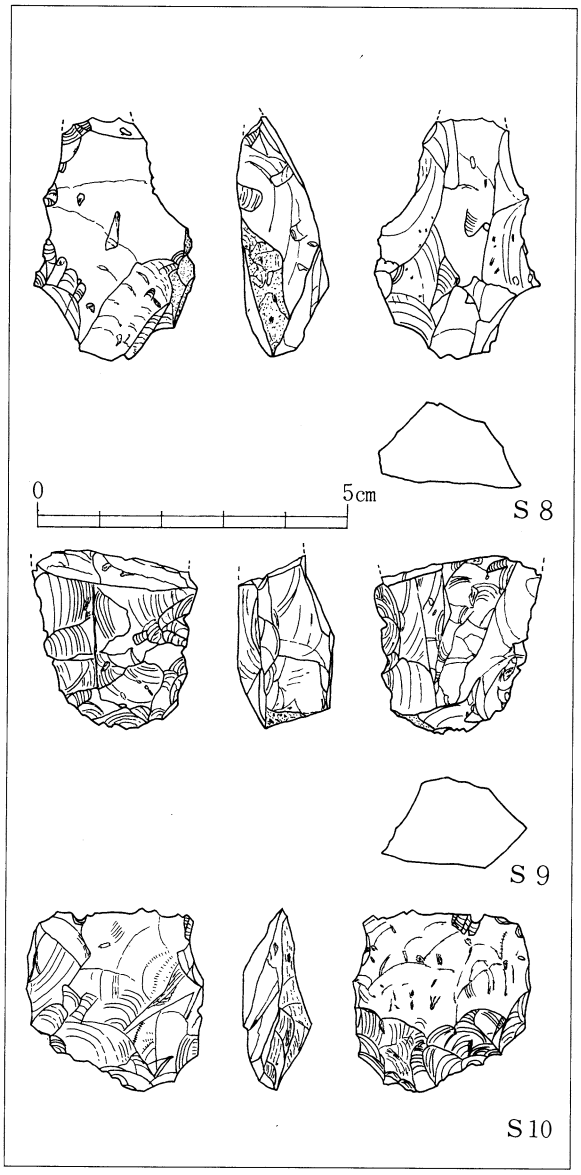
５点出土している。すべて良質の黒曜石製であるが，他が透明色を呈しているのに対し，**Ｓ６**は灰黒色を呈している。**Ｓ３**は周辺から敲打を加えて扁平な亀甲状に作り，その一面を打面としている。**Ｓ４**は最後の敲打で約１cmの短い石刃しかとれず，後の部分も欠けて小さくなっている。**Ｓ５**は自然面を多く残しているが，打面は丁寧に打ち欠いている。気泡が多い。**Ｓ６**は打面を数面にもち，各方向から剝いでいる。**Ｓ７**は２次的に火を受けて白みがかっており，表面に亀裂が目立つ。打面の後が欠損しているが，剝離面が幅広く剝がれた，割合に大きな石核である。これらはいずれも打面角度が鋭角になっている。

3．三稜ポイント（第６図**Ｓ８・Ｓ９**）

２点出土している。**Ｓ８**は４区３層で出土した黒曜石製のもので，頂部が欠けている。長さ３．９cm，最大幅２．６cm，厚さ１．４cmの部厚いつくりで，表面からみて左側辺の基部付近に自然面を残している。縦長の剝片を用いており，表面は周辺から中央に向かって大きな打撃を加えて調整している。裏面は１次剝離面を大きく残しており，２次的調整はほとんどみられない。**Ｓ９**は５区３層で出土した黒曜石製のもので，気泡が多い。丸みを帯びた基部のみが残っており，表面の右側及び基部に自然面を残している。長さ２．９cm，最大幅２．７cm，厚さ１．５cmの部厚いもので２本の稜線がみられる。表面の左側は周辺から打撃を加えて調整し，裏面の左側も周辺から打撃を加えて調整している。

4．台形石器（第６図**Ｓ１０**）

６区３層で出土した黒曜石製のものである。長さ２．９cm，幅２．９cm，厚さ１．１cmの完形品で，基部はバルブの部分を細かく打ち欠いて形を整えている。



第６図　石　　器（2）

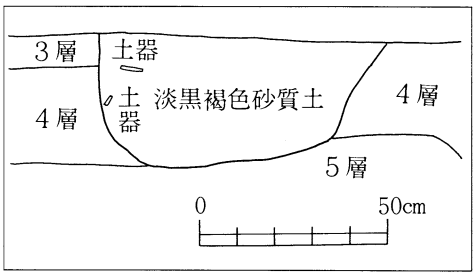
第３節　縄文時代

１．遺構

１）土坑

５区の３層上面で黄褐色土を多く含む淡黒褐色砂質土のはいった土坑が検出された。直径７５cmの略円形を呈し，深さが３０～３５ｃｍある。中には焼土もはいっており，炉近くにある縄文時代後期の土坑と思われる。

この土坑以外にも３層上面でいくつかの土坑が検出されたが，形状等がはっきりしなかった。



第７図　土　　坑

２．出土遺物

出土遺物には土器・土製品・石器がある。

１）土器

中期から晩期にかけて多種の土器が出ている。中期から後期にかけての深鉢を口縁部や胴部の文様，器形・胎土などから１８種に分けた。底部や，深鉢以外の器種は別項目にした。

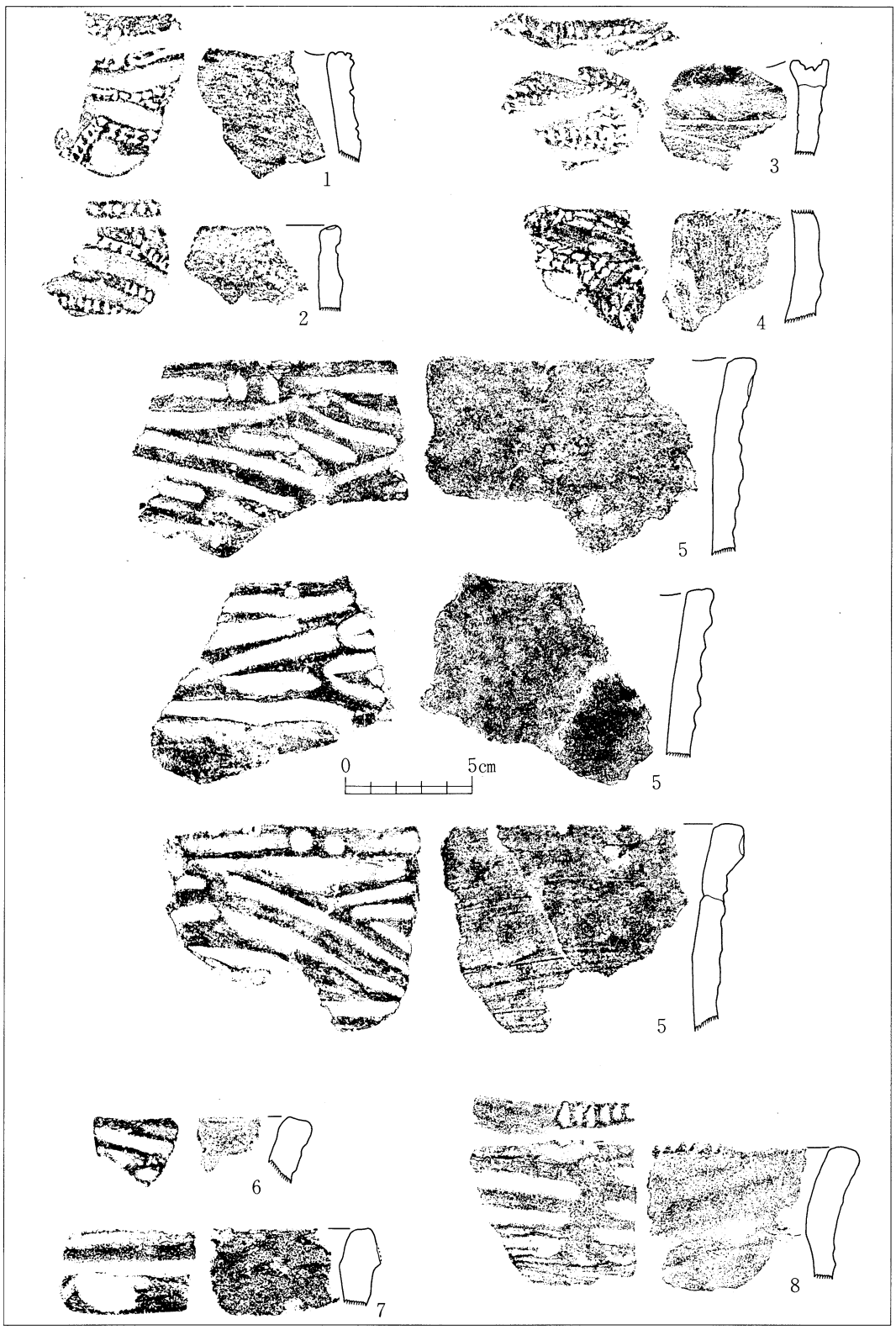
（１）Ⅰ類（第８図**１**～**４**）

太くて浅い凹線の間に刺突文のある土器で，胎土中に多くの滑石を含んでいる。口縁端部は矩形を呈し，口唇部には刺突文あるいは刺突文十沈線文がみられる。**１**は波状の口縁となり，**３**は突起部を有する。刺突文の施文具としては竹様のもの，二枚貝，巻貝などが考えられ，**２**は半月形を呈している。内面は粗いヘラ横ナデ，細かい貝殻条痕（**１**）などで仕上げている。

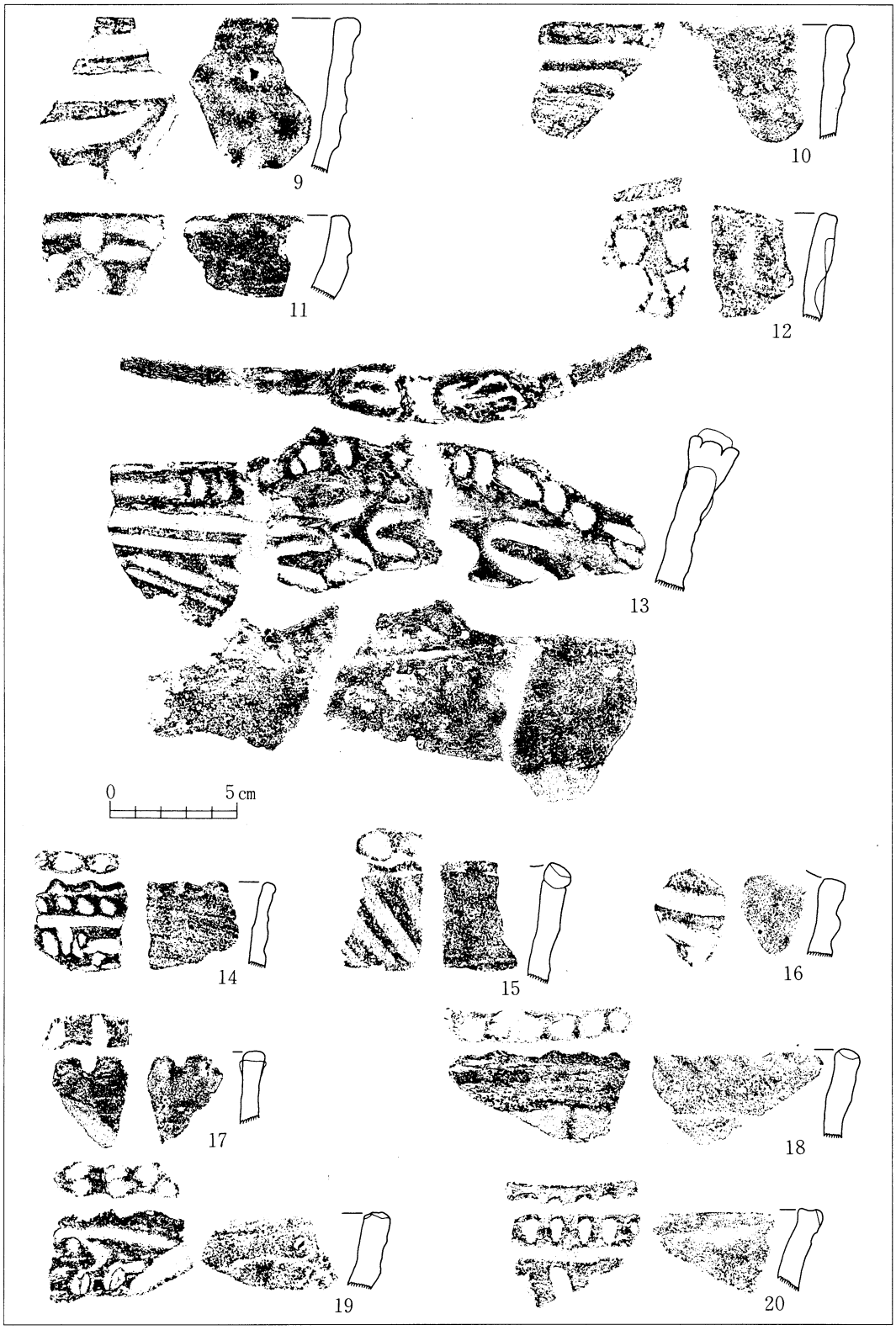
胎土は石英・白色石・角閃石などの細かい粒を多く含むもので，これに多くの滑石を含む。淡茶褐色を主体とした色を呈しているが，外面は赤みがかったり，暗かったりしている。焼成は良く硬質に焼けている。

（２）Ⅱ類（第８図～第１０図，**５**～**35**）

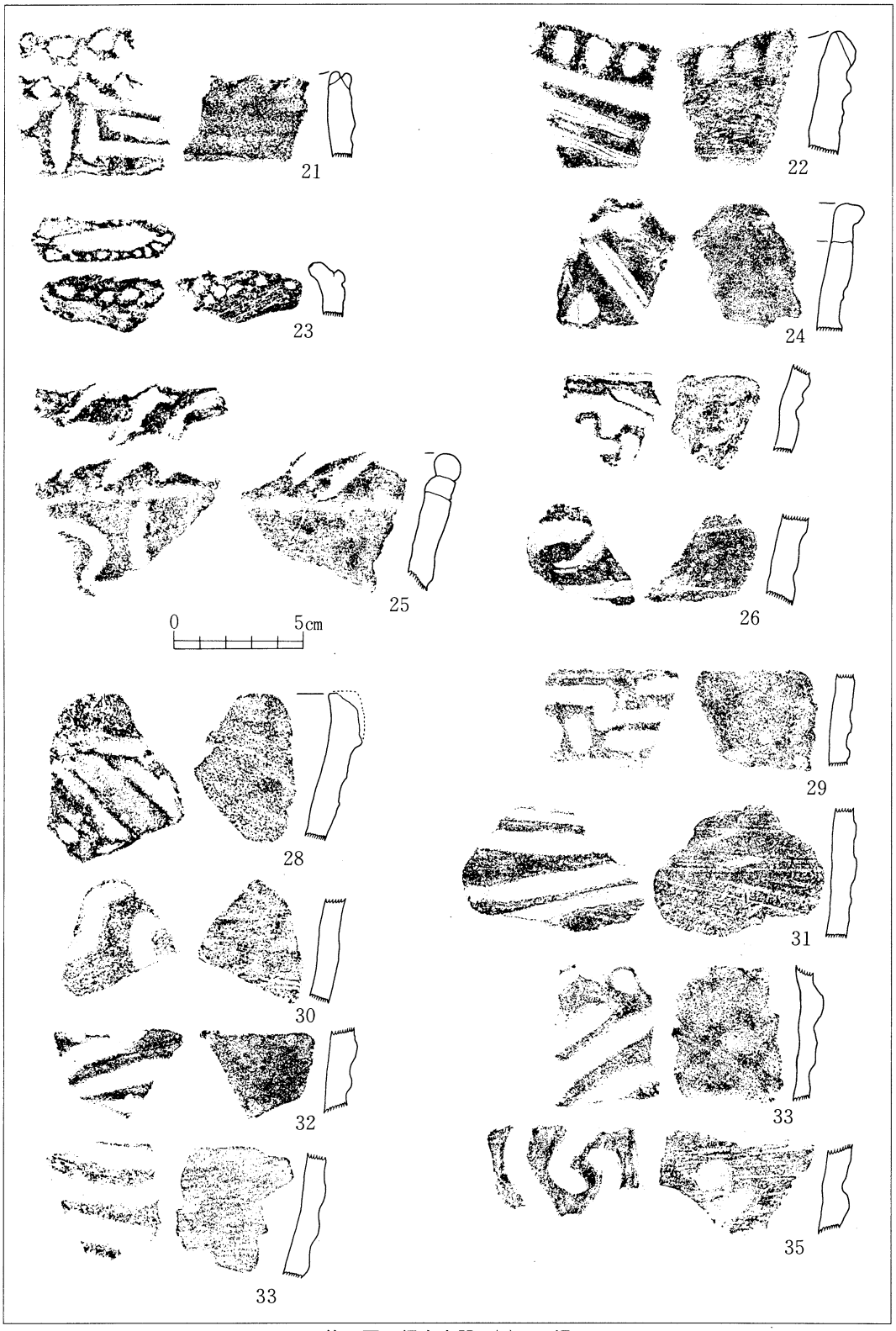
太い凹線による横線・斜線・縦線・曲線，押圧文などによって文様構成される土器である。口縁部は細いものもあるが，概して太くなっておわる。平縁のものと，波状になるもの（**６**・**13**・**16**・**22**）とがある。また粘土を貼付けて突起を作ったもの（**８**・**13**・**15**・**17**・**23**～**25**）があるが，**13**や**23**・**25**は粘土ひもを貼付けたり，それをさらにねじり合わせて貼付けたりして複雑な文様を構成している。口唇部は丁寧に横方向にナデて平らに仕上げたものと，ここにヘラで押圧したもの（**14**・**15**・**17**～**22**）がある。ヘラの押圧は口唇部に押圧するもの，外から斜めに押圧するもの，外からと内からの両側から押圧するものの３種類が有る。



第８図　縄文土器 (1)　Ⅰ類、Ⅱ類



第9図　縄文土器 (2) Ⅱ類



第10図　縄文土器 (3) Ⅱ類

5は茶褐色の地色に赤っぽい茶褐色の発色をしたもので，同一個体と思われるものが図化したもののほかに４点ある。９mm大ほどの礫も多く含む粗い胎土で，口縁端付近に短絡線と２個の押圧，その下には斜方向凹線と横方向短絡線が組み合わさった文様を構成している。**10**は凹線の下のナデ整形がケズリに近い粗いナデである。**12**は逆三角形の深い押圧文がみられる。**13**は突起の部分にＳ字状文がみられ，そこから左右に横方向の凹線が対称的に引かれる。**14**は横と三日月形の組合せである。**18**は条痕状のナデ整形をなす。**23**は突起部にヘラの刺突文がみられる。

胴部（**26**～**35**）も口縁部と同じくヘラ様のもので凹線がひかれる。縦方向・斜方向・半月形の組み合わさったもの（**26**），かぎ状に縦・横の短絡線で結んだもの（**29**）や，曲線・斜線・横線のものなどがある。**28**は口縁部に粘土を貼付けて端部を太くしたもので，貼付部が剝脱している。

32～**35**は滑石を多く含む胎土のもので文様は横線・斜線（**32**～**34**）あるいは弧状で構成される。**33**・**35**は深い凹線で裏がややふくらむ。内面はヘラによる丁寧な横ナデのものが多いが，**35**のように浅い貝殻条痕のものもある。

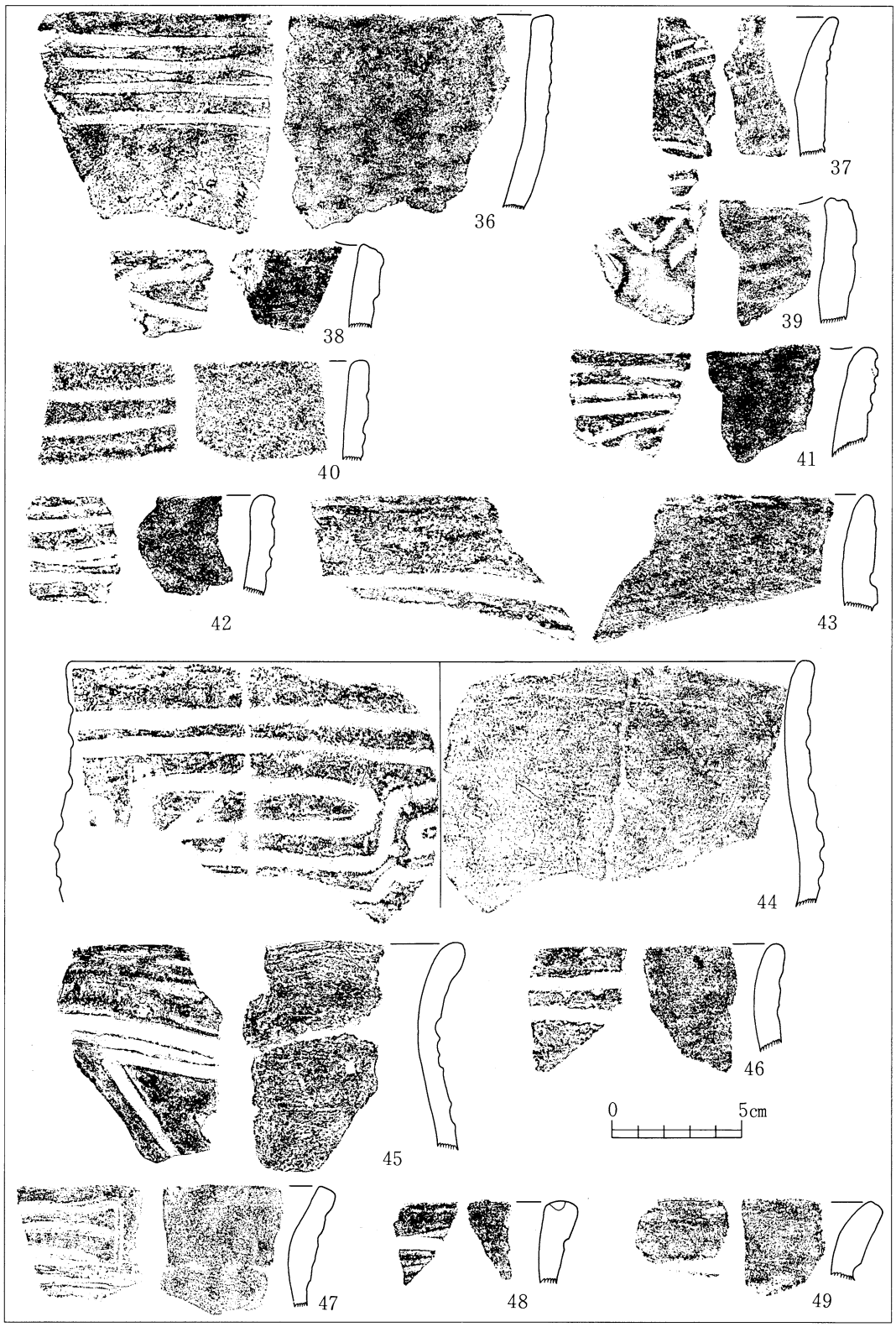
胎土は石英・白色石・黄色石・茶色石・雲母などの細かい石を多く含む砂質土である。淡茶褐色のものが多いが，茶褐色・暗茶褐色・乳茶褐色・暗黄褐色のものもあり，外面はススが付着して黒っぽいものがある。概して焼成は良好であるが，時に悪くてもろいものも含まれている。

（３）Ⅲ類（第１１図～第１４図，**36**～**84**）

Ⅱ類に比べてやや細くて浅い凹線文様のみられる土器で，口縁へまっすぐのびるものと，やや外反するものとがある。口縁部は平縁で断面が角のつぶれた矩形あるいは丸みをもつもので，横・縦あるいはそれの組み合わせ，弧状，三角文などがあるもの（**36**～**56**・**58**），突帯あるいは口縁端近くにヘラ押圧・貝殻押圧文のあるもの（**57**・**59**～**62**），口縁端あるいは口唇部に押圧のあるもの（**54**・**63**・**64**・**66**～**70**），口唇部に突起あるいは貼付のあるもの（**60**・**65**・**71**・**72**）などに分けられる。平縁の中には波状口縁となるものもある（**38**・**39**・**41**・**54**）。

39は口唇部に沈線がみられる。**41**は口縁端近くに粘土を貼付け厚くしている。**44**は口縁直径が２９cmあり，横線の下に雷文風の文様を描いている。**50**は口縁直径が３４cmある。**51**はわらび手状の文様と屈曲する直線とからなる。**48**・**60**は端部が太くなっており，**52**は端部に粘土ひもを貼付けて肥厚させている。**53**は端部が強く外反する。**57**・**59**は口縁端近くに二枚貝の押圧文があり，その下に凹線文が描かれる。**61**は口縁端あるいは少し下に粘土ひもを貼付け，そこにヘラの押圧が施される。**66**は口縁に右下がり凹線と押圧が施される。文様部分はヘラの丁寧な横ナデだが，その下は粗いナデである。**71**は上下にヘラによる横方向短絡線がありその間を左下がりヘラ斜線でうめている。突起部だけにヘラの押圧がみられる。**72**は粘土ひもをねじって貼付けている。**74**は弧状の凹線がみられる。**77**は胴部中ほどでふくらみ，頸部でくびれ，外へ開きながら口縁へ向かう器形をしており，凹線は肩部から上にみられる。内外とも割に粗いヘラナデである。

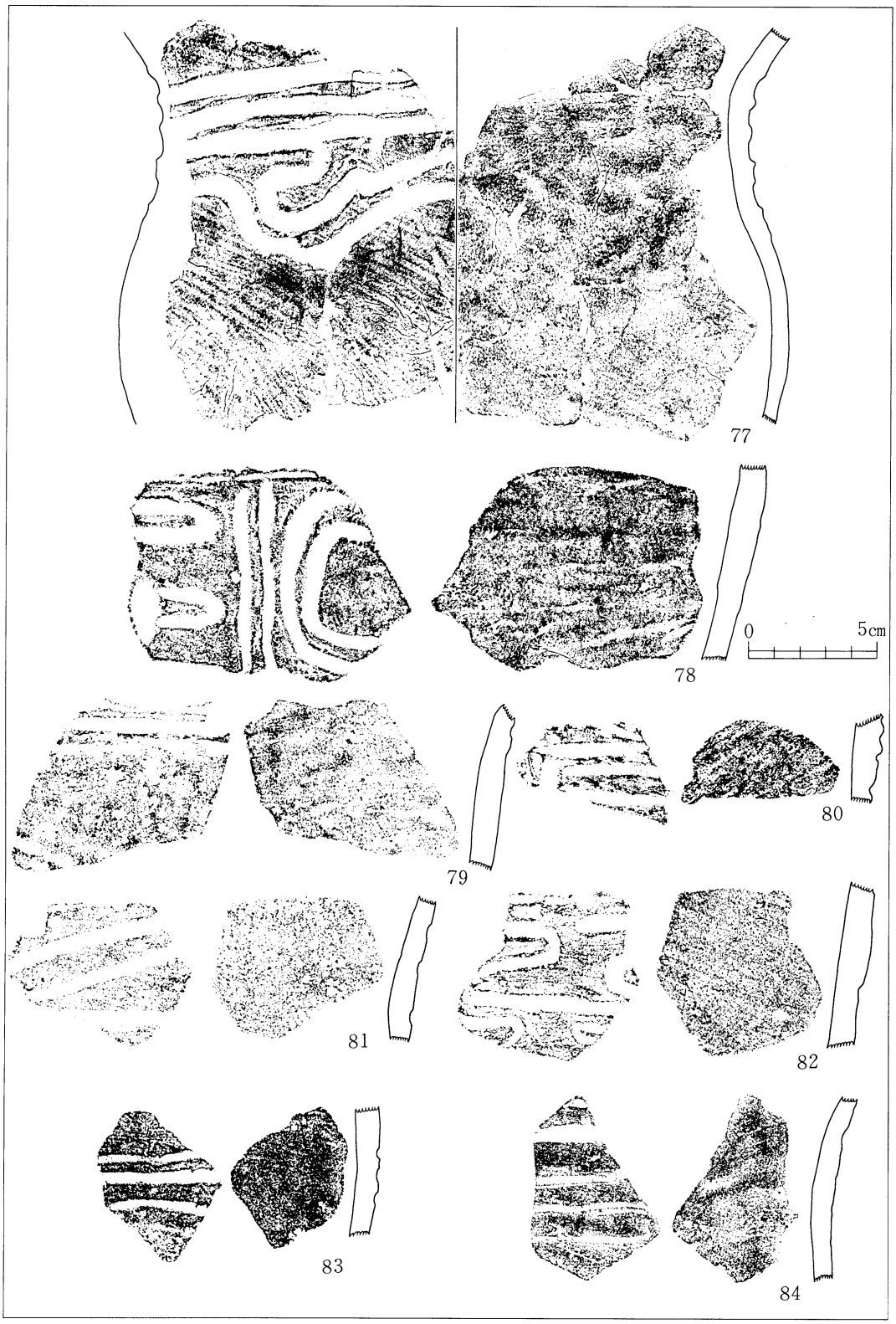
整形はヘラ様のもので割と丁寧に横ナデをしているが，外面の凹線の下は粗くヘラナデするものがある。胎土は石英・白色石・黄色石・茶色石・角閃石などの割と粗い石粒を多く含む砂質土である。淡茶褐色を呈したものが多い。焼成はあまり良くなく軟質である。



第11図　縄文土器 (4) Ⅲ類

第12図　縄文土器 (5) Ⅲ類

第13図　縄文土器 (6) Ⅲ類



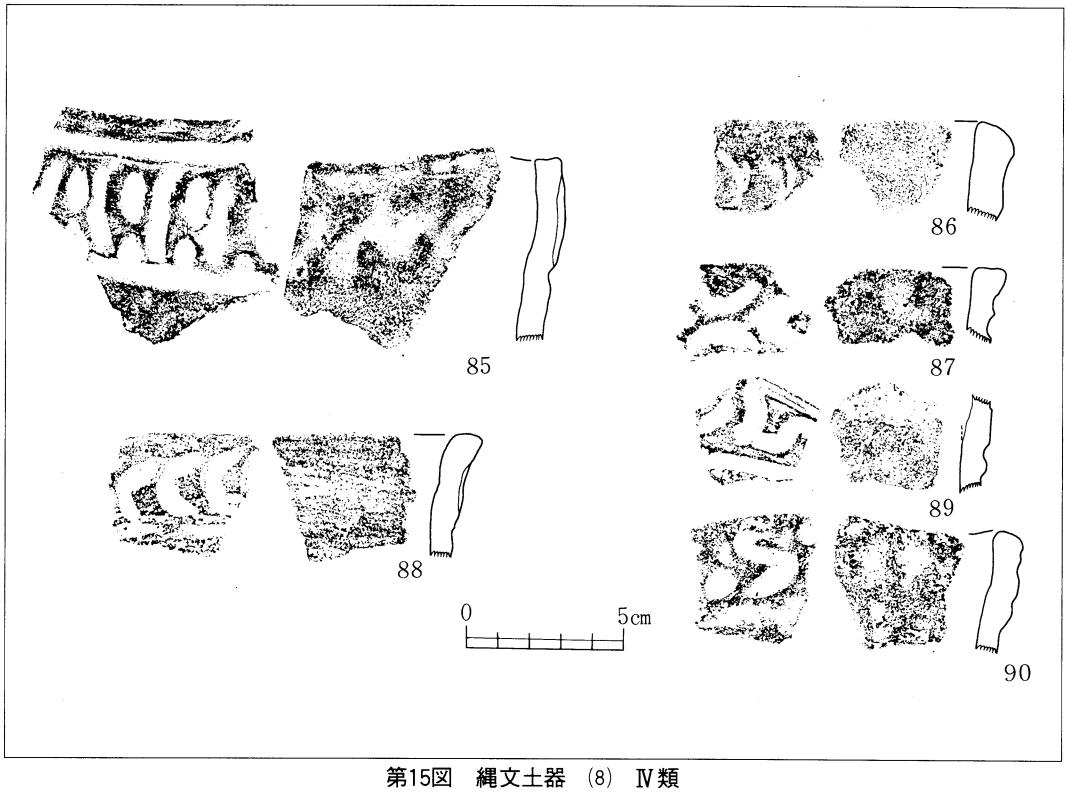
第14図　縄文土器 (7) Ⅲ類

（4）Ⅳ類（第１５図・第１６図，**85～109**）

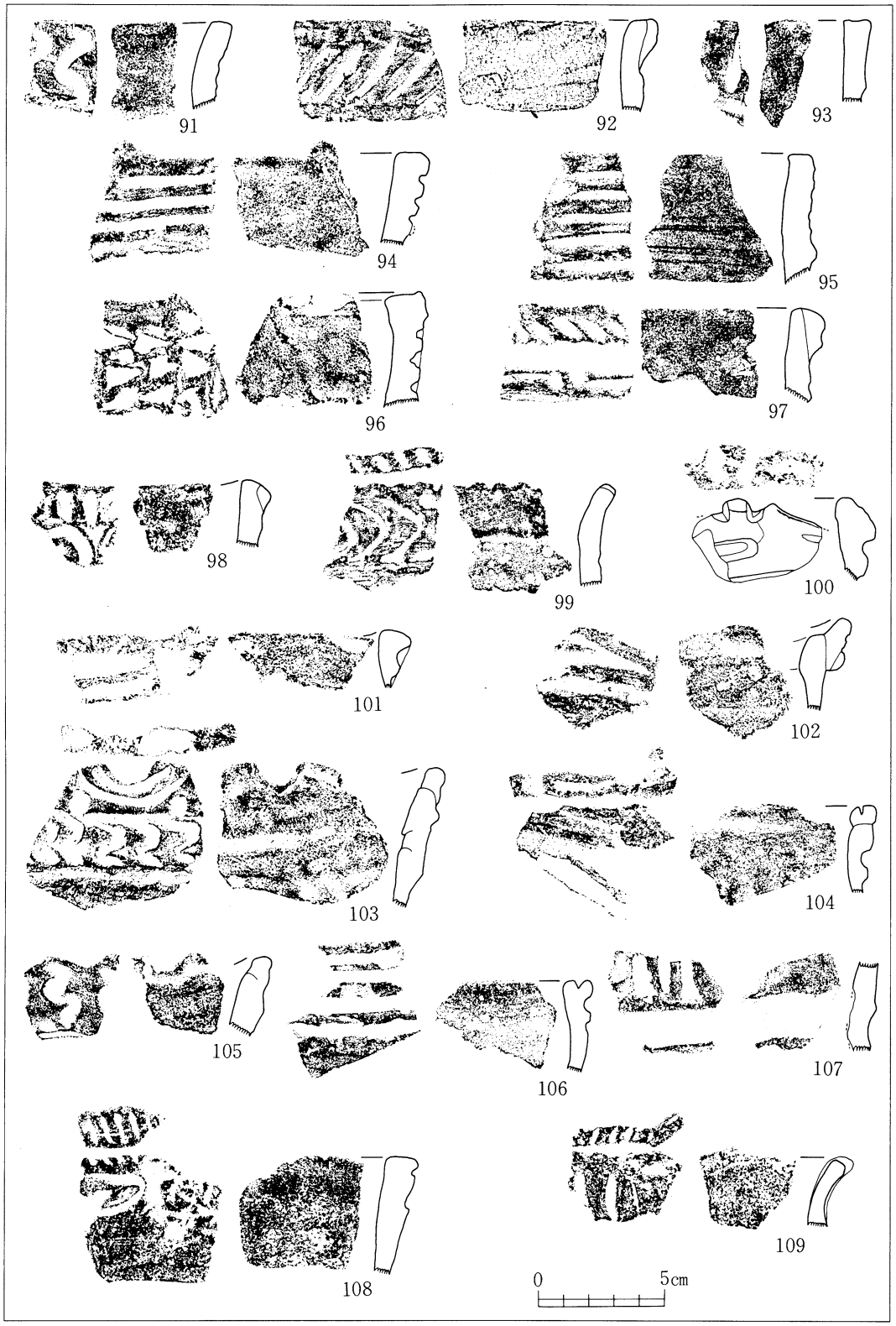
縦・横線，Ｓ字状文，半月形文，ノの字文などをヘラで描いた土器で，生がわきの時，削るため文様の端部がきちんとならないものもある。

口縁部は平縁のもの（**85～96**），口唇部あるいは口縁端部に刻みのあるもの（**97～99**），突起のあるもの（**94・96・100～109**）がある。

85は波状口縁で，横線の上に三日月文と押圧文が交互に描かれる。内面は押圧が深いためでこぼこしている。**86～88**は三日月文，**89～91**はＳ字状文が描かれる。**95**は横線の下に突帯がみられる。**96**は生がわきのあと三角文がある。**97**は口縁端部に粘土を貼付けて厚くした後，斜方向の押圧文を付し，その下に雷文風の凹線文がつけられる。**102**は口縁端に粘土を貼付けて突起部を厚くし，そこに生がわきの後，凹線を引く。**103**は貼付部，積上げ部の痕跡がよく残っている。**106**は口唇部に沈線が引かれる。内外ともヘラで横ナデしているが，外面文様の下部はヘラで粗くケズっているものがある。胎土はⅢ類とほとんど同じである。茶褐色あるいは淡茶褐色を呈するものが多く，焼成は概して良く堅く焼けている。



第15図　縄文土器（8）Ⅳ類



第16図　縄文土器 (9) Ⅳ類

（5）V類（第１７図～第１９図，**110～145**）

口縁部がやや肥厚し，そこにヘラによる凹線や押圧文などの文様を描くもので，文様によって6類に小分類できる。

110～125は縦方向の短い凹線が引かれるものである。この中には沈線風のもの（**111～113,116・119**），口縁端に貼付突帯のあるもの（**116・123～125**）などがある。突起部がつくものもあり（**111～114,118・122・123**），これは口唇部にヘラの押圧文が付される。**114**は粘土ひもをねじって貼付の突起部を作っている。**115**は口縁直径が24cmあり，文様帯の下はヘラの粗い斜方向ナデ仕上げである。**116**は口縁直径が31.5cmあり，肥厚部分は貼付によって作り，丸みをもった器形をしている。**119**は口縁直径が24cmで口唇部にはヘラ刻みがみられる。**118・120・121・123**は内面に稜をもって屈曲しており，**120**は口唇部に刺突文がある。浅い縦凹線は整然としていない。**122**も突起部を粘土ひものねじり貼付けで作り，ねじり貼付部分以外の口唇部はヘラ押圧がみられる。外面に積み上げ部分の痕跡を顕著に残し，ヘラの縦方向凹線と一緒になって格子状文様となっている。**123**はヘラ凹線を生がわきの状態で施している。**124**は口縁端に貼付け突帯が顕著に残る。**125**は口縁部にヘラ凹線があるが，その上に横方向凹線と押圧文が付される。

126～135は斜め方向に短い凹線が引かれるもので，いくらか幅の広いものと沈線のもの（**133～135**）とがある。**127**は口縁直径が25cmあり，胴部上半は直に近いが，下半になると内弯する。数か所に貼付突起がみられ，その部分だけ口唇部にヘラ押圧がみられる。**128**は口縁端近くに細い肥厚帯を作り，浅い斜方向凹線はその下から始まっている。**130**は斜方向凹線の間に2段となる斜方向短絡線が引かれる。口縁直径は21cmあり，口縁部と胴部の間はくの字状に曲がる。**131**は数本の斜線を囲むように上から横へ竹管文が巡っている。**133**は波状口縁の突起部にあたるが，この部分に3か所のヘラ押圧がみられる。

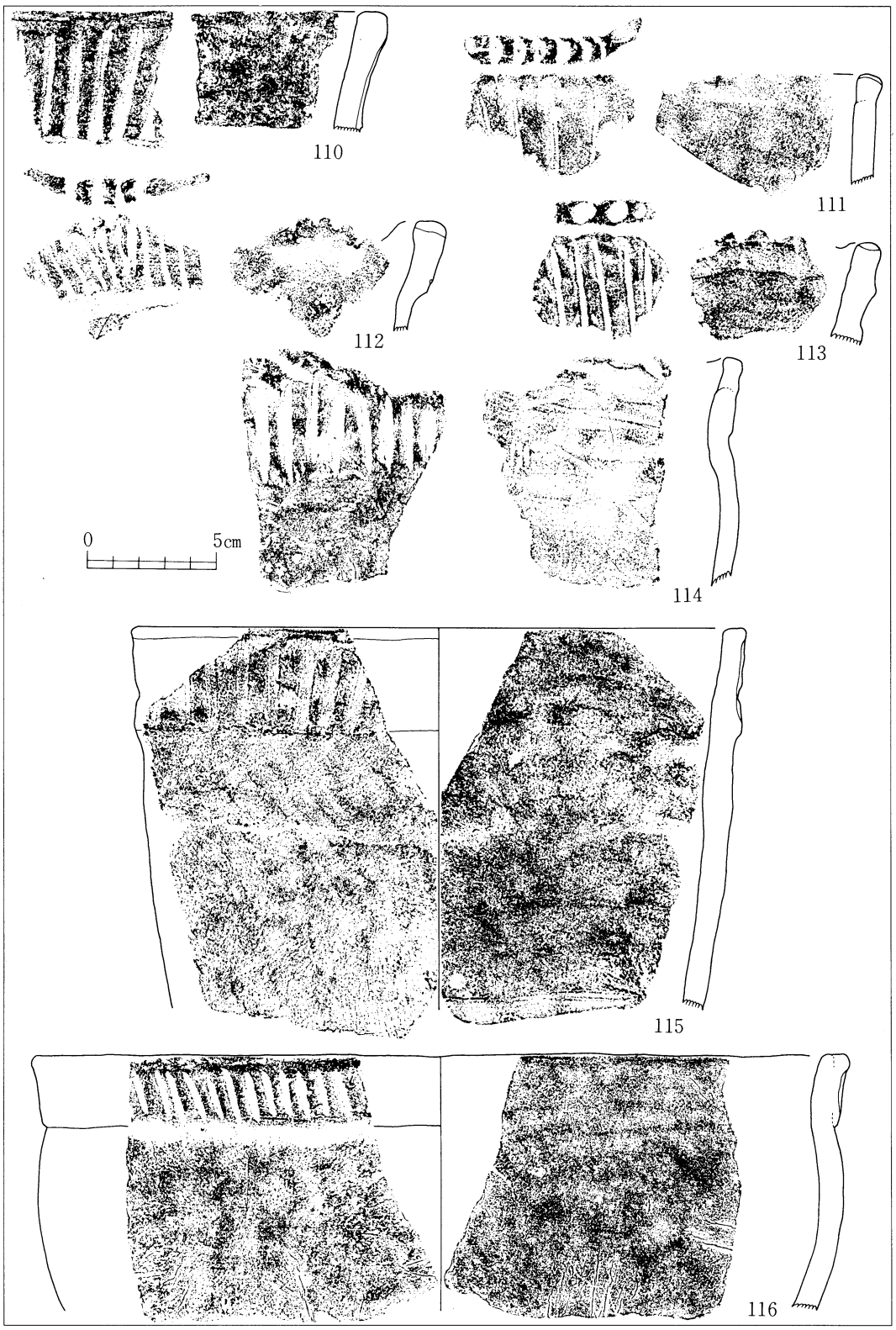
136・139は波状口縁の突起部付近で，三日月形の沈線が施される。**139**は粘土ひもをねじって貼付けている。

137・138・140は刺突文のみられるもので，**137**は突起部に粘土ひもをねじって貼付けている。**138**は口縁直径が23cmあり，まっすぐのびる器形を呈している。

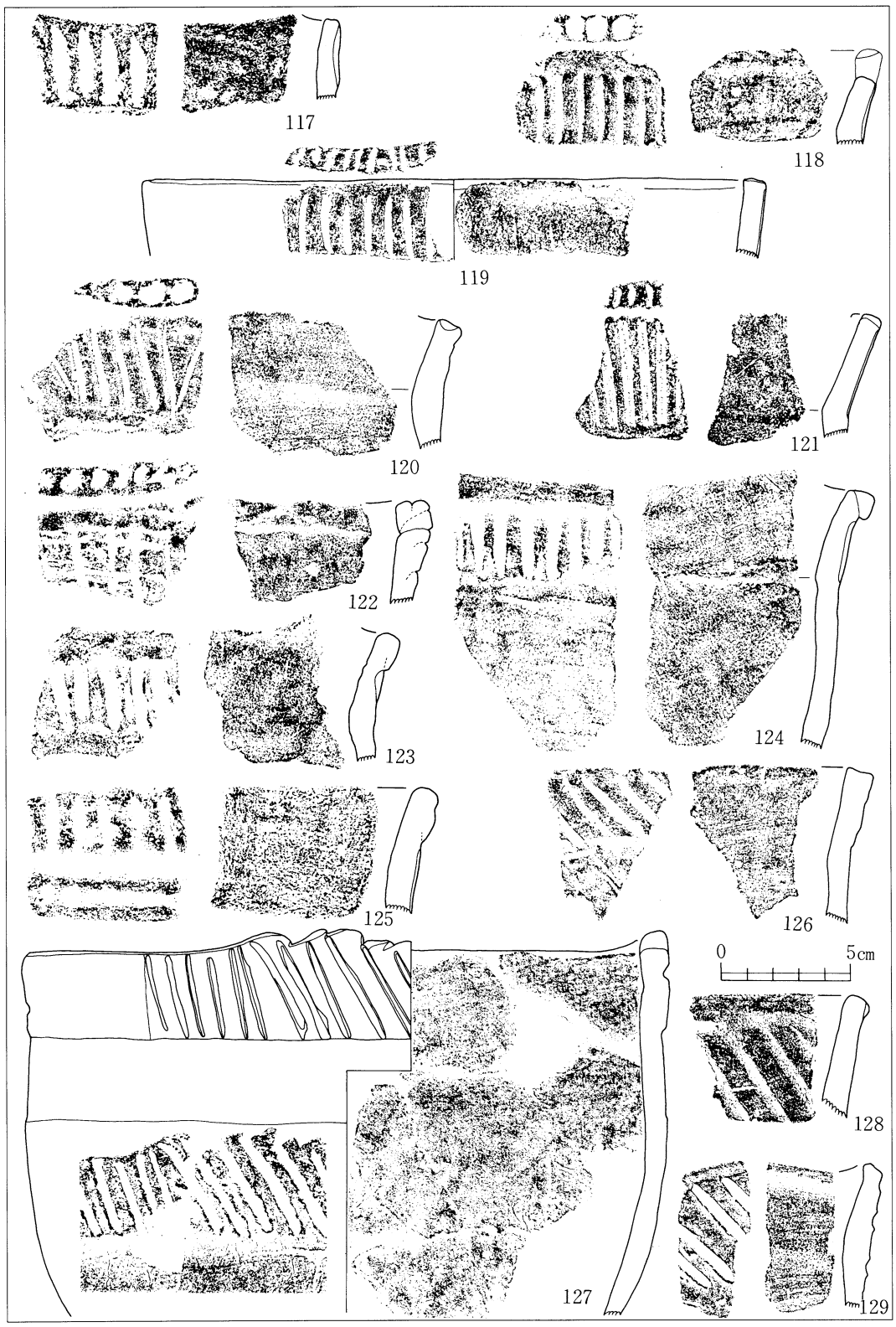
141～144はヘラ押圧文を主体とし，これにヘラ短絡線や横線などを組み合わせている。**141**は積み上げ痕が内面に明瞭に残り，**142・143**は外面に粘土ひも・粘土帯を貼付けて口縁部を肥厚させている。**144**は粘土ひもをねじって貼付けている。

145は肥厚帯の中央部が深くくぼみ，上下に突帯があるようにみえる。口縁直径が25cmほどあり，口唇部には浅い沈線がみられる。くぼみ部は縦方向ヘラ凹線のあとヘラ横ナデで仕上げ，下の突帯には部分的に沈線がみられる。その下に斜方向のヘラ凹線がみられる。

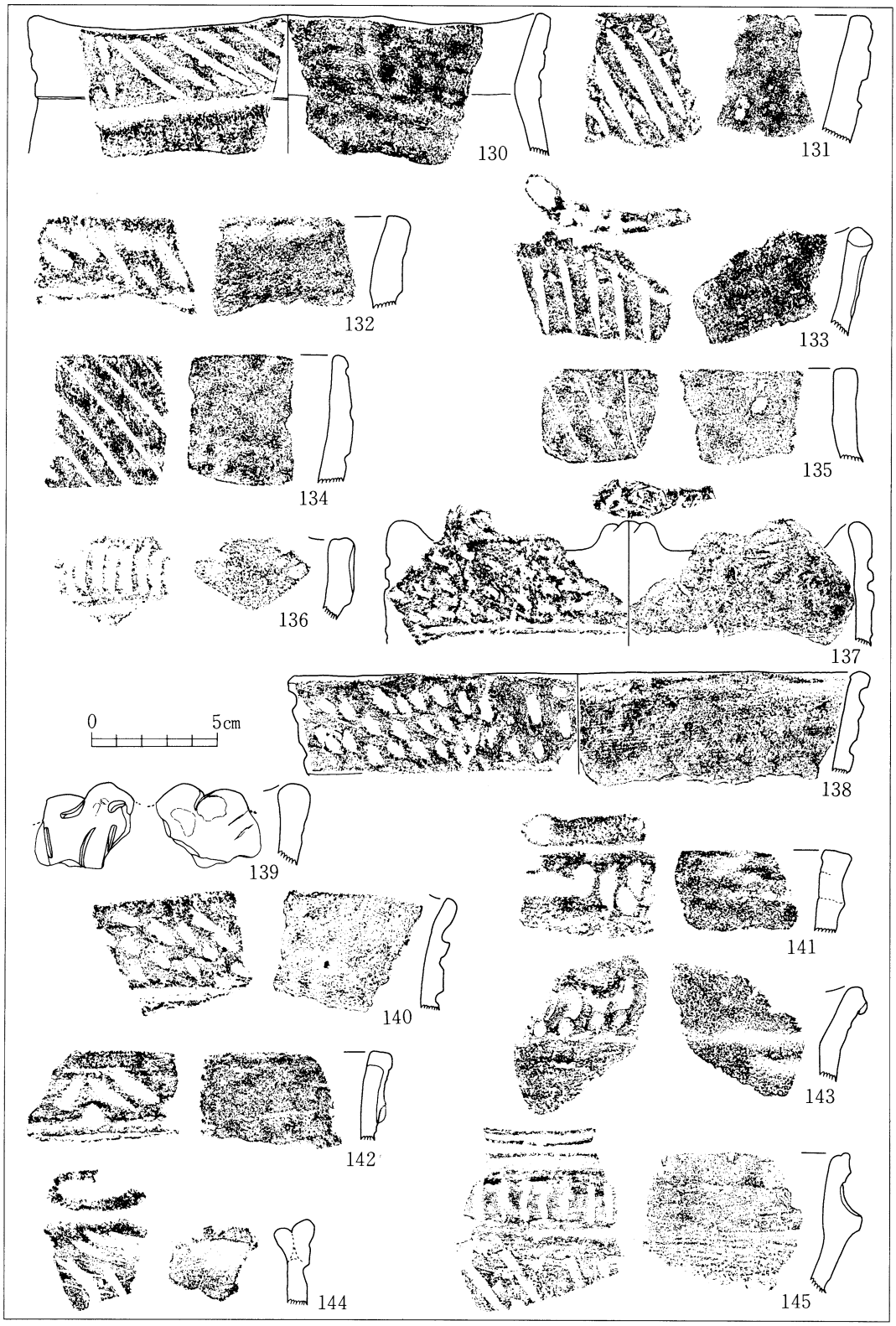
内外ともヘラ横ナデで仕上げている。淡茶褐色・茶褐色を呈しているものが多いが，暗茶褐色のもの，黄褐色のもの，赤っぽい茶褐色のものなどがある。焼成度は良好なものもあるが，軟質のものが多い。胎土は石英・白色石などの細石を多く含んでいるが，**115・132**のように粗い石粒が多いもの，**145**のように滑石をいくらか含むものもある。



第17図　縄文土器 ⑽　Ⅴ類



第18図　縄文土器 (11)　Ⅴ類



第19図　縄文土器 (12)　Ⅴ類

(6)Ⅵ類　(第２０図・第２１図，146～165)

口縁部近くの文様帯がやや肥厚し，ここに押圧文が付されるものである。口縁部は貼付けがないものと，粘土ひもなどを使って突起部を作るものがある。

突起部のないものは口唇部を丁寧にナデて平たくするもの（146～149）と，口唇部あるいは口縁端部にヘラ押圧・ヘラ刻みのあるもの（150～152）とがある。146は縦方向の短絡線を２段に施しており，口唇部は沈線風のへこみがみられる。147は粘土ひもを貼付けて口縁部を厚くし，この部分に鋭いヘラ刺突文が見られる。148は口唇部に粘土ひもを貼付けて口縁を高くしているが，貼付部をナデていないため沈線風にみえる。さらに口縁下部には凹線を引き，段を作っている。この沈線と凹線の間に２段の竹管文を施している。149は２段にヘラ押圧文を施している。150は口縁端部に細いヘラ押圧文を施し，その下には雑なヘラ沈線が横方向にみえる。151は口唇部にヘラ押圧文が付けられ，外面には２段にヘラ刺突文が施される。内面は口縁下部でくの字状に屈曲している。152は口唇部と外面にヘラ押圧文が付けられている。

153～157は粘土ひもをねじったり，積み上げて突起を作るものである。153は粘土ひもを複雑にねじり合わせて突起とし，その下に２段の細かいヘラ押圧文を施すもので胴部がふくらんでいる。154も粘土ひもを貼付けているが，内外とも横方向に丁寧にナデているため継ぎ目がはっきりしない。口唇部にヘラ押圧，口縁外面に３段の細かいヘラ押圧文がみられる。内面は口縁下でくの字状に屈曲している。155は粘土ひもをねじって貼付け，突起部としたもので，その下に縦方向のヘラによる短絡線と３段のヘラ押圧文がみられる。156は粘土ひもを弧状にまわし，その一部にヘラ沈線を施す。外面には横方向の横線と縦方向短絡線がみられる。157は口唇部にヘラ押圧が，肥厚部とその下に浅いヘラ刺突文がみられる。

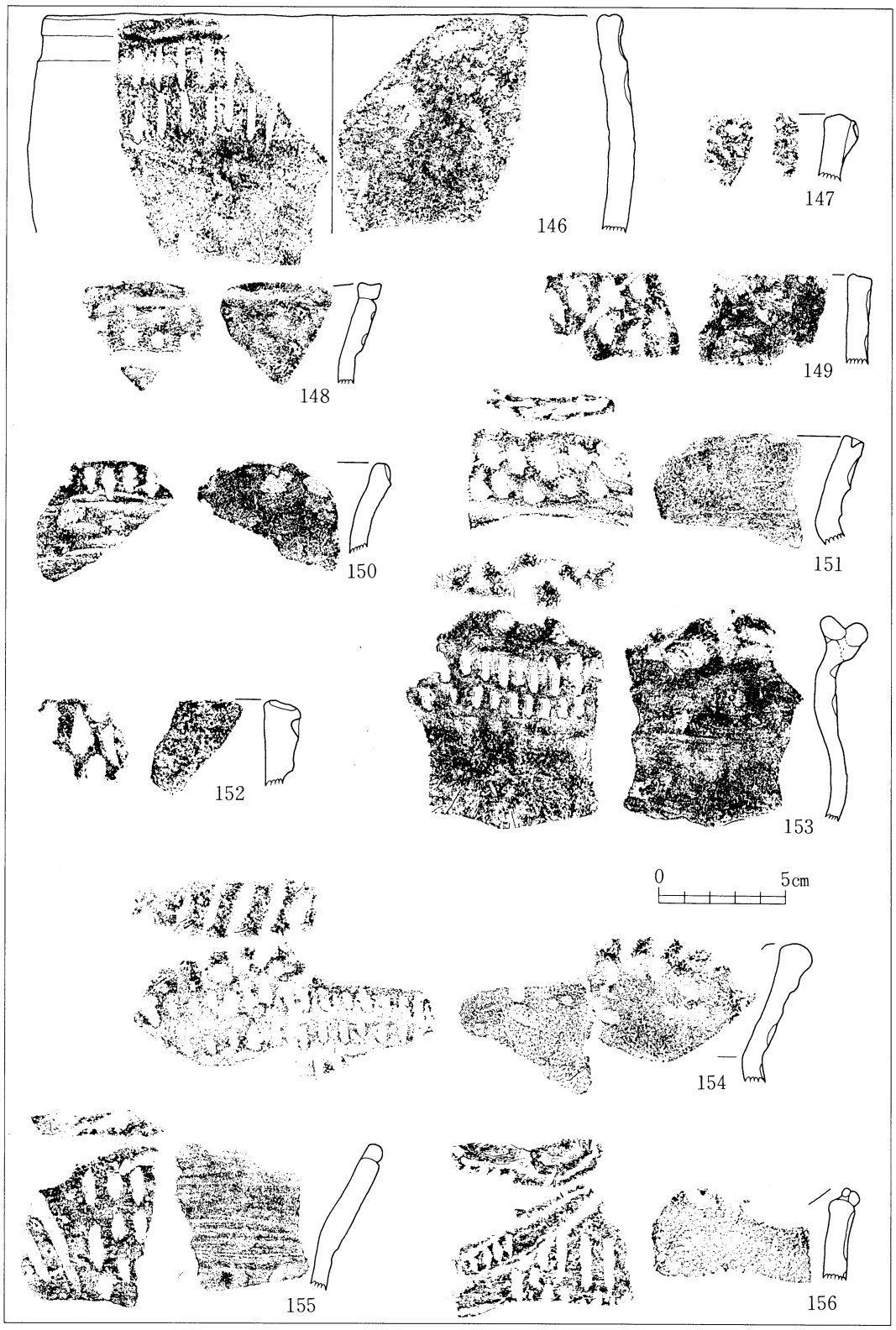
胴部にはヘラ押圧文や竹管文がみられる。158はヘラによる横線と２段の押圧文，159は竹管文，160・161はヘラによる押圧文と左下がり斜沈線，162は２段の二枚貝圧痕がみられる。163は孔の中，沈線の中が赤みがかった淡茶褐色を呈するものであるが，沈線を挟んで上下に小きざみな押圧文がみられる。164は斜線と竹管文，165は竹管文がある。これらは内外ともヘラによる横ナデで仕上げられる。

多くが明淡茶褐色を呈しているが，黄みがかった淡茶褐色，茶褐色，白っぽい乳灰色，暗茶褐色，灰褐色を呈しているものもある。焼成度は普通で表面が磨滅しているものもあるが，良く焼けて硬質のものもある。胎土は白色石・石英が多く，茶色石・黄色石・角閃石などの入った砂質土を用いている。

(7)Ⅶ類（第２２図，第２３図，166～188）

細い凹線が施されるもので，口縁部は口唇部に刻みのあるものとないものとがある。

166～172は口唇部に刻みのないもので，平縁のものと波状を呈するもの（170～172）とがある。169は口縁部が外反しているが，他のものは直立している。166は口縁直径が２６cmあり，長い横線・斜線の間に短絡線がみられる。167・168はやや厚いもので横線と縦短絡線から成る文様である。169は口縁端の方から押圧文，横線，竹管文，横線，右下がり斜線，刺突文と続く複雑な



第20図　縄文土器 (13) Ⅵ類

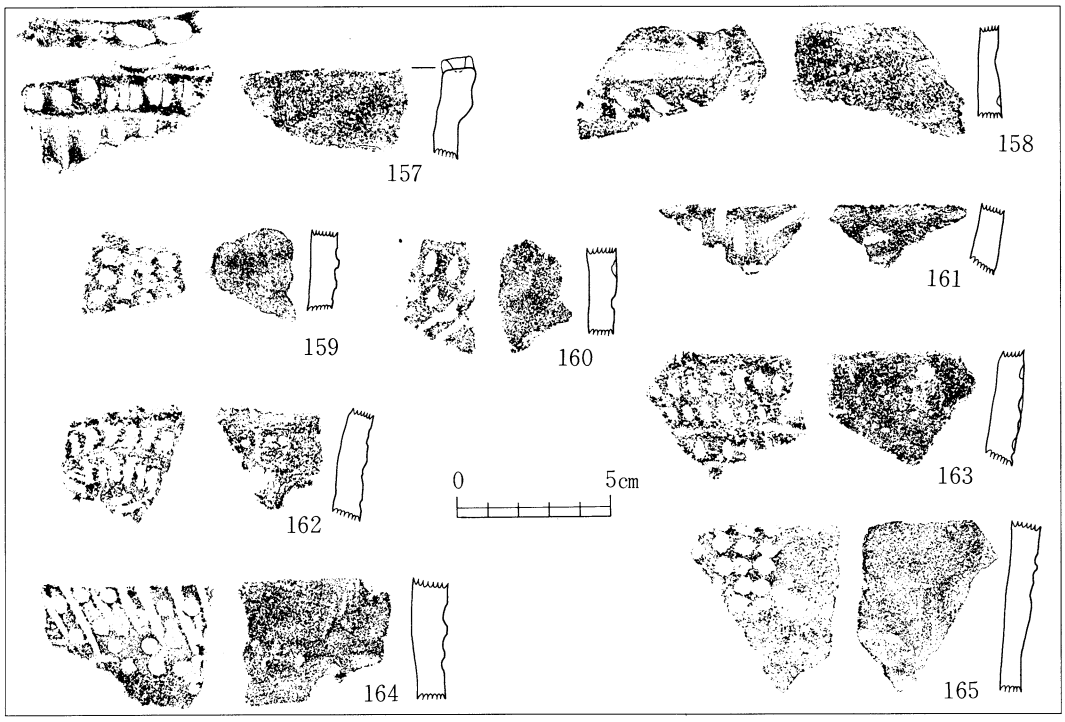
文様をしている。**170**は横線と２列以上の竹管文とからなる。**171・172**は肥厚口縁で横方向のヘラ沈線がある。

173～180は口唇部あるいは口縁端にヘラ押圧文，あるいはヘラ刻みのあるものである。**173**は縦と斜方向の凹線がある。**174**は突起部で，矩形，横線，押圧文で文様構成され，突起部には浅い波状凹線と口唇部にヘラ刻みがある。**175**は端を押す横・斜方向のヘラ沈線とその上に縦方向短絡線がある。**176**は外に粘土を貼付けて肥厚さす。**177**は口縁下部に粘土ひもを貼付け，口唇部にも貼付けて突起部を作る。**178**は横方向と斜方向のヘラ沈線があり，口唇部にも沈線がみられる。**179・180**は口縁端に刺突文・押圧文があるが，**179**は口唇にかけて２段にある。**179**は横線のあと縦線が引かれる。

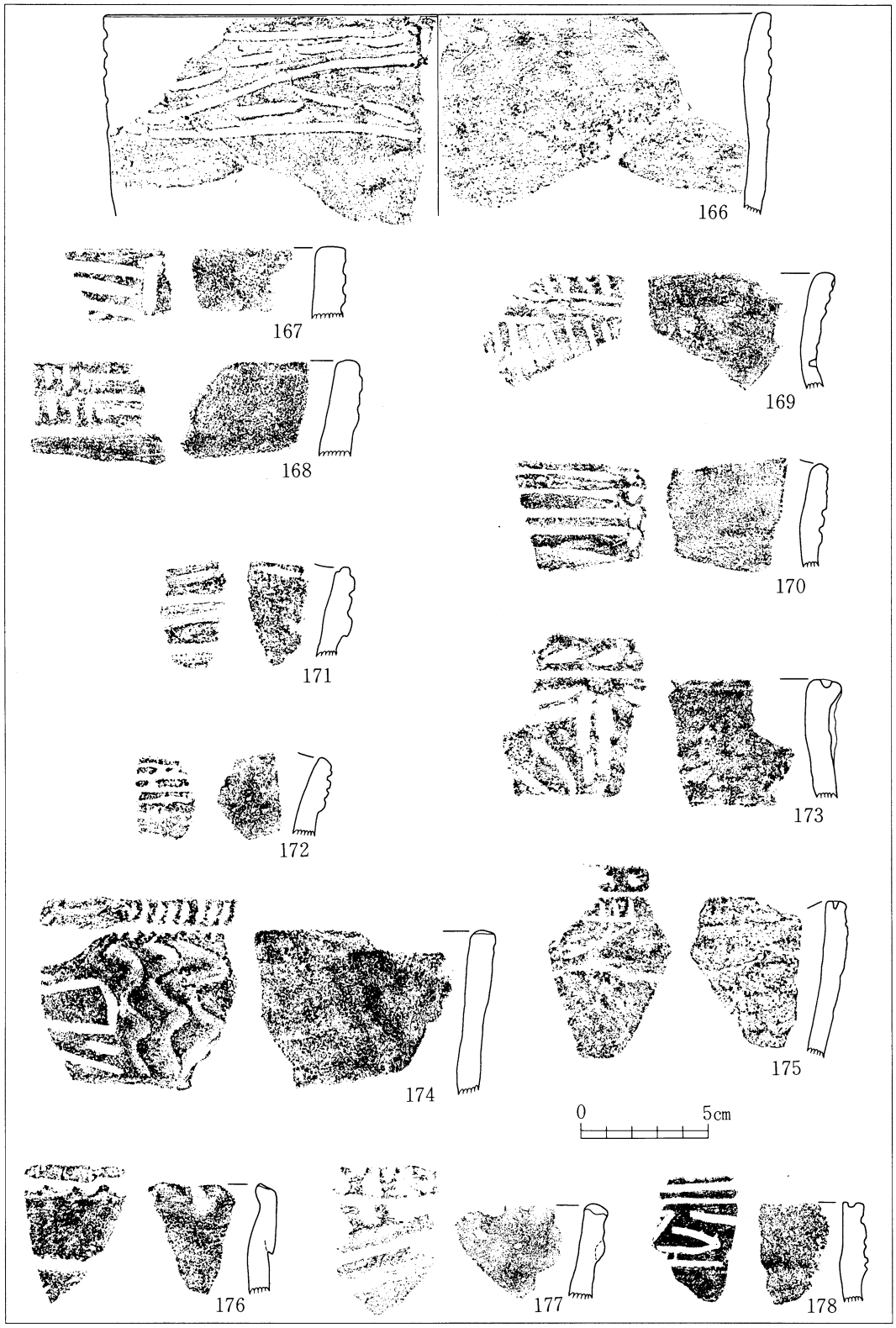
181・182・184・185は突起のあるものである。**181**は口縁直径２６cmで緩やかなくの字状を呈する。突起部に縦凹線をし，その間は横線と斜線で結ぶ。突起部は５か所にあり，この部分のみ口唇部にヘラ刻みがある。**182**は粘土ひもを２列貼付け，この部分に竹管文を押す。**184**は突起部に把手が付くものでヘラ沈線の文様がある。**185**は粘土ひもをねじり合わせて貼付ける。

183・186～188は胴部で横線・斜線・半裁竹管様の刺突文・押圧文などの文様がみられる。

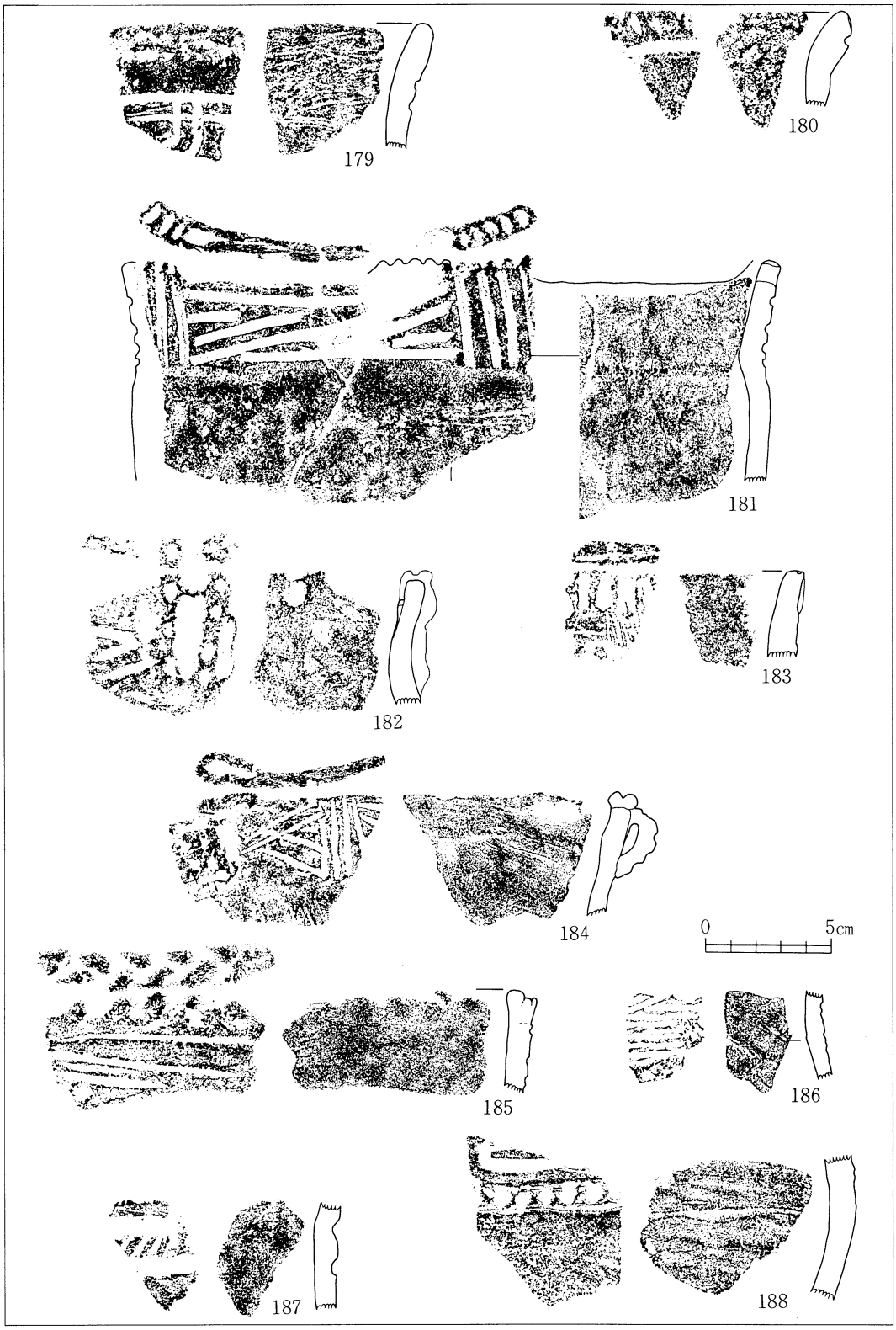
内外とも丁寧なヘラ横ナデで仕上げ，焼成度が良いものもあるが，多くはやや不良で剝脱の目立つものもある。淡茶褐色を主とした色を呈し，胎土は石英・白色石・黄色石などの細かい石を多く含んだ砂質土である。



第21図　縄文土器 (14)　Ⅵ類



第22図　縄文土器 (15) Ⅶ類



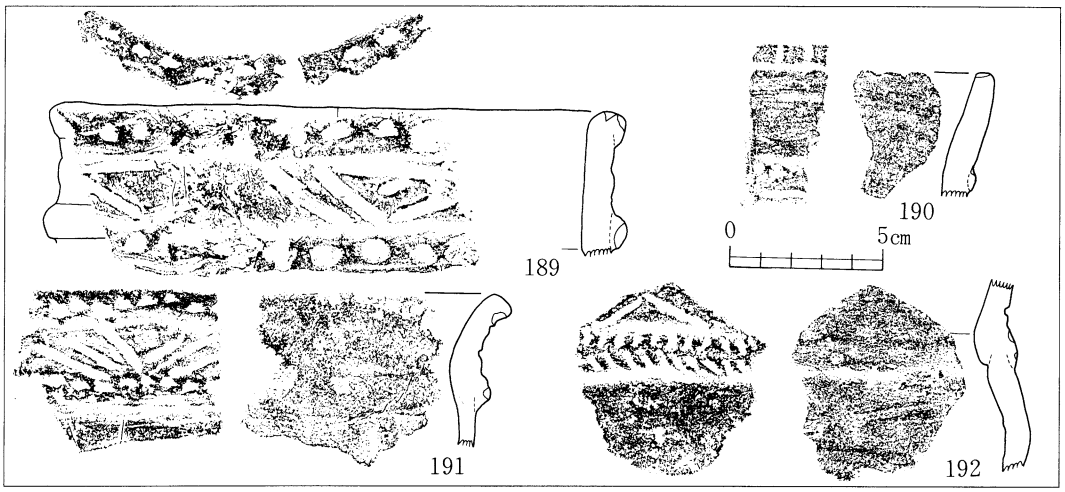
第23図　縄文土器 ⑯ Ⅶ類

(8)Ⅷ類（第２４図**189**～**192**）

口縁端あるいは口縁下部に貼付突帯がみられるものである。

189は口縁直径が２９cmあり，口縁端と口縁下部に２条のかまぼこ状貼付突帯がある。口唇部にはヘラ刺突文，突帯部にはそれぞれヘラ押圧文がみられ，突帯の間にはヘラによる横あるいは斜方向の凹線と押圧文がみられる。また突帯間をつなぐ橋状把手の痕跡がみられる。**190**は口縁端がやや内弯する器形を呈し，口縁下部に刺突文の付された貼付突帯がみられる。口唇部にはヘラ刻みがみられる。**191**は口縁部が外反する器形を呈し口縁端と口縁下部に２条の突帯がみられる。突帯の上にはヘラによる刺突文がみられ，突帯間に斜方向のヘラ沈線がある。**192**も外反する器形を呈し，突帯上に綾杉状の刺突文がみられ，突帯の上方には八の字状の沈線がある。内面に輪積み痕跡がある。

内外ともヘラによる丁寧な横ナデで仕上げている。淡茶褐色・あるいは茶褐色を呈し，**189**・**190**は焼成良好であるが，**191**・**192**はあまり良くない。胎土は石英・白色石・黄色石・角閃石などの細かい石粒を多く含んだ砂質土である。



第24図　縄文土器 (17) Ⅷ類

(9)Ⅸ類（第２５図・第２６図，**193**～**212**）

口縁部にヘラ・二枚貝・竹などで押圧を加えるもので，平縁のものや，粘土ひもを貼付けるものなどがある。

193～**195**は口縁端近くに二枚貝押圧のあるもので，その下にはヘラによる横あるいは三角形状の凹線がみられる。**195**は口唇部に細めの浅いヘラ押圧がみられる。**203**も二枚貝押圧の可能性がある。

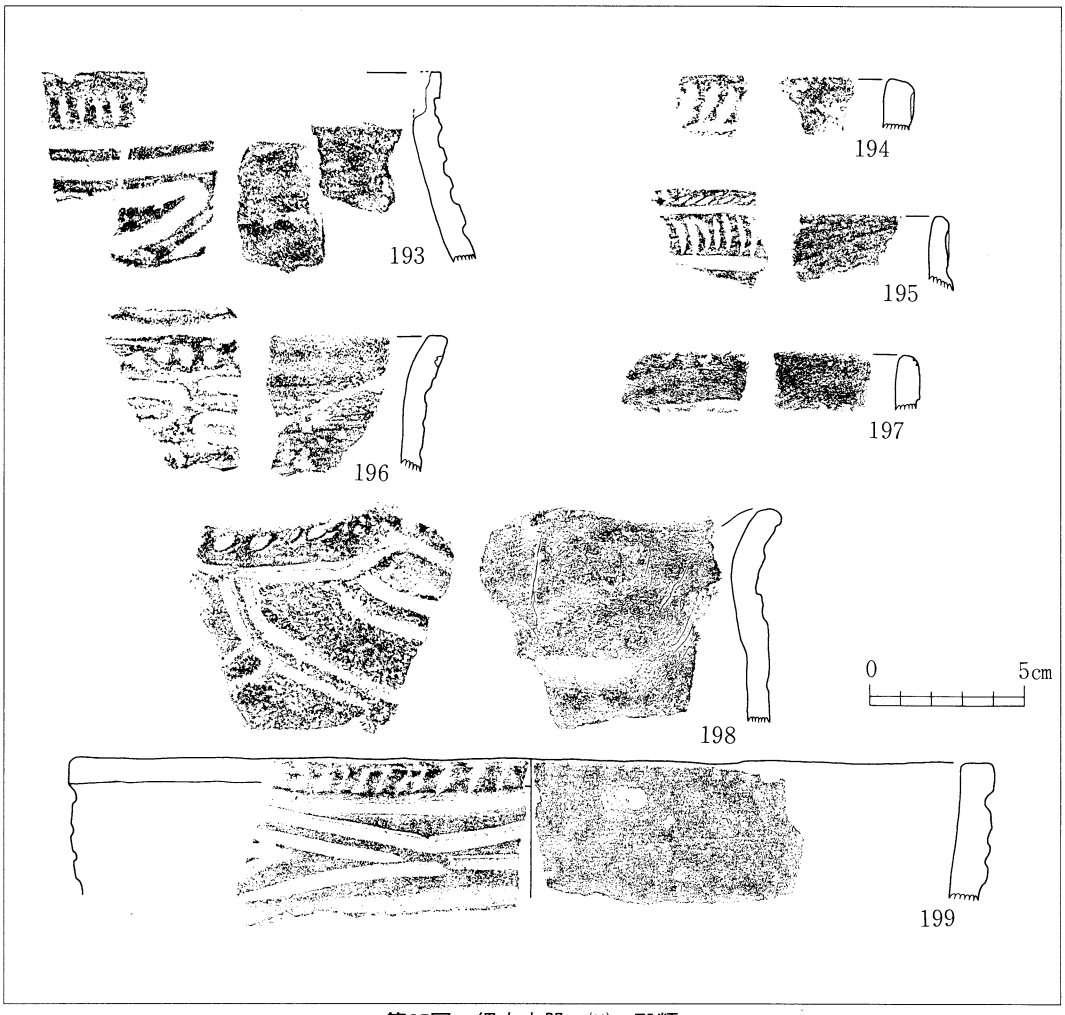
196・**197**は竹管文とヘラ凹線で文様構成されるもので，**196**のヘラ凹線は背中合わせの長楕円文である。

198～**205**・**207**は口縁端にヘラによる押圧あるいは刻みのあるものでその下にはヘラ凹線がみられる。**198**・**203**は波状口縁である。**198**は浅い押圧のもので，その下は複雑な曲線文が描かれる。口縁はやや外反している。**199**は口縁直径３０cmで肥厚口縁である。斜方向沈線が描かれる。

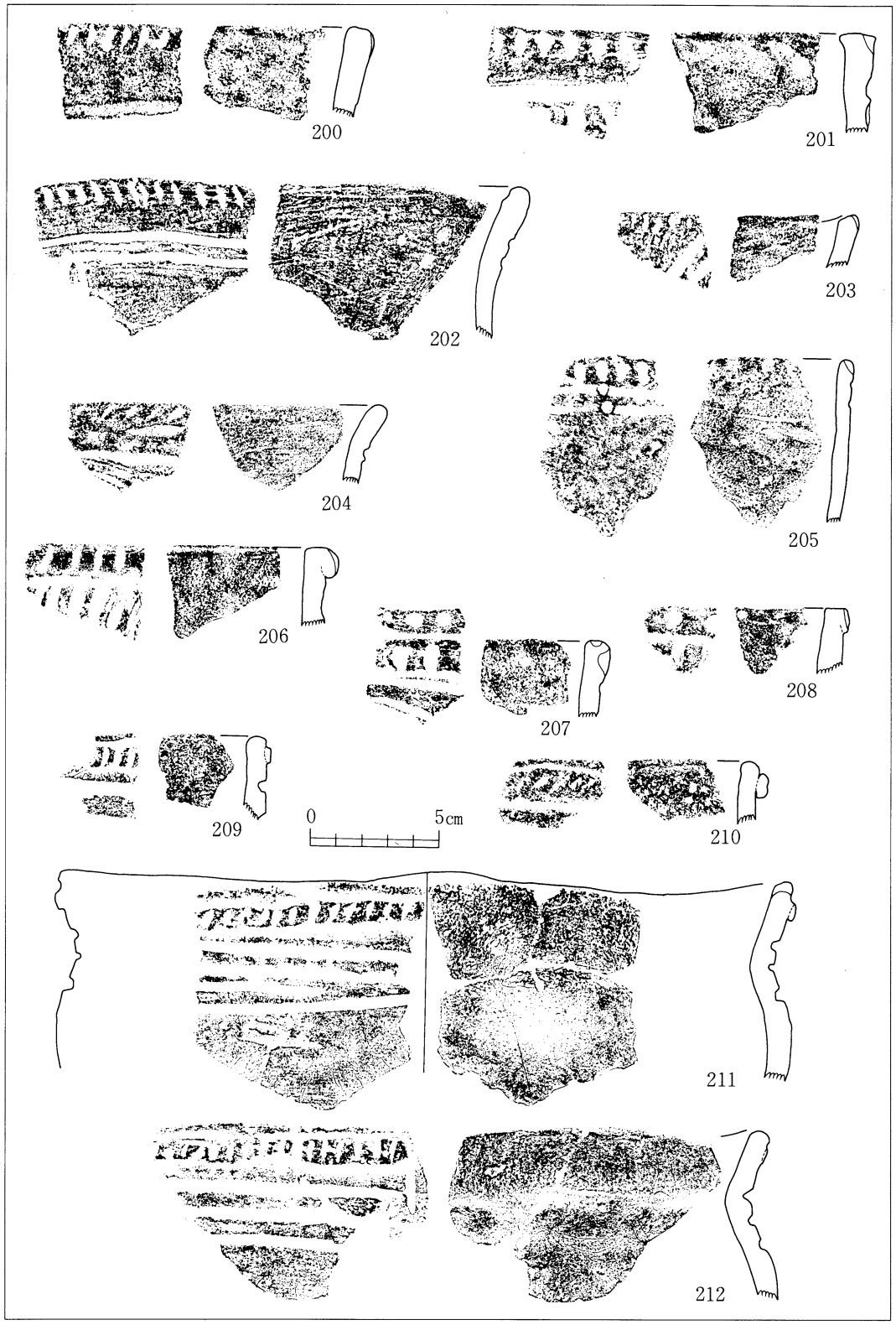
201は横線の下にヘラ押圧がみられ，内面には指頭圧痕らしきくぼみがみられる。**202**は内外ともヘラによるやや粗い横ナデで仕上げ，外は横線と縦短絡線とで構成され，これにS字状文のある可能性がある。**205**は横線と竹管文があり，薄い作りである。**207**は口唇部にヘラ刺突が施され，口縁端の押圧は深い。

206・208～212は口縁端あるいは口縁下部に突帯が貼付けられ，そこにヘラの押圧あるいは刻み，二枚貝の押圧（**210**）が施される。**211**は波状となる口縁で，口縁直径が２８cmある。口縁下でくの字状に折れ，丸みをもって胴部に移る。横方向の深い沈線と縦方向の短絡線とで文様構成され，口縁下にある貼付突帯にはヘラ刻みが施される。

内外とも横方向のナデで仕上げられるが，丁寧にナデているものも多い。淡茶褐色を呈するものが多く，これには黄色っぽいもの，暗いもの，灰色がかったものもある。茶褐色のものもある。焼成度の良いものもあるが，多くはあまり良くなく軟質である。胎土は石英・白色石・黄石・茶石・角閃石などの多い砂質土である。



第25図　縄文土器 (18) Ⅸ類



第26図　縄文土器 (19) Ⅸ類

(10) X類（第27図～第29図，**212′～252**）

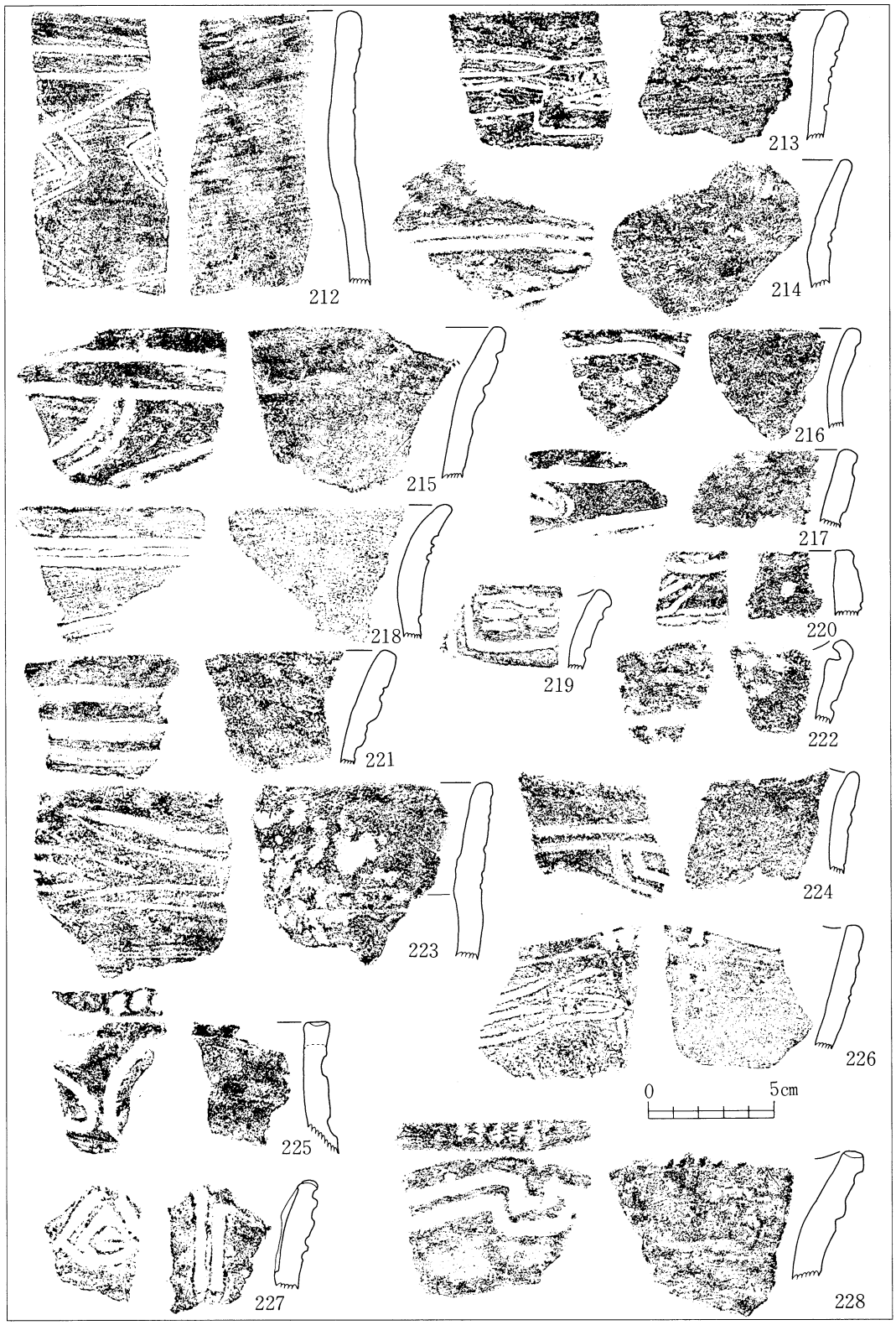
沈線によって文様が描かれるもので，口縁部は刻みのないもの（**212′～228・231**）と，口唇部あるいは口縁端に刻みのあるもの（**229～239**）とに大別できる。

刻みのないものは外へ開きながらまっすぐ伸びるもの，緩やかに外反するもの，あるいは直に伸びるものなどがある。波状口縁となるもの（**219・222・224・226・231**），突起をもつもの（**223・225・227・228**）もある。**212′**はヘラ横ナデのあと横線と菱形風の沈線が施される。**213**は長楕円文とL字文・横線，**215**は横線と弧状文である。**217**は横線と曲線，**219**は矩形の囲いの中に短絡線が引かれる。**220**は横線と横線の間に左下がりの短絡線がみられる。**222**は焼成度が悪く，磨滅が目立つもので，外に横線，内に深い刺突文がある。**223**は浅い沈線で，三角形状の文様がみられる。内面の剝脱が目立つ。**224**は2条の横線の下に2条のL字状凹線がある。**225**は突起部の口唇にヘラ押圧があり，その下には深いヘラ凹線がみられる。**226**は口縁直径が15㎝ほどの小形深鉢で，波状突起部の口縁端にヘラ押圧がみられ，その下には長楕円文がある。**227**は硬質に焼けている突起部で，外面には2条の菱形文，内面には2条の縦方向短絡線がみられ，口唇部に刺突文がある。**228**は雷文風の沈線があり，突起部の口唇には二枚貝の押圧がみられる。**231**は突起部を境にして文様が左右に分かれている。

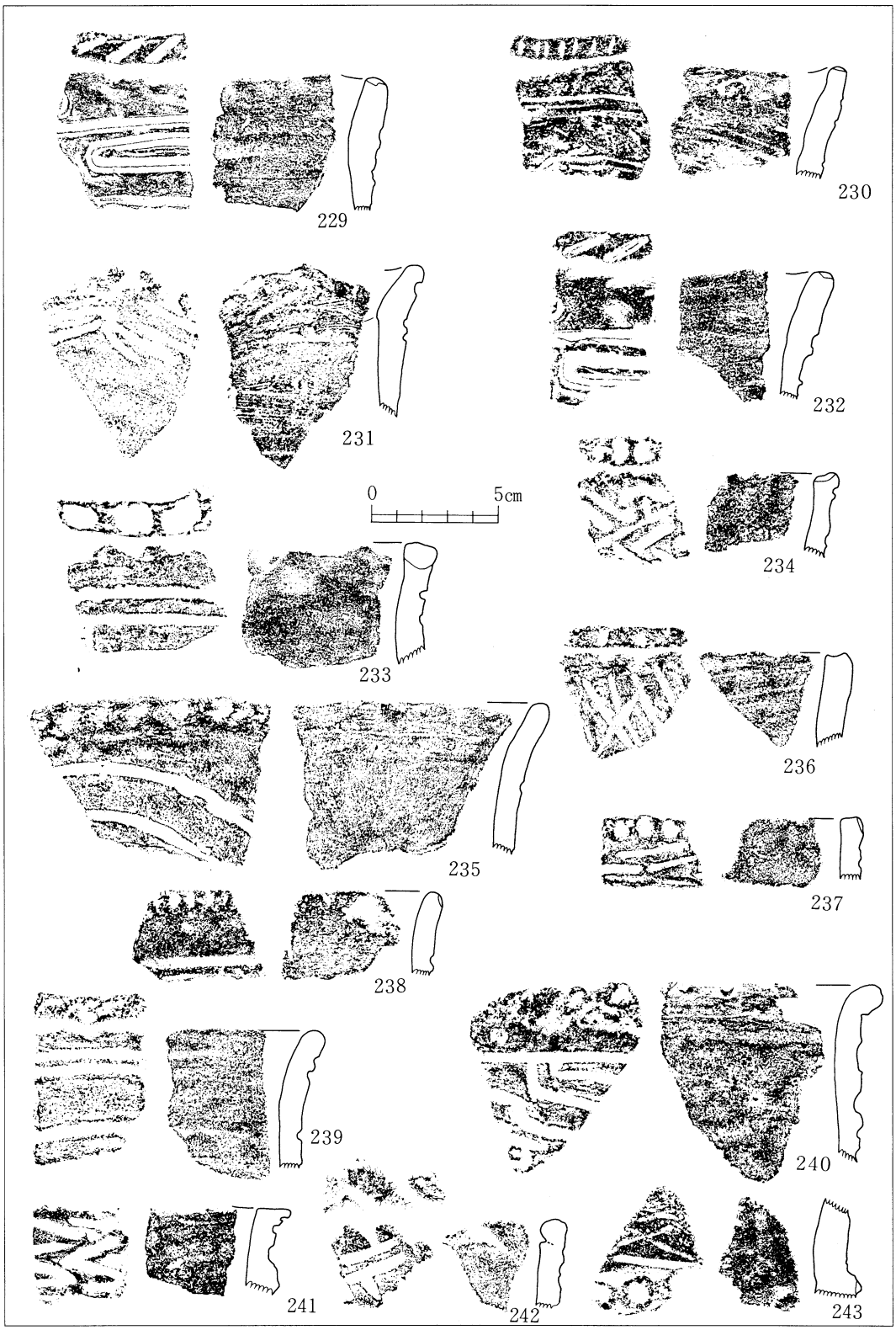
刻みのあるものは，刻みが口唇部にあるもの（**229・230，232～234，236・239**）と，口縁端にあるもの（**235・237・238**）とがある。**229～232**は波状口縁である。**229・232**はヘラ押圧がみられ，外面には半裁竹管様のヘラによる凹様文がある。**230**はヘラ沈線で，外面には浅い沈線文がある。**233**は大きくて深い刺突文のあるもので，深いヘラ凹線が外面にみられる。**234**はヘラ刺突があり，外面には右下がり，左下がり，縦方向の短絡線で網代状の文様を作っている。**235**は二枚貝，**237・238**はヘラの押圧がみられる。外面は**236**はヘラの右下がりと左下がりの交叉した文様，**237**は短絡線で構成された文様がみられる。**240・241**は口縁端が肥厚するもので，**241**は口縁下部にも突帯風の高まりがみられる。外面は**240**が横線と鍵手文，**241**が深い短絡線による三角状の文様がある。**242**は粘土ひもをねじり合わせて口唇部に貼付けて突起とするもので，**241**と似た文様がみられる。**243**は口縁下部に貼付突帯があり，これには刺突文と押圧文を交互に付して，その上に横・右下がり・左下がりの浅い沈線が付される。

胴部には波状文などの複雑な曲線文，横線，斜線，直線の囲い文などいろいろな文様がだいぶ下までみられる。

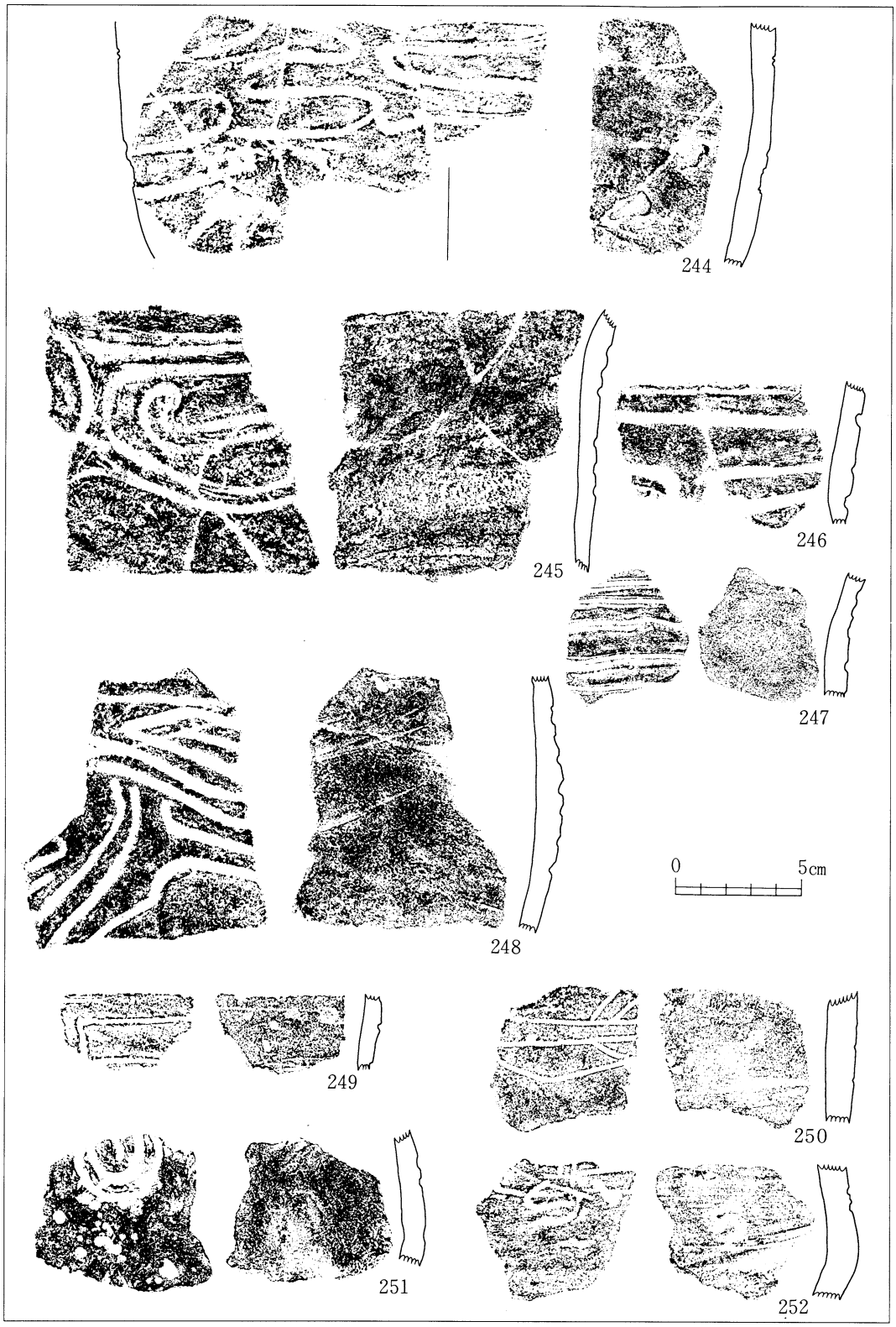
淡茶褐色・暗茶褐色・茶褐色を呈しているものが多く，灰褐色，黄みがかった淡茶褐色，黒褐色を呈するものもある。外にススの付いたものがある。焼成度は良好なものもあるが概して良くない。胎土はほとんど同じで，白色石・石英・角閃石・茶色石などの細かい石を多く含んだ砂質土である。



第27図　縄文土器　(20)　X類



第28図　縄文土器　(21)　X類



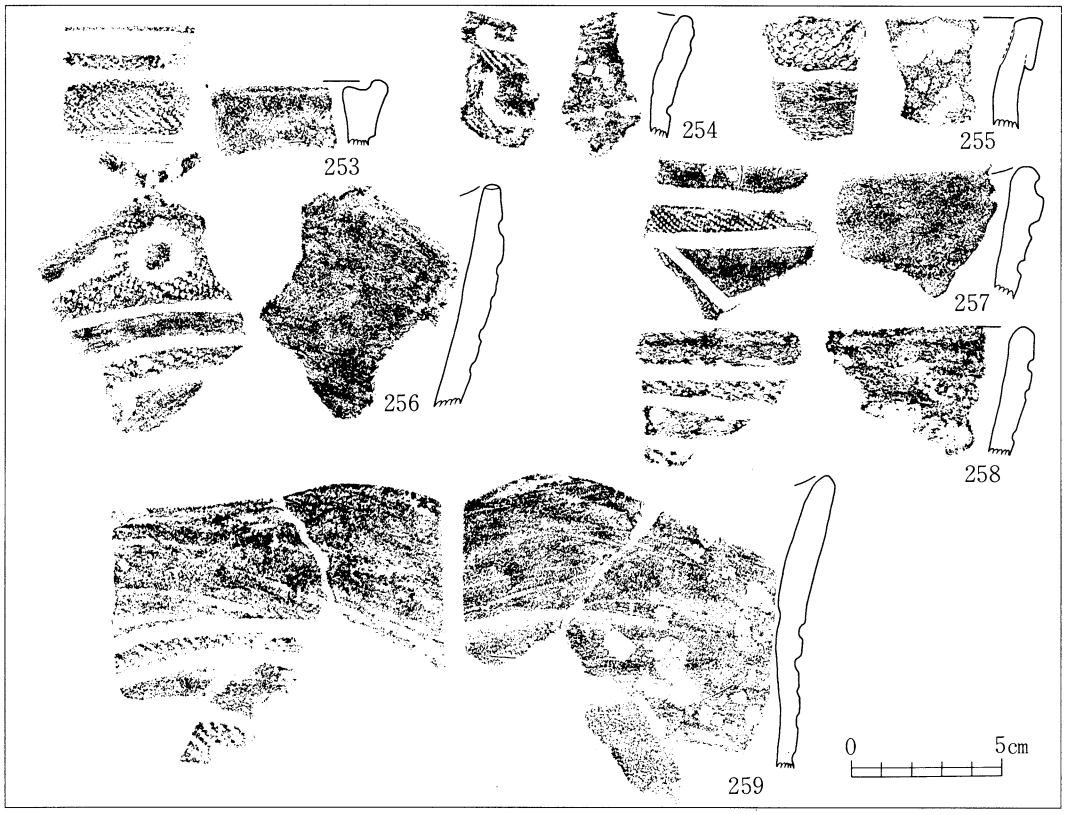
第29図　縄文土器　(22)　X類

(11) XI 類（第30図・第31図，**253～275**）

磨消縄文をもつ土器である。器形・文様などから５種類に分けられる。

253～265は口縁が開きながらまっすぐ伸びるか，外反するもので，２本の線の間に縄文が残っている。**253**は口唇部と口縁下部に横線があるが，その間に幅広く縄文が残っている。**254**は波状口縁で外面に曲線があり，部分的に縄文が残っている。**255**は口縁に幅広の突帯を貼付け，そこに縄文帯がみられる。**256**は突起部で，突起部の口唇部には３つの押圧文が，その下には円形の凹線がある。その下や周りには凹線と，その間に縄文がみられる。**257**も波状口縁で，横あるいは右下がり斜線の間に縄文がみられる。**259**は口縁直径が25cmほどで，波状の口縁をなし，２本線の間は貝殻による凝縄文である。**260**は曲線と，鍵状横線の間に縄文がある。**263**は横方向・曲線の凹線と，ヘラ押圧文の間に縄文がみられる。**264**は囲い文となる沈線である。これらはいずれもヘラの横ナデで仕上げられるが，**257**はヘラミガキで仕上げられている。

266～271は口縁端部が肥厚し，内外面ともヘラミガキ，あるいは丁寧なヘラナデで仕上げるものである。**266**は波状口縁で口唇部に２条の凹線があるが，上の凹線にはその中にヘラ押圧がみられる。**267**は口縁直径が28cmの波状口縁を呈するもので，胴部上半に最大径があり，ここから底へまっすぐのびる。波状突起部には３つのヘラ穿孔を有するこぶ状突起が貼付けられ，口唇部の凹線部にはヘラ刺突がみられる。こぶ状突起・口縁端にもヘラ押圧がみられる。こぶ状突起の下には円文があり，その周辺には直線あるいは曲線状の凹線があり，その間に縄文がみられる。



第30図　縄文土器(23) XI 類

第31図　縄文土器(24)　XI類

口縁部付近はベンガラが塗られている。**268**は口唇部の２条の沈線間にヘラ押圧があるもので，口縁端部にもヘラ押圧がみられる。**270**は沈線の中にベンガラが残っている。

272は**267**に似た口縁部を呈するもので，口縁端にこぶ状突起があり，その口唇には縄文がみられ２個の穿孔がある。口縁下部には囲い文があり，磨消縄文がみえる。

273は胴部中ほどが外へ反りながらふくらむ器形をしており，そこに沈線に挟まれた縄文がある。内面はヘラミガキである。

274・275は口唇部に沈線がみられる。**274**は突起部で，口唇部に沈線に挟まれた縄文がみられ，**275**も口唇部に沈線がみられる。いずれもヘラミガキで，**274**の外面は暗文風である。

XI類は他の類と異なり暗茶褐色や黒褐色のものが多く、灰色がかったり黄色がかったりしたものもある。焼成度も良いとはいえない。胎土は他の類と同じく砂質土を用いている。

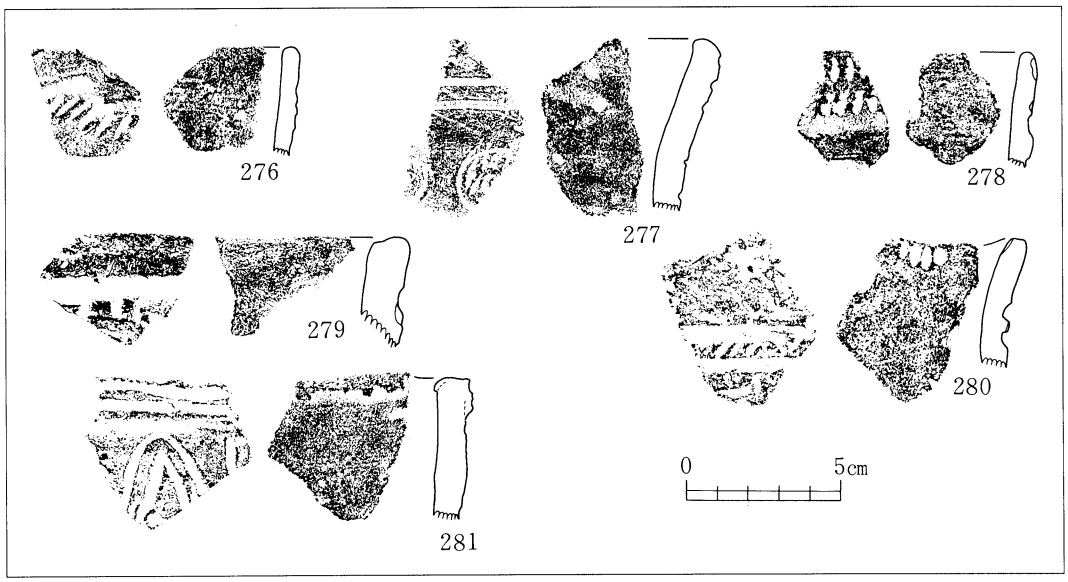
(12) XII類（第32図・第33図，**276～298**）

縄文の代わりに貝殻やヘラ，竹管などを用いる疑似縄文土器である。

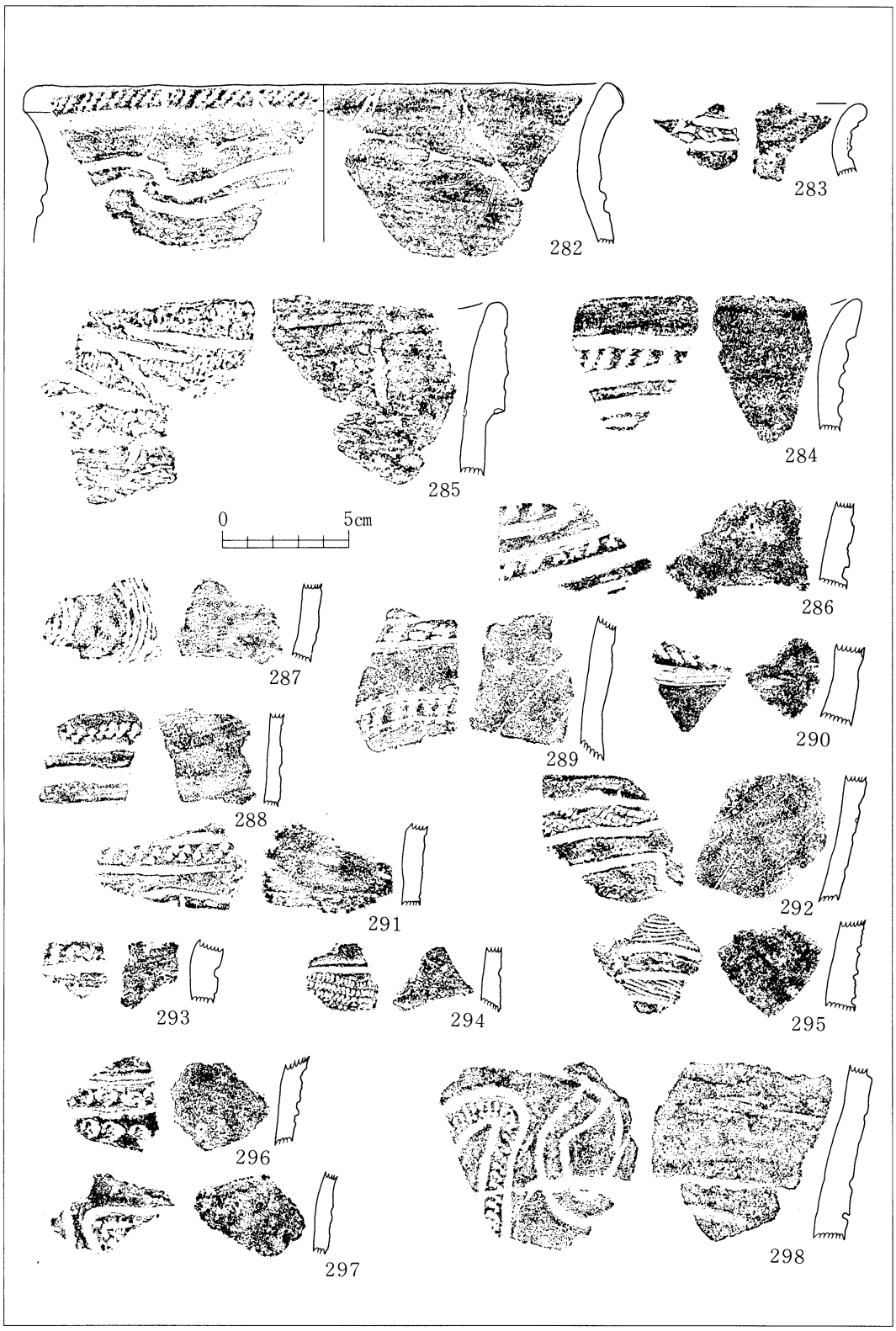
口縁部はまっすぐあるいは外へ開きながら直に伸びるものと，外反するもの，幅広く突帯のあるものがある。

276～281は直に伸びるものである。**276**は曲線の下にヘラ押圧が付される。**277**は口縁端がやや内反するもので，端部に刺突文が付され，その下に２条の沈線がある。その下には円の沈線の間に細かい刺突文が付される。**278**は上部に２段の二枚貝押圧があり，その下に凹線がある。**279**は太めの器壁をし，凹線の下に刺突文がみられる。**280**は突起部で，内面の口縁端にヘラ押圧がある。３条の沈線があり，上の２本間にヘラの斜押圧がみられる。**281**は口縁端を肥厚させ，肥厚部の下に波状の沈線文があるが，その間に二枚貝の押圧文が付される。

282～284は外反する口縁で，**282**は口縁直径が24cmで，口縁端部に二枚貝の押圧が付される。内面はミガキに近い丁寧なヘラ横ナデである。**283・284**は沈線間にヘラの押圧が付される。



第32図　縄文土器(25)　XII類



第33図　縄文土器　(26)　XII類

285は口縁部が幅広突帯となるもので，ここに巻貝と思われる凝縄文がみえる。他のものと異なり，大きな石粒を多く含む粗い土を用いて，焼成良く堅致である。黒褐色を呈している。

胴部の凝縄文には二枚貝押圧(**286**～**292**)，巻貝押圧あるいは転がし(**293**・**294**)，貝殻条痕(**295**)，ヘラあるいは竹管の刺突（**296**～**298**）がある。**287**は転がしたような文様である。**296**・**297**は横線の間あるいは囲いの中に竹管文がみられる。**298**は弧状の沈線の間にヘラ刺突文がみられる。

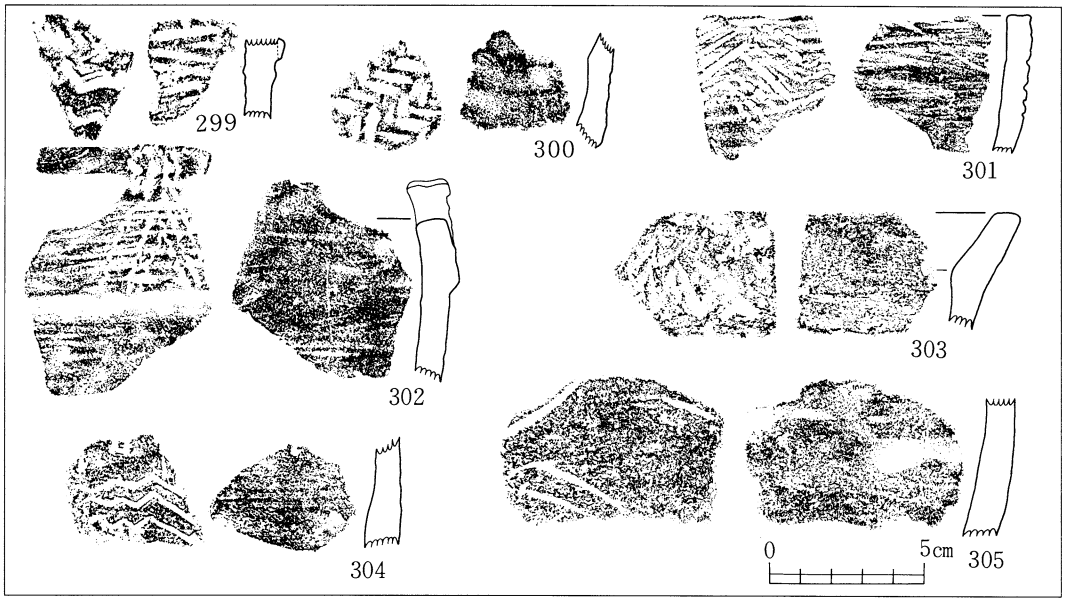
明茶褐色・淡茶褐色・暗茶褐色のものがほとんどで，他に灰茶褐色・黒褐色のものがわずかにある。外にススが付いたものもある。焼成度の良いものも多いが，やや不良といったものが多い。胎土は他の類と同じく石英・白色石・黄色石などの多い砂質土を用いている。

(13) XIII類（第34図**299**～**305**）

鋸歯状の文様をもっているものである。

299・**300**はヘラによる鋸歯文で，**300**は短絡線で結んでいる。**299**は突帯にヘラ押圧文があり，内面は貝殻条痕で仕上げている。**301**・**302**は二枚貝押圧による鋸歯状文で，ともに内面は貝殻条痕で仕上げている。**301**はヘラナデのあと，左下がりの沈線と二枚貝の押圧文で鋸歯状文を作っている。**302**は貝殻条痕で整形された突起部に，二枚貝押圧によって鋸歯状文を作っている。突起部口唇にはヘラ押圧がみられる。**303**は外面は外へ開きながらまっすぐ伸びているが，内面は口縁下でいくらか肥厚している。外面には浅い鋸歯状の沈線が2段にみられる。**304**はヘラによる矩形と鋸歯文がみられる。**305**は表面が磨滅しており，外面にヘラ沈線がある。

内外とも横方向のヘラナデで仕上げるものが多いが，貝殻条痕のものもある。**301**・**302**は焼成度が良く，茶褐色・淡茶褐色を呈しているが，他は焼成不良で黄色っぽい淡茶褐色・灰茶褐色などを呈している。胎土は石英・黄色石・白色石などの細かい石を多く含む砂質土である。



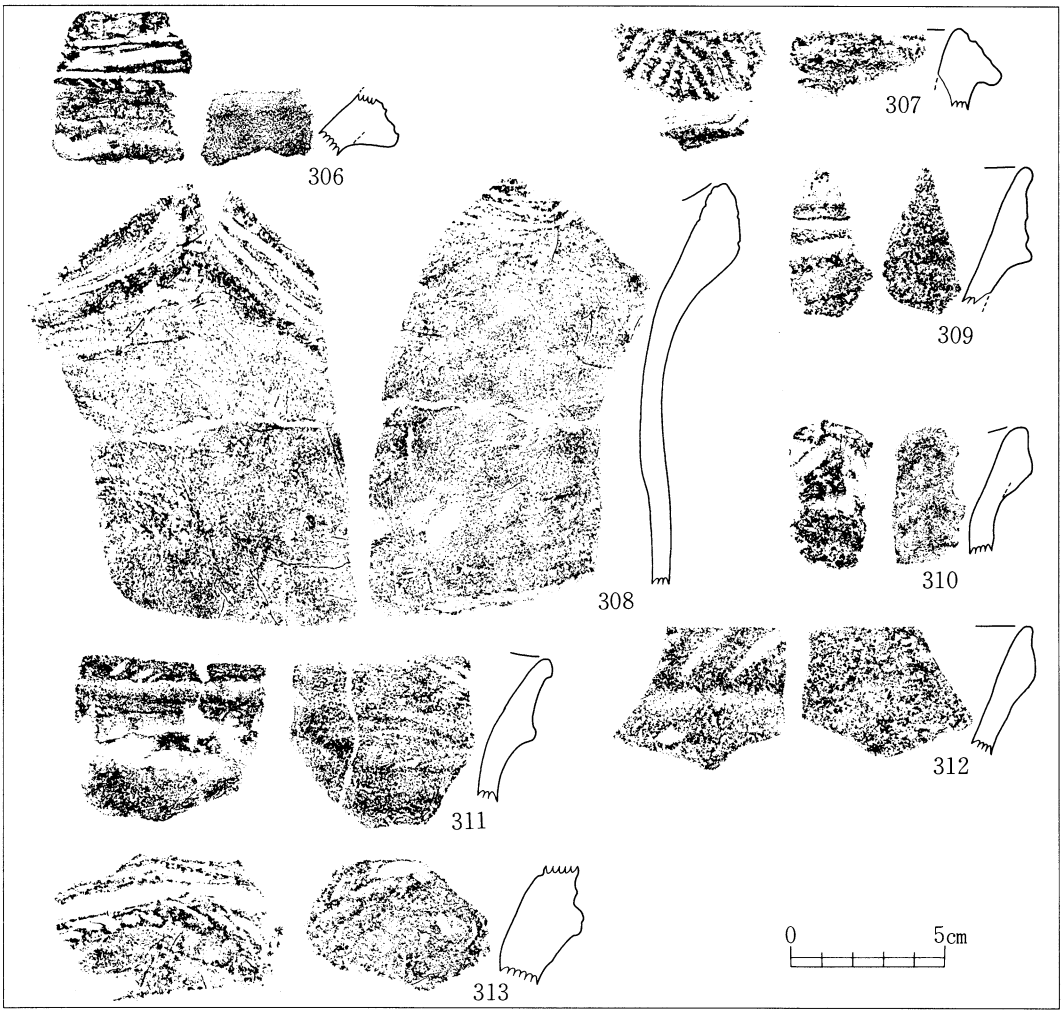
第34図　縄文土器　(27)　XIII類

(14) XIV類（第35図**306**～**313**）

口縁部が肥厚し，ここに文様があるものである。

306～**308**は口縁端部が肥厚し，ここに文様がみられるものである。**306**は口縁端が欠けているが，口唇部が厚くここに2条以上の沈線があり，下部に斜方向ヘラ刻みがある。口唇下部は貼付肥厚部となっている。**307**も口唇部が幅広く，ここに二枚貝押圧によって，重なった鋸歯文が描かれる。**308**は波状の口縁で，口縁部は外反している。肥厚帯にヘラ沈線がみられ，突起部にはヘラ押圧がある。内面の突起部にもヘラ沈線がみられる。

309～**313**は肥厚部が幅広いものである。**309**は3条の沈線がみられる。**310**は波状口縁で貼付けの肥厚部にヘラ押圧文がみられる。**311**は波状口縁の突起部で外面の口縁端にヘラ押圧がみられ，内面の突起部には二枚貝押圧がある。内面は貝殻条痕のあとヘラナデで仕上げる。**312**は外面の肥厚部に二枚貝押圧がある。**313**は波状口縁の突起部で，外面には沈線の下にヘラ刻みがみられ，内面には突起部にヘラ押圧がある。



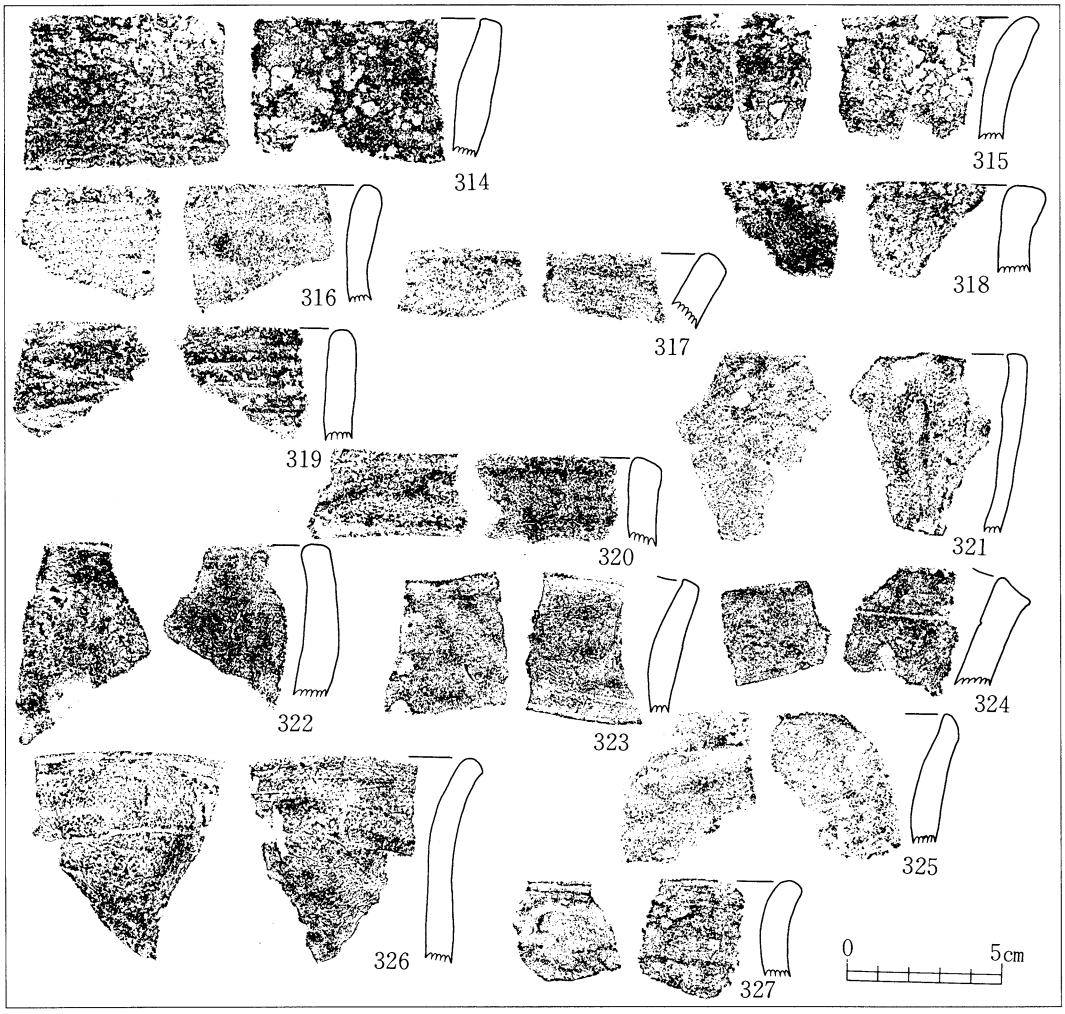
第35図　縄文土器　(28)　XIV類

内面・外面とも横方向のヘラナデで仕上げている。ほとんど淡茶褐色・茶褐色を呈しているが，**312**は淡黒褐色，**313**は暗い黄みがかった淡茶褐色を呈している。外はススが付き，暗くなったものがある。**306・310**は焼成度が良好で堅く焼けているが，他はあまり良くなく，**312**のように磨滅しているものもある。石英・白色石・黄色石などの細かい石を多く含んだ砂質土を用いている。

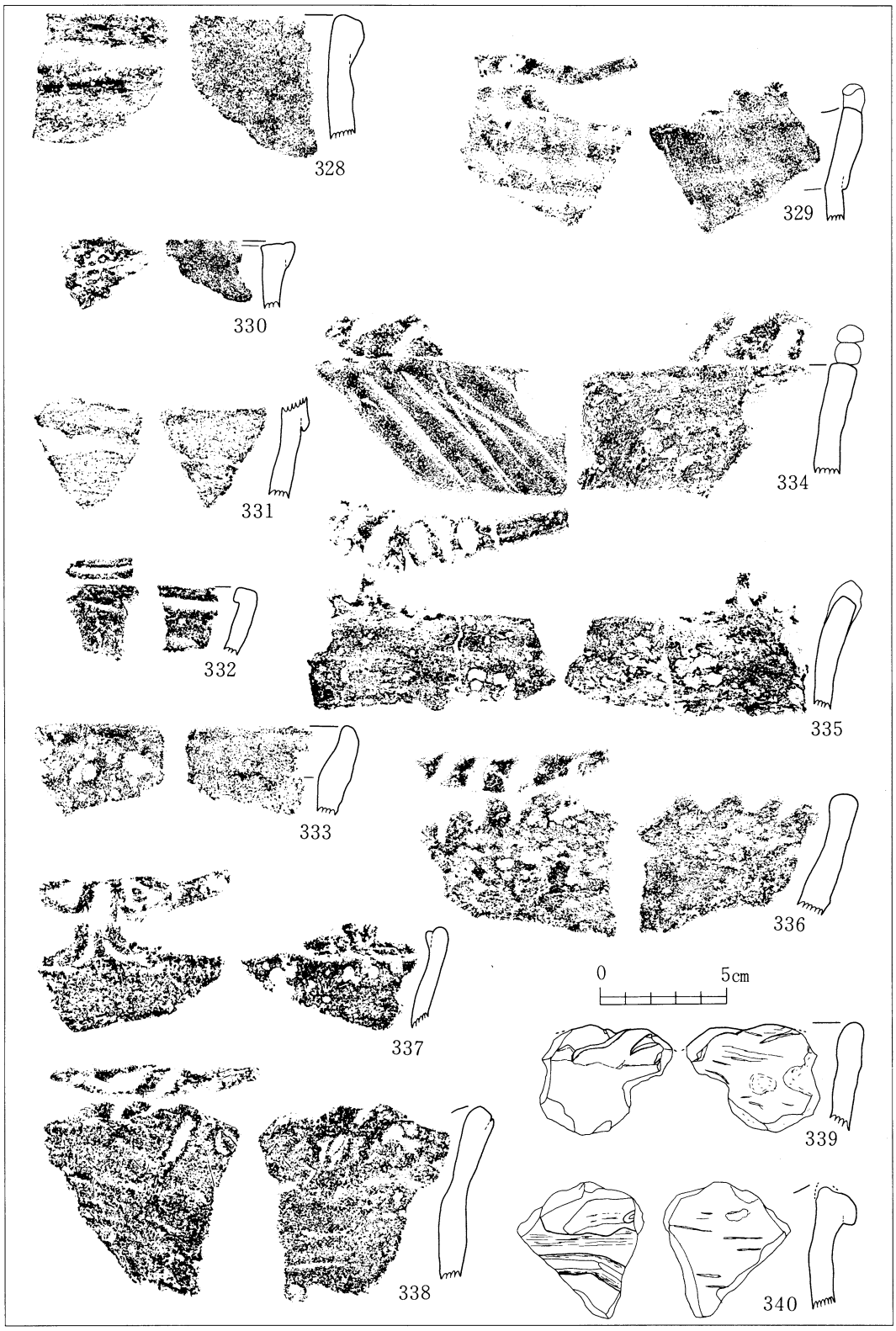
(15) XV類（第36図～第38図，**314～355**）

外面に文様のないもので，口唇部に刻みのあるもの（**347～355**）とないものとに大別できる。

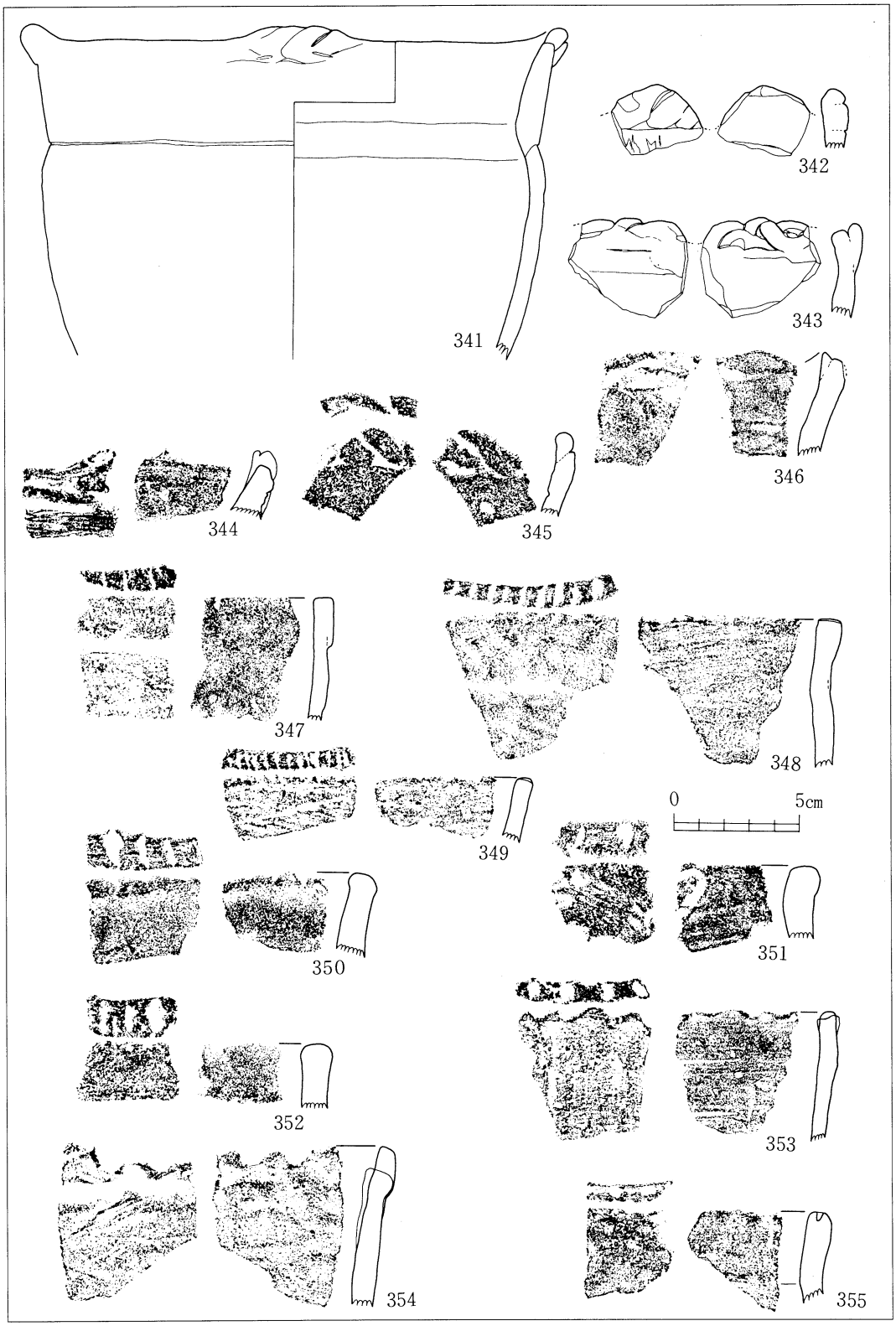
314～325は胴部からほぼまっすぐ口縁端へ伸びるものであるが，直立するものと，外へ開くもの，内弯するもの，あるいは端部が矩形を呈するものと丸みをもつものなどに分けられる。また，太いものと細いものとにも分けられる。**323**と**324**は波状口縁となる。**325**は灰褐色を呈し外にひびが多くみられるもので，端部がわずかに内曲する。



第36図　縄文土器　(29)　XV類



第37図　縄文土器　(30)　XV類



第38図　縄文土器　(31)　XV類

326・327は口縁部が外反するもので，端部は丸くなる。

328～331は貼付けによって口縁部を肥厚さすもので，肥厚部が短いものと長いものとがある。**329**は内面が胴部から口縁部へ移る部分で屈曲し，突起を有する。突起部は口唇部にヘラ押圧がみられる。

332・333は内面が段をなすものである。**332**は端部内側に粘土ひもを貼付けて肥厚させている。

334～346は粘土ひもをねじり合わせて口唇部に貼付ける。貼付部は丁寧にナデているものがある。**334**は外面に浅い斜方向の凹線が，**337・344**は口縁下部に凹線が，**346**は口縁端近くに沈線がみられる。**341**は口縁直径が22㎝あり，口縁と胴部の境の積み上げ部は沈線風の段となっている。**335**は板状突起があり，ここに深いヘラ押圧が施される。

347～354は口唇部にヘラ刻みがみられる。**347・348**は口縁部に粘土を貼付け肥厚させている。**354**は口唇部に深い押圧がある。

355は口唇部にヘラ刺突がみられる。

茶褐色，淡茶褐色，黄みがかった淡茶褐色，暗茶褐色を呈したものが多いが，内面は赤っぽいもの，黒褐色のものもある。焼成度は良好なものもあるが，概して良くない。黄色石・白色石・雲母・石英の多い砂質土を用いている。

(16) XVI類（第39図**356～376**）

これまで15種類に分けてきたが，XVI類はこれらのいずれにもはいらない特殊なものである。

356は内面が胴部から口縁へ稜線をもつほど強く屈曲するもので，内面や外面の口縁部は丁寧な横方向ヘラナデであるが，外面胴部は粗い横方向ヘラナデで仕上げる。口縁部外面には，ヘラによる横方向凹線が多く引かれる。

357は口縁内部が端部近くで強く屈折してそこに２条の沈線とヘラ刺突文が付されるもので，内外とも横方向のヘラナデで仕上げる。

358も内部が口縁端近くで内側に段を持ち薄くなるもので，波状口縁となる。外面は横方向と下へ垂れ下がる突帯が付され，口唇部にはヘラ刻みが付される。

359～361は赤色塗彩土器である。**359**は波状の肥厚口縁となるもので，全面にベンガラが塗られている。**360**は口縁端が内側に突出する薄い土器で，外面のみに濁ったベンガラが塗られている。**361**は口縁端の一部が欠けているが，口縁端に肥厚する貼付突帯のあるものである。

362は粘土ひもを口縁に貼付け，リング状の文様を作る。その下に橋状の粘土ひもを貼付ける。

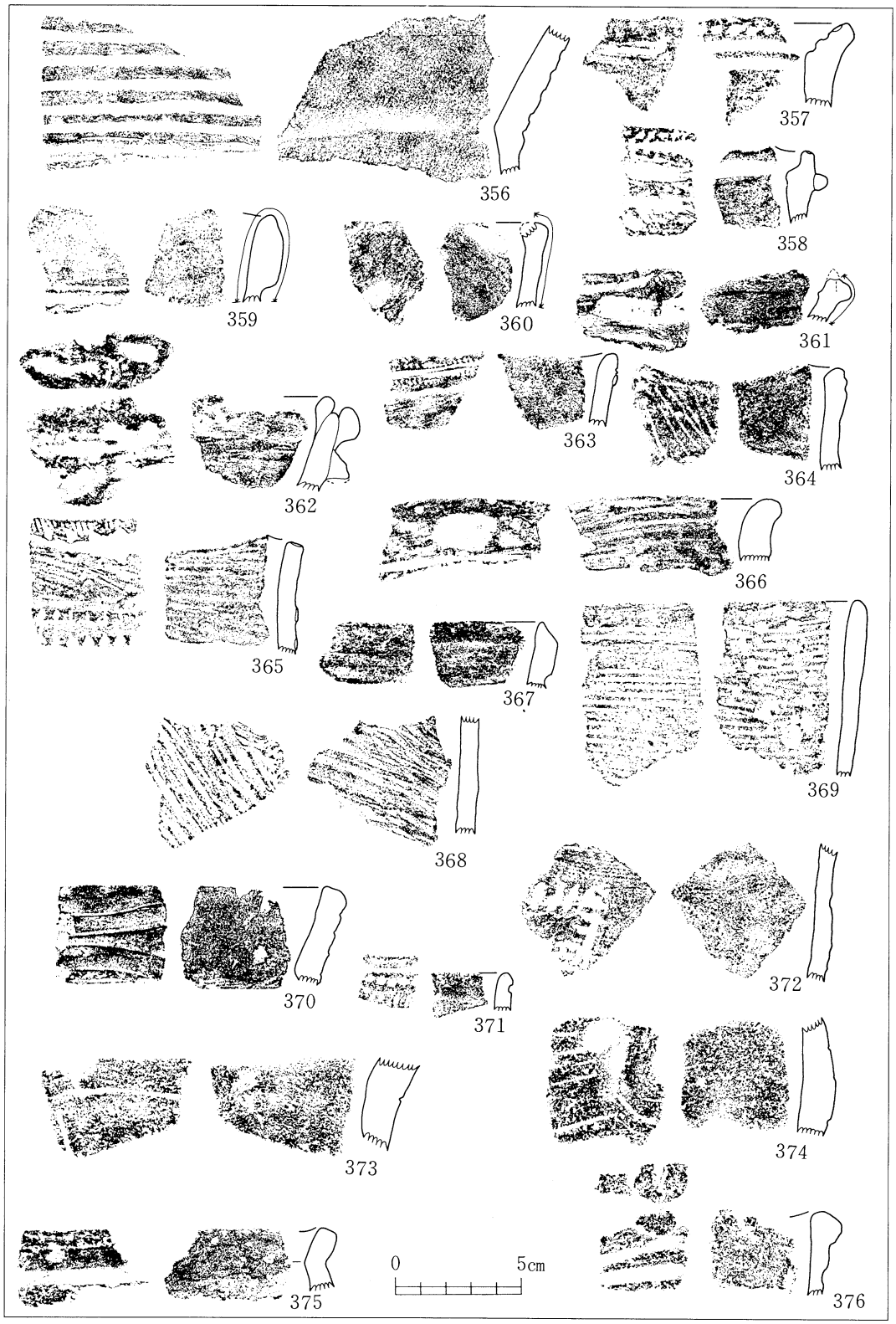
363は波状口縁となるもので，口縁端と貼付突帯部分に巻貝様の押圧がみられる。

364も波状口縁で外面には横方向沈線と，右下がりの細沈線，刺突文がある。

365は内外とも貝殻条痕のあとヘラナデをしており，口縁下部にある２条の貼付突帯にはヘラ刻みが付されるが，２条とも一気に付している。波状口縁となり，口唇部には二枚貝押圧とヘラ刺突がある。

366は外反する厚手の口縁部で，横方向のヘラ凹線がみられる。内面は粗い横方向のヘラナデで仕上げる。

367は口縁端で強く屈曲し口縁部が三角状となるもので，その下に横方向の凹線がみられる。



第39図　縄文土器　(32)　XVI類

368・369は直に立ち上がる口縁部で，内外とも横方向の貝殻条痕で仕上げる。**369**は石英・白色石・茶色石・黄色石などの入った粗い土を用いており，内面の剝脱が目立つ。

370はヘラで幅広くナデてその下に凹線のあるもので，ヘラ押圧文もみられる。

371は小形の土器で文様の細かなヘラ刺突，ヘラ押圧がみられる。

372は外面に矩形をなす二枚貝押圧がみられる。

373・374は焼きが悪く表面・割れ口とも磨滅のひどい土器で，外面に矩形・曲線のヘラ沈線がある。黄みがかった茶褐色を呈している。

375は頸部で強くくびれる土器で，口縁直径が約16cmある。波状口縁となり，黄色石が多く含まれている。淡茶褐色を呈するが部分的に赤っぽい。

376は2条の凹線があるもので，口唇部にW字の貼付突帯がある。

(17)把手（第40図**377**～**384**）

深鉢の口縁部に取り付く装飾物である。

377は凸形を呈する突起部分と思われる。下部には円孔があり，口縁端と円孔の間に把手の剝脱痕がみられる。灰色がかった茶褐色を呈し，表面の剝脱が目立つ。内面はヘラナデで仕上げている。

378は扁平な平面となる把手状のものであるが，形態がはっきりしない。口唇部に縄文がみられ，内・外面とも粗いヘラナデで仕上げている。下・右とも丁寧にナデていることから，口縁端に付く橋状把手である可能性がある。

379は細い棒状の把手で，表面に縦方向の凹線があり，裏面には剝脱痕跡がみられる。焼成が悪く，表面の磨滅が目立つ。

380は壺状土器の肩部近くにある橋状の把手で，上面には渦巻状の凹線が，外面には囲いの凹線と，二段のヘラ押圧文がみられる。内面はヘラナデで仕上げている。茶褐色を呈し，焼成良好である。

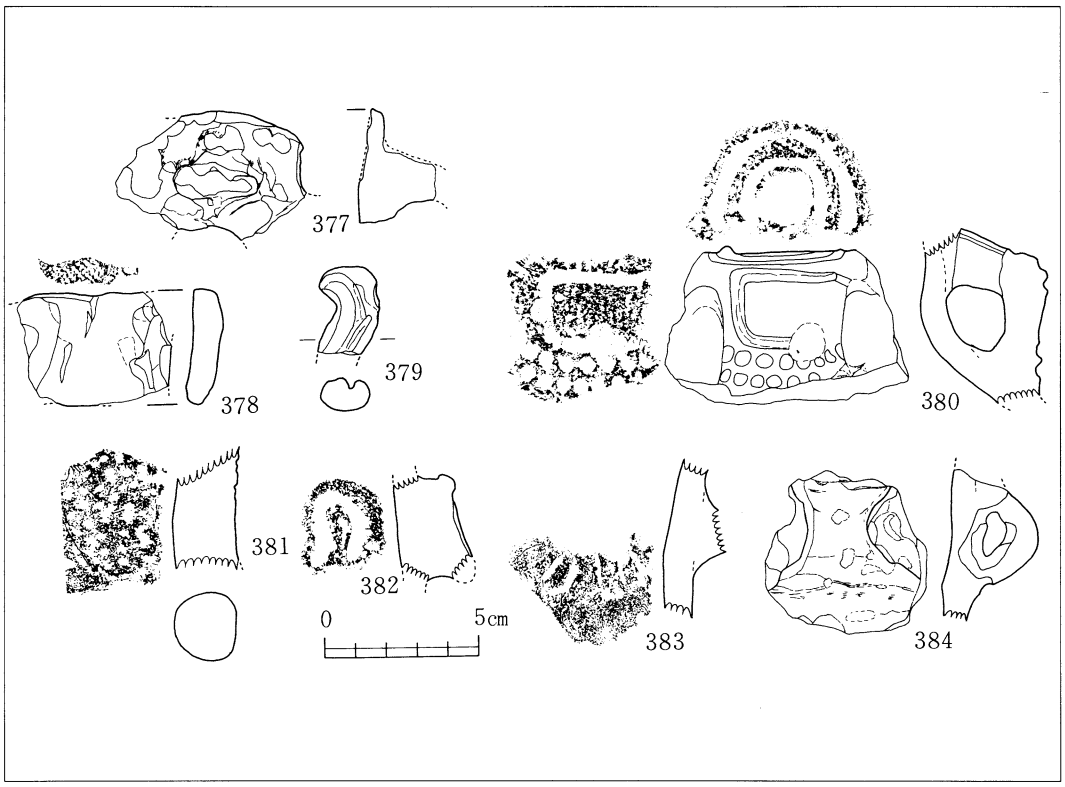
381は直径2cmほどの円筒状を呈する把手で，ヘラナデの仕上げであるが，一面にヘラの刺突文がみられる。

382はこぶ状の突起で，上に2個のヘラ押圧がみられ，耳様の形態をしている。外面には曲線文様のヘラ凹線がみられる。焼成が悪く磨滅している。

383は上へのびる橋状把手の剝脱部であるが，把手の下方に5本のヘラ沈線がみられる。内外ともヘラによる横ナデ調整ではあるが，特に外面は丁寧にナデている。茶褐色を呈しているが，内面はやや暗い。

384も橋状把手で，内面はヘラによる丁寧な横ナデ，外面は粗いヘラナデで仕上げている。茶褐色を呈し，焼成良好である。

いずれも石英・雲母・白色石などの細かい石を多く含んだ砂質土を用いている。



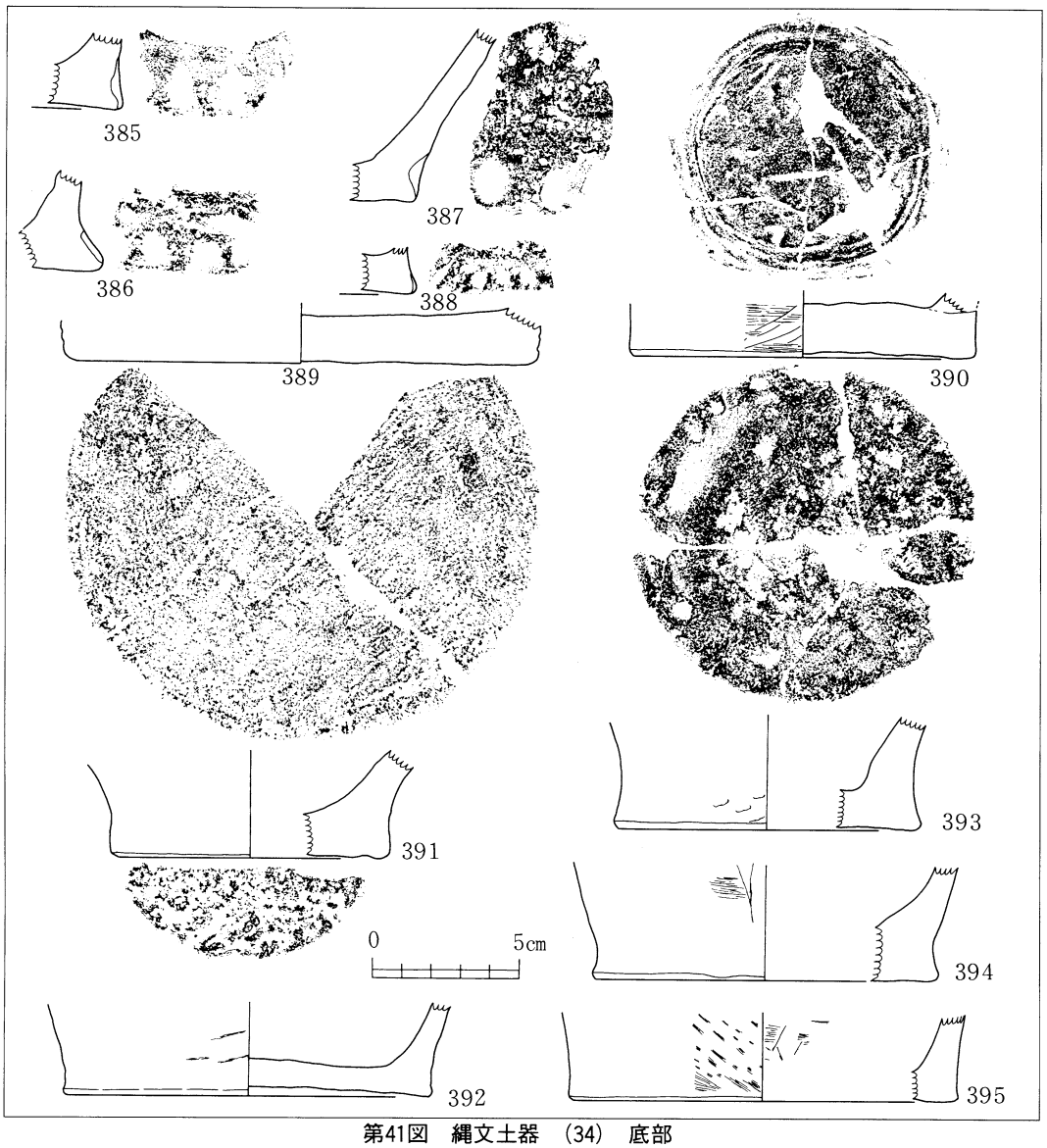
第40図　縄文土器　(33)　把手

(18)底部（第41図～第44図，**385～439**）

深鉢の底部には平底のものと，上げ底あるいは脚台付きのものとがある。平底には底を丁寧にナデたものと，圧痕のあるものとがあり，圧痕のものにはアンペラ状の敷物をしたものが多い。

385～388は底端に木の実あるいはヘラによって押圧が連続的に施されるものである。深い方（**385・387**）が木の実，浅い方がヘラによるものと思われる。**386**は端部に粘土を貼付けて肥厚させており，底には何かの圧痕がみられる。他の３点の底は丁寧にナデている。内面・外面ともヘラナデで仕上げている。明茶褐色・茶褐色を呈しているが，**386・387**の底は灰白色を呈している。焼成はともに良くない。

389～410は平底で，底は丁寧にナデるか，敷物の種類がはっきりしないものの圧痕があるものである。**389**は直径16cmと大きく，底はヘラによって粗くナデているが，内底部のヘラナデは丁寧である。**390**は直径が12cm近くあり，中央がややくぼんでいるが，敷物の種類は不明である。底部に胴部をのせる作り方をしており，内底部は丁寧なヘラナデで仕上げている。外面は横方向のヘラナデである。**391・398**は網代底である。**392～397・399**の底はヘラで丁寧にナデており，**392**は上げ底となる。直径は11～13cmのものが多いが，**396**は7.5cm，**397**は９cm，**399**は７cmとやや小型である。いずれもヘラナデで仕上げているが，**395**はケズリに近い粗いナデである。**393・405**は内側の角を指で押してナデており，**394**は底に粘土を貼付けて厚くしている。**400**は繊維状の圧痕がみられる。**404**は直径が16cmもある大型のもので，底部はまず胴部に巻き付けるように



第41図　縄文土器　(34)　底部

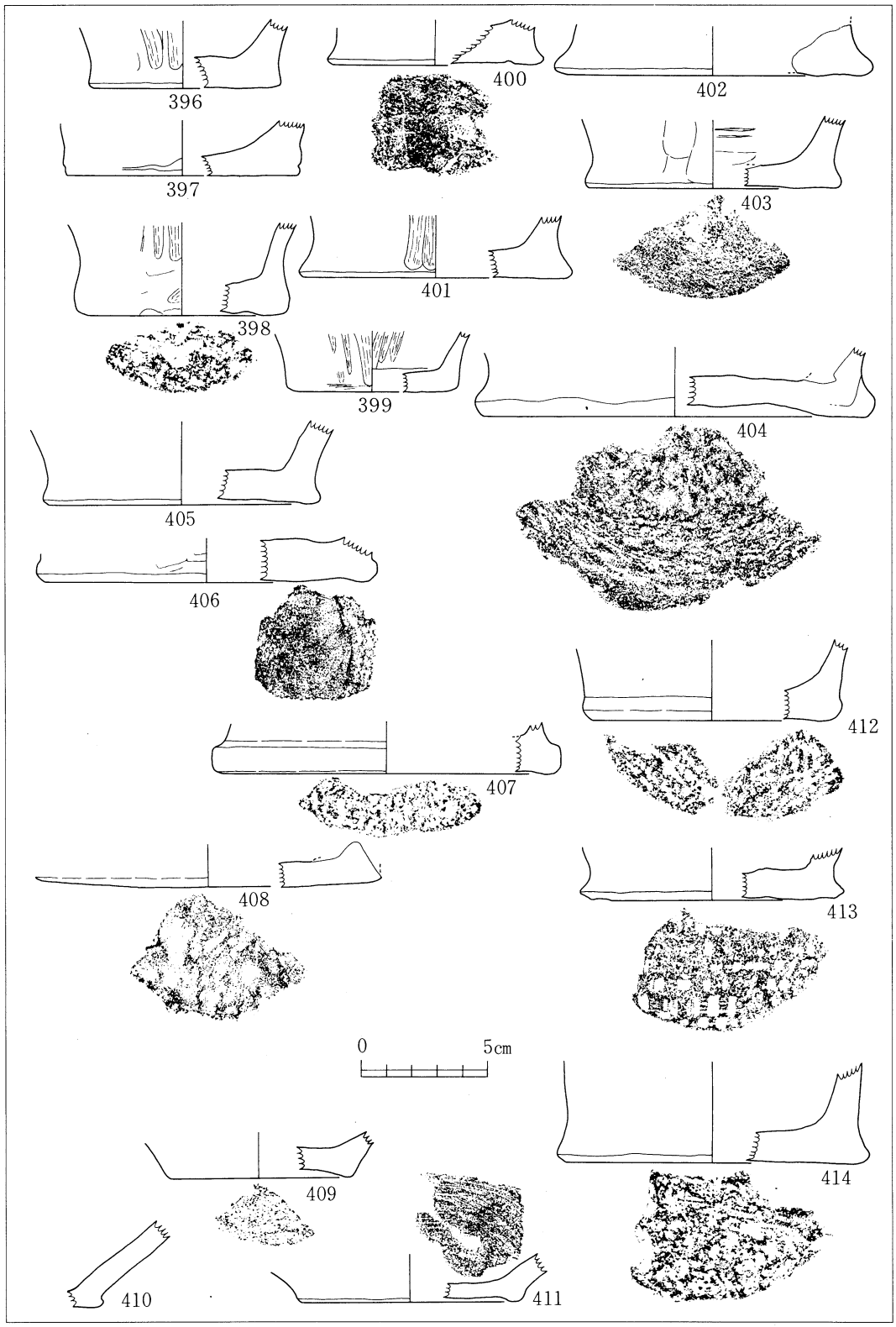
して貼付け，さらにその外に粘土を貼って，外へ張り出す底部を形作っている。**406**は底部の内側を丁寧にナデて，周囲のみ一段高い平らな面が残るような形となる。

407は底部近くで外へ広がり，張出し部分が平坦な面をもつものであり，あげ底となっている。

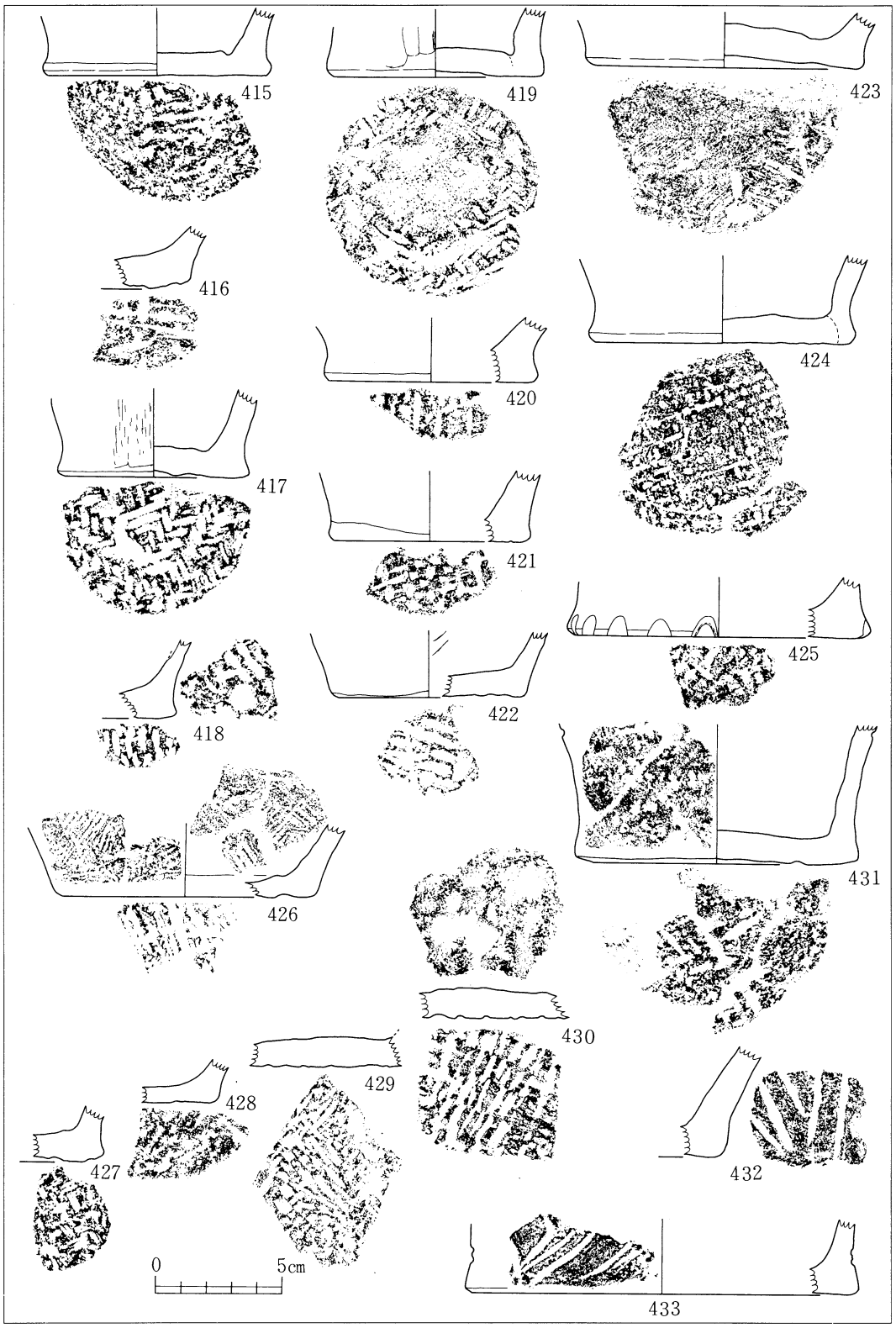
408は底部の周囲を工夫して胴部との貼付けがうまくいくように作られているもので，底には楕円形状の圧痕がみられるが，敷物の種類ははっきりしない。**409**は直径が7㎝の小型のもので，あげ底となる。**410**は底部から胴部へ開きながらいく器形を呈し，底部端はしぼっている。内外面・底部ともヘラによる丁寧なナデで仕上げている。

411はあげ底で，器壁の薄い土器である。内外ともヘラによる横ナデであるが，剥脱が目立つ。

412～**431**は底にアンペラ状の圧痕がある。胴部から底部へまっすぐおりるものと，底部近くで張り出すものとがある。底部と胴部の貼付けは，底部の上に胴部をのせる方法（**414**など）と，



第42図　縄文土器　(35)　底部



第43図　縄文土器　(36)　底部

底部の周りに胴部をかぶせる方法（**419・424**など）とがあり，**425**のように底部の周りに粘土を貼付けて外回りを肥厚させているものもある。内外ともヘラナデで仕上げているが，なかには粗い仕上げ（**418**など）のものもある。底はほとんどそのままであるが，**419・424**などのように，圧痕の跡をナデているものもある。内面の胴部との境はそのまま変化するものと，ヘラや指などで押圧して段をなすものとがある。

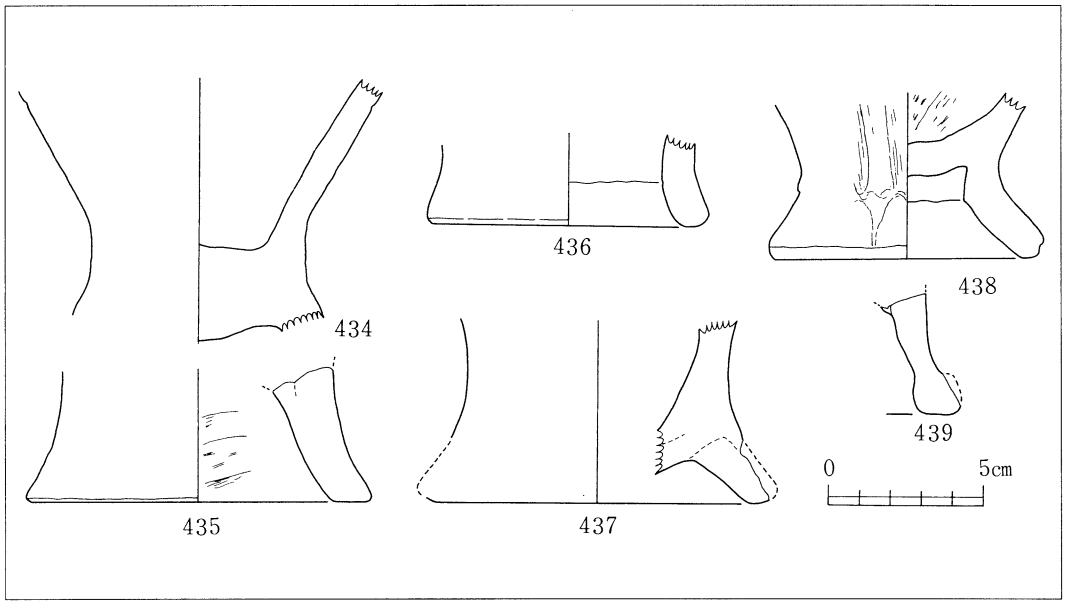
423はあげ底となる底部であるが，底にシダのような植物の葉痕跡がみられる。

明茶褐色・淡茶褐色・茶褐色を呈するものが多く，他に黄みがかったもの，暗い色を呈するものなどがある。焼成はあまり良くなく，磨滅が目立つものもある。白色石・石英・雲母・黄色石などの細かい石を多く含んだ砂質土を用いている。

432は底部近くに縦方向の沈線がみられるが，この沈線は粘土が乾きかけてから施している。**433**は底部からまっすぐ立ち上がる器形をしており，底部近くまで３本沈線に囲まれた縄文がみられる。外面はミガキに近い丁寧なヘラナデで仕上げている。明るい茶褐色を呈し，焼成はやや不良である。石英などの細かい石を多く含む胎土を用いている。

434～**439**は脚台の付くものである。端部は畳付部が平らになっているものと，丸みをもつものとがある。**434**は底部が部厚くなっている。**435・439**は鉢と脚台を接合した後，内側から粘土を貼付けて補填している。**437**は粘土を継ぎ足して脚台を作り上げた状況をうかがうことが出来る。**438**は鉢と脚台を接合した後，内側に粘土を補填していないため空洞部分が出来ている。

内外ともヘラナデで調整しているが，外面は縦方向，内面は横方向にナデている。**435**は焼成が良いが，他は悪く磨滅しているものもある。明茶褐色を呈したものが多く，他に黄みがかった茶褐色，茶褐色のものもある。**436**は畳付部が灰白色を呈している。白色石・石英・雲母・黄色石などの細石を多く含む砂質土を用いている。

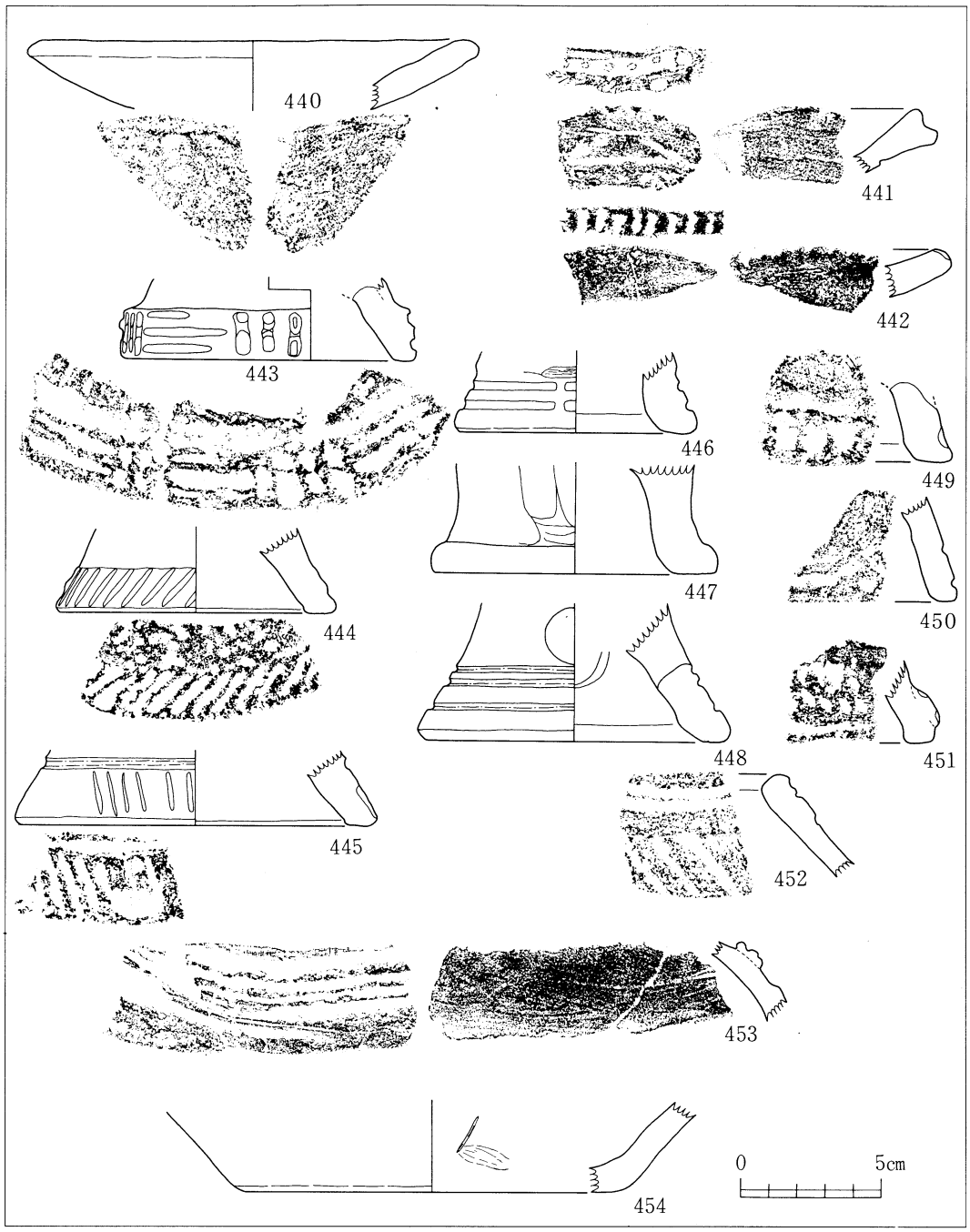


第44図　縄文土器　(37)　底部

(19)台付浅鉢（第45図**440～451**）

浅鉢あるいは皿に脚台が付くものである。

440～442は鉢部分である。**440**は口縁直径が約16cmの皿様のもので端部は丸みを帯びている。外面は横ナデ，内面は条痕様の粗い横ナデで仕上げている。**441**は口唇部に短絡線があり，その中に刺突文がみられるが，端部のものは太くて押圧文となる。下端にはヘラ押圧が施されている。内面はヘラによる丁寧



第45図　縄文土器(38)　台付浅鉢・壺・鉢

な横ナデ，外面はヘラによる粗いナデ仕上げである。**442**は内外ともヘラナデで仕上げているが，口唇部に二枚貝の押圧文がみられる。

443～**451**は直径が９～13cmある脚台部分である。**443**は裾部に短絡線と押圧文からなる文様がみられるものである。短絡線は３条ある。押圧文は２段，３列で構成され，６か所にみられる。脚台部は貼付けによって作られ，外面にさらに粘土を貼付けて肥厚させている。**444**・**445**は裾部に斜方向のヘラ沈線がみられるもので，**444**が左下がり，**445**が右下がりとなる。**445**は斜め沈線の上部に凹線がまわっている。**446**は途中で切れる凹線が２条まわっている。**447**は裾部が肥厚するが，無文である。**448**は下方に３条の凹線が巡り，その上に円孔がうがたれているものである。**449**は裾部にヘラ押圧があり，上部には剝脱部がある。鉢部と接合の後，更に外から粘土をかぶせる手法である。**450**と**451**は２段にヘラ刺突のあるもので，**451**は裾部を粘土貼付によって肥厚させている。これらはいずれも，ヘラ横ナデで仕上げている。

淡茶褐色を呈したものが多く，他に明茶褐色・黄茶褐色のものがある。畳付部がカルシウム分らしい灰白色を呈したものもある（**443**・**447**）。**442**・**445**は焼成良好であるが，他はあまり良くない。白色石・石英・黄色石・茶色石・青灰石・雲母などの細かい石を多く含む砂質土を用いている。

(20)壺（第45図**452**・**453**）

452は端部が丸く終わる無頸壺の口縁部で，外面には端部近くに２条の横方向凹線と，右下がりの凹線がある。内外ともヘラ横ナデで仕上げる。乳茶褐色を呈し，焼成があまり良くなく，表面は磨滅が著しい。砂質土を用いている。

453は２条のヘラ沈線が付された突帯の貼付けられた肩部である。外面はヘラナデで仕上げているが，特に肩部は丁寧にナデられている。内面はヘラによる横ナデである。茶褐色を呈しているが，外面はやや黒っぽい。砂質土を用いており，焼成は良好である。

(21)浅鉢（第45図**454**）

直径が13cmある底部で，胴部との境は丸みを帯びている。内外ともヘラナデで仕上げている。黄みがかった茶褐色を呈し，焼成度が良くないため表面には多くのヒビ割れがみられる。石英の細石を多く含む砂質土を用いている。

(22)晩期の土器

晩期の土器は精製土器・粗製土器・突帯文土器とに大別でき，器種として深鉢・浅鉢・まり・鉢とに分けられる。

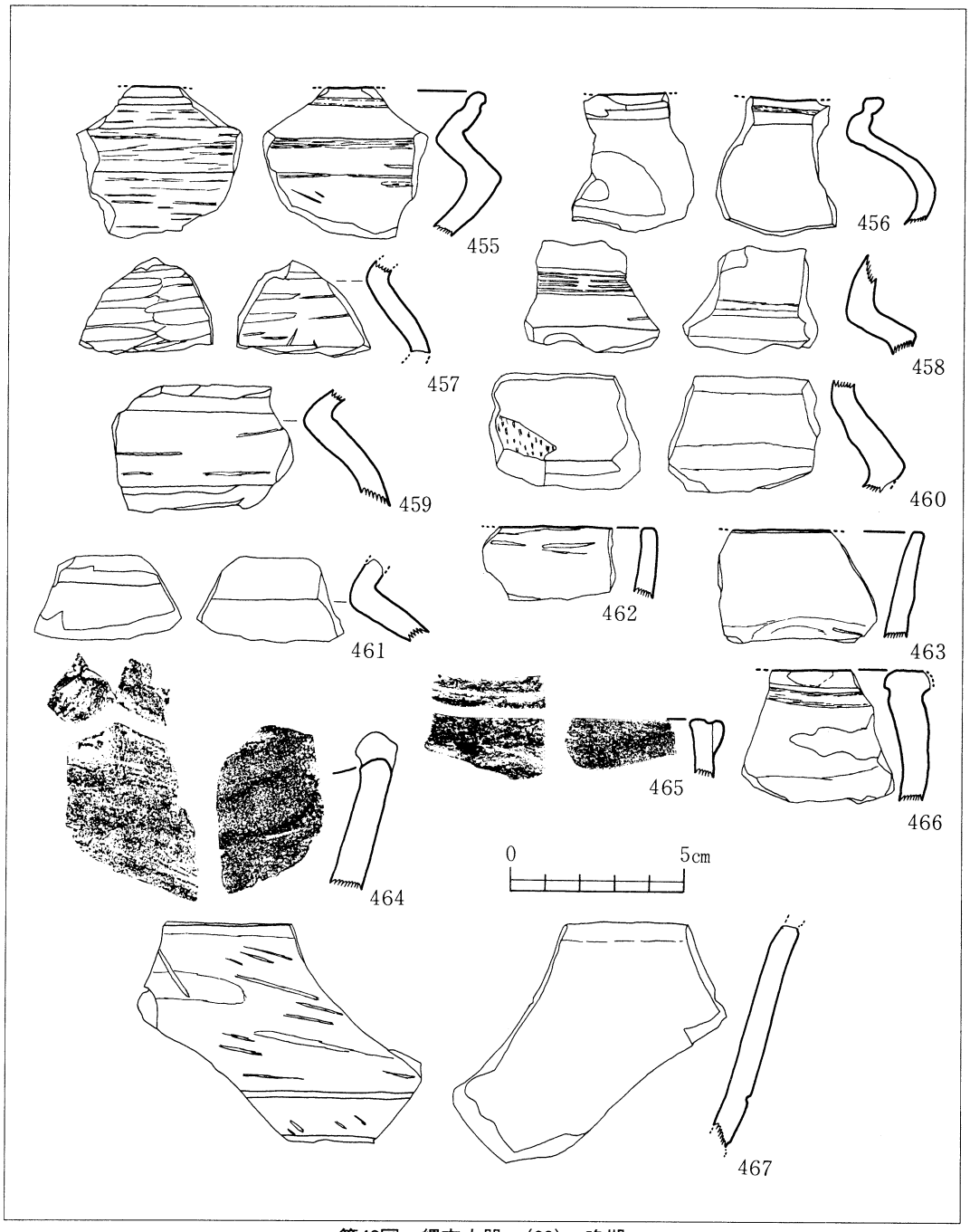
①精製土器（第46図**455**～**458**・**461**～**463**・**467**）

455～**458**・**461**～**463**は浅鉢である。口縁部は内外に１条ずつの沈線を施して強く外反するものと，まっすぐ外へ開くものとがある。頸部で屈曲して胴部に至るが，肩部がまっすぐ直線的にのび，胴部で屈曲して下半部へいくものと，肩部から丸みをもって胴下半部へ至るものとがある。外面は横方向のヘラミガキ，内面は丁寧な横方向のヘラナデで仕上げ，**456**は外に黒斑がみられる。外面は光沢ある黒褐色を呈するものと，明茶褐色・淡茶褐色を呈するものとがある。焼成度は良好なものと軟質なものとがある。胎土は角閃石・石英・白色石等の細かい土を用いている。

467は平らな底からまっすぐ外へ開きながらのびる鉢の胴部で，３本の鋭い深い沈線が巡っている。外は丁寧な横方向のヘラミガキ，内面は横方向のヘラナデで仕上げる。黒色を呈するが，表面はやや白っぽい。焼成度は普通で軟質である。白色石の多い細かい土を用いている。

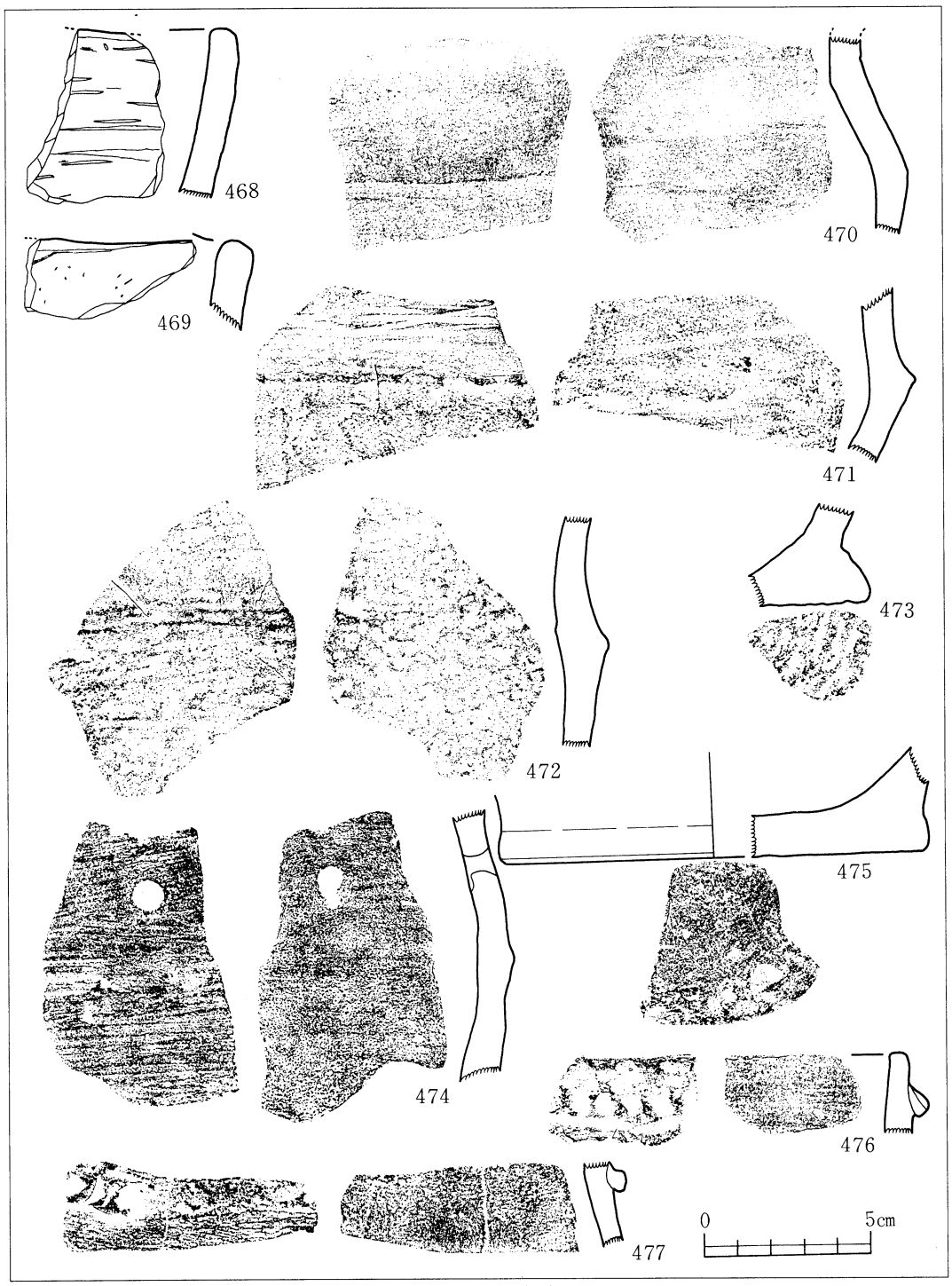
②粗製土器（第46図・第47図，**459・460・464～466**，**468～475**）

468～475は深鉢である。口縁は外へ開いており，端部は丸みを帯びた矩形を呈する。**469**は波



第46図　縄文土器　(39)　晩期

状口縁である。頸部でくびれたあと外へ折れるが，肩部はややふくらむものとへこむものとがある。胴部上半で稜線をもって底部へ向かう。底部は端部近くでくびれて外へ広がっているが，**473**は強く外へ開いている。底は網代底であるが，**475**は周辺のみに痕跡を残し，中央部は丁寧に



第47図　縄文土器　(40)　晩期

ナデ消している。**474**は肩部に表と裏の両面から穿孔した円形の孔がみられるが，裏面は途中でやり直しをしている。表面調整はヘラナデのものと貝殻条痕のものとがある。

茶褐色・淡茶褐色の色調を呈しているが，外はススが付着したりして黒っぽい。焼成度は概して良い。白色石・石英・角閃石・茶石などの細かい石を多く含む砂質土を用いる。

459・**460**・**464**・**465**は浅鉢である。**465**は口縁端部に粘土紐を貼りつけたもので，肥厚した口唇部には１条の沈線がみられる。**464**はやや大型のもので波状となる口縁をもっている。内面は横方向のヘラミガキで仕上げている。**459**と**460**は肩部の破片である。頸部で強くくびれ，口縁は外へ開く。肩部から胴下半部へは稜をもって強く屈曲する。輪積み技法である。**459**は外に剝脱が，**460**はヒビが目立つ。ともにナデ整形である。色調・胎土とも深鉢と似ている。

466はまり形土器である。口縁は下部にヘラによって横方向に凹線を引き内外に張り出したようにしている。内外ともヘラによる横ナデで仕上げる。茶褐色を呈し焼成度は普通である。

③突帯文土器（第47図**476**・**477**）

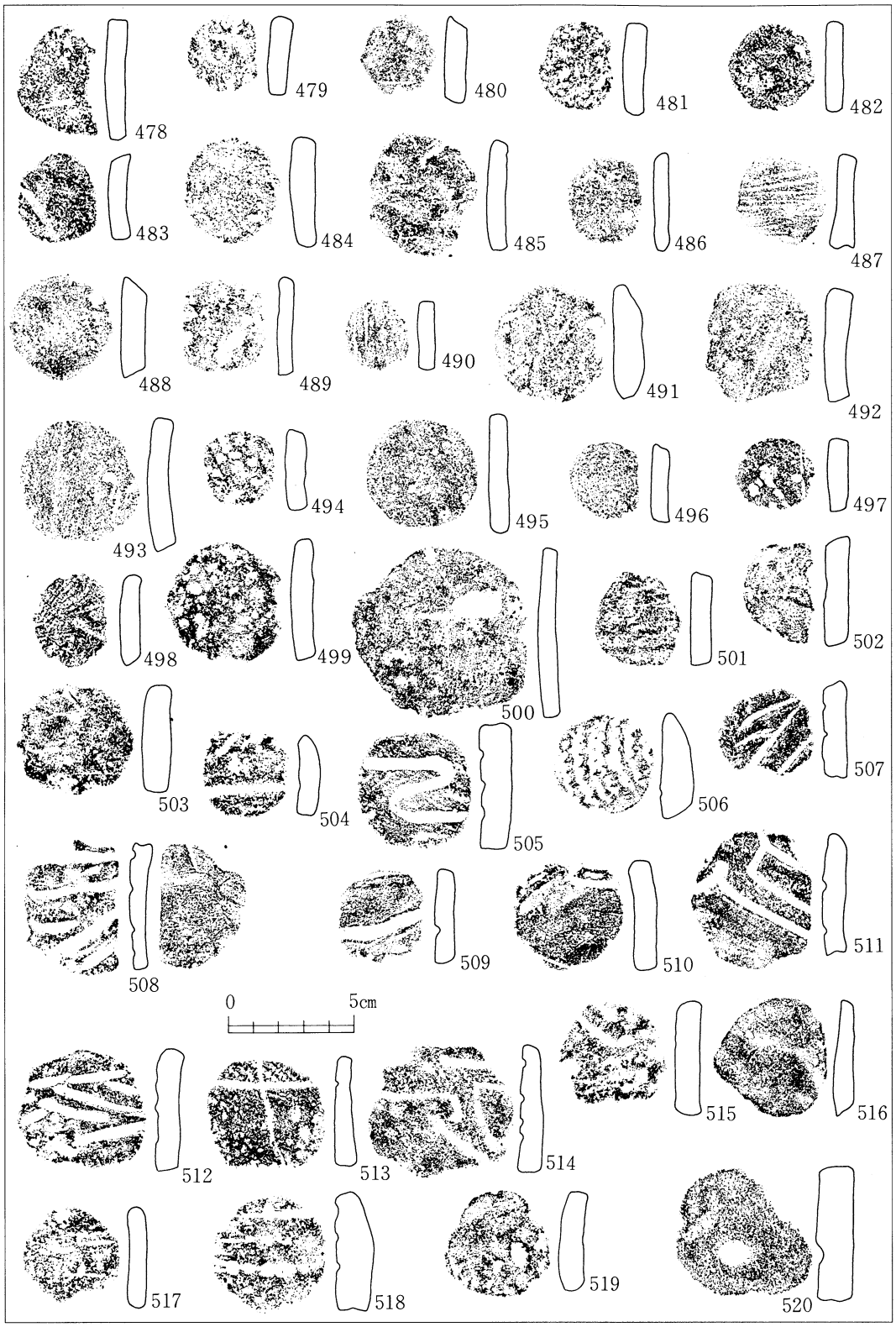
口縁端よりいくらか下方に，上面にヘラ刺突文を施した貼付突帯のある土器で，**477**は突帯がやや屈曲している。口縁端は矩形を呈している。内外ともヘラによる横ナデで仕上げている。焼成度は普通で，乳灰色・暗茶褐色を呈している。３㎜大ほどまでの細かい赤石・白色石・石英などを多く含む胎土である。

２）土製品（第48図・第49図，**478**～**564**）

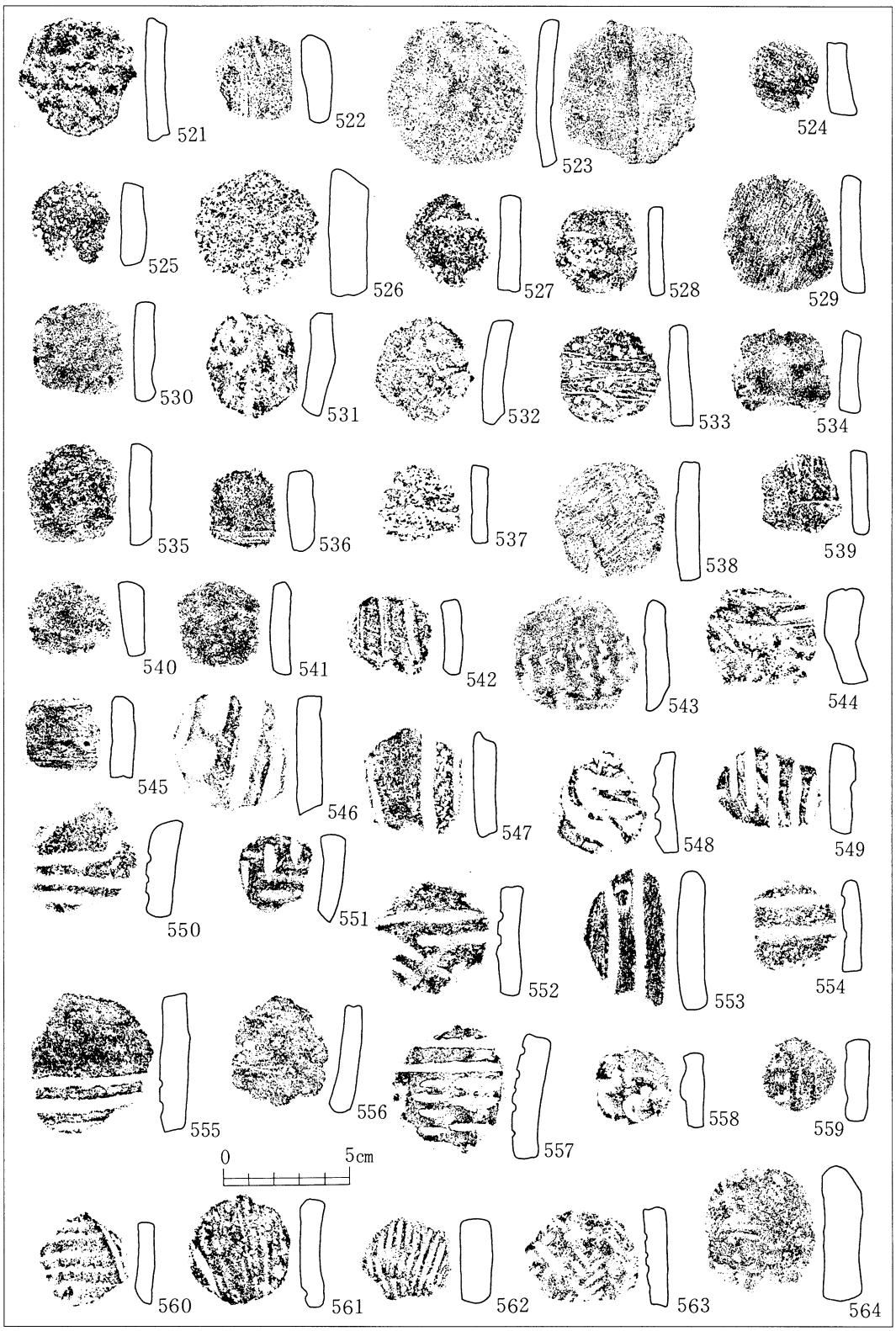
土器破片の周辺を打ち欠いて円形にしたものが多く出ている。この中には周辺を研磨したもの（**478**～**520**）と，打ち欠いただけのもの（**521**～**564**）とがある。

478～**520**の周辺研磨は全周を研磨したものはあまりなく，一部だけを研磨したものが多い。**478**～**503**・**516**・**517**は無文のもので，**478**・**502**は半欠品である。**487**は肩部で内外とも粗いヘラナデで仕上げている。**504**はヘラ沈線とヘラ押圧文のある口縁部である。**505**はＳ字状の凹線である。**506**は口縁部で，端部近くまで二枚貝押圧がみられる。**507**～**509**・**511**には凹線がみられる。**510**は凝縄文で，沈線間にはヘラ押圧がある。**512**はヘラ短絡線がある。**513**・**514**は磨消縄文のみられるものである。**515**・**518**～**520**は底部を利用したもので，**518**はアンペラ状敷物の圧痕がみられる。直径が３㎝しかない小さいものから，７㎝もある大きなものまである。磨滅しているものが多い。

周辺を打ち欠いただけのものの中には土製品かどうか疑わしいものもあるが，形態的に円形に近いものは含めている。**521**～**541**・**556**は無文である。**552**は口縁部，**533**は細いヘラ沈線みたいなものがみられる。**542**～**545**・**560**は口縁部である。**542**は口唇部にヘラ押圧がみられ，その下に縦方向ヘラ沈線がある。**543**は二枚貝押圧が平行に押される。**544**は口縁にねじり紐の貼付けられるもので，その下にヘラ沈線がある。**545**は無文である。**560**は口唇部にヘラ押圧があり，その下に二枚貝押圧文とヘラ沈線がある。**546**・**548**はヘラ凹線，**547**は磨消縄文である。**549**～**555**・**557**・**561**はヘラ沈線あるいはヘラ短絡線である。**558**は肥厚部にＳ字押圧文がある。**559**はヘラ押圧，**562**は貝殻条痕の土器を利用している。**563**・**564**は底部を利用しているが，**563**はアンペラ状敷物の圧痕がみられる。これも直径３㎝の小さいものから直径5.5㎝大のものまである。


478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
0
5cm
512
513
514
515
516
517
518
519
520

第48図　土製品　（1）


521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
0
5cm
560
561
562
563
564

第49図　土製品　（2）

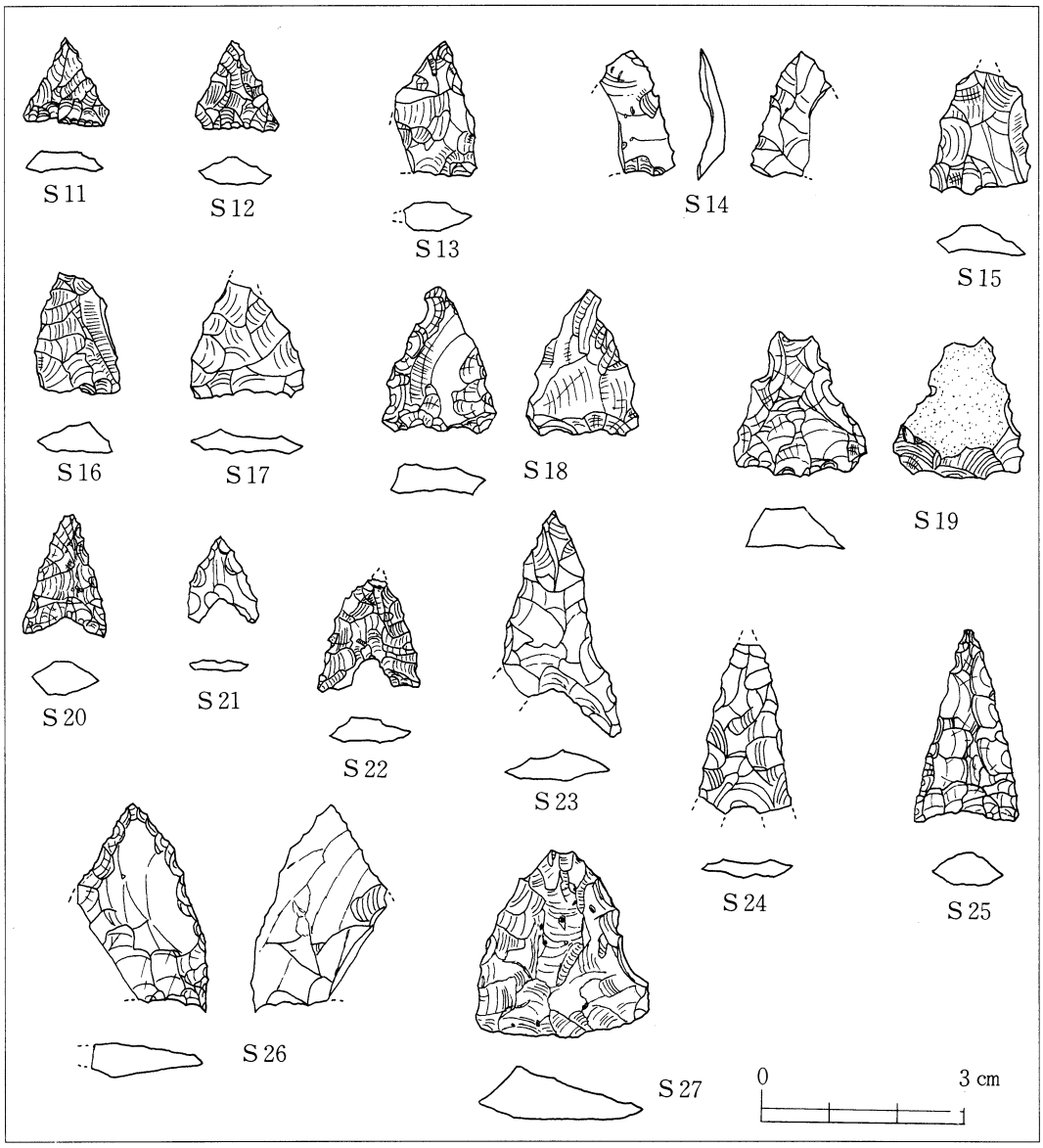
3）石　器

多量の石器がある。定形的な石器は石鏃・石匙・石錐・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・石錘・ピエスエスキーユ・磨石・叩き石・石皿があり，他に石核・剥片も多い。

（1）石鏃（第50図 **S 11～S 27**）

25点あり，形態・大きさなどから，底辺が直のものとえぐりのあるもの，小型のものと大型のもの，正三角形のものと二等辺三角形のものなどに分けられる。これらを大きく5種類に分けた。ほとんどが黒曜石製で，他にチャート製が3点，安山岩製が1点，蛋白石製が1点ある。

Ⅰ類（**11・12**）は長さが1㎝余りの小型のもので，正三角形に近い形をしている。細かい調整剥離がしてあり，整った形をしている。4点あり，いずれも黒曜石製である。



第50図　石　器（3）

Ⅱ類（**13～19**）は長さが約２㎝の正三角形をしたもので，12点ある。粗い調整のものが多く，その中には一次剝離面を残し，片面はほとんど調整していないものもある。**14**は弯曲した剝片を利用している。黒曜石製のものが多く，他にチャート製のものが１点ある。

Ⅲ類（**20～22**）はえぐりのあるもので４点ある。１点を除きいずれも丁寧な調整で仕上げている。**20**はサメ歯状の側辺部を呈するもの，**21**は長さ13㎝の小型のもの，**22**は鍬形の基部を呈するものである。いずれも黒曜石製である。

Ⅳ類（**23～25**）は長さ約３㎝の二等辺三角形を呈するもので３点ある。基部はえぐりがあり，浅いものと深いものがある。調整は丁寧で，**23**は片脚が，**24**は先端部と両脚が欠損している。**23・24**はチャート製，**25**は安山岩製である。

Ⅴ類（**26・27**）は正三角形に近い大型のもので，２点ある。**26**は蛋白石製で，えぐりがある。周辺だけを細かく調整した粗い作りのもので，片面は一次剝離面を広く残している。**27**は黒曜石製の三角鏃で部厚い作りである。調整は粗い。

（２）石匙（第51図**Ｓ28～Ｓ30**）

縦形のものが２点，横形のものが１点出ている。縦形のものはいずれも片面に自然面あるいは一次剝離面を残しており，片面の調整は周辺のみか，あるいはほとんどみられない。**28**は４区３層で出土した蛋白石製のもので，**29**はチャート製である。**29**はつまみ部と刃部先端が欠けている。横形のもの（**30**）も一部に自然面を残しているが，両面から調整を加えている。半欠の黒曜石製で６区３層から出土している。

（３）石錐（第51図**Ｓ31**）

片面のみを加工した縦長のもので，片面も先端部と一側辺のみを加工している。安山岩製で，表採品である。

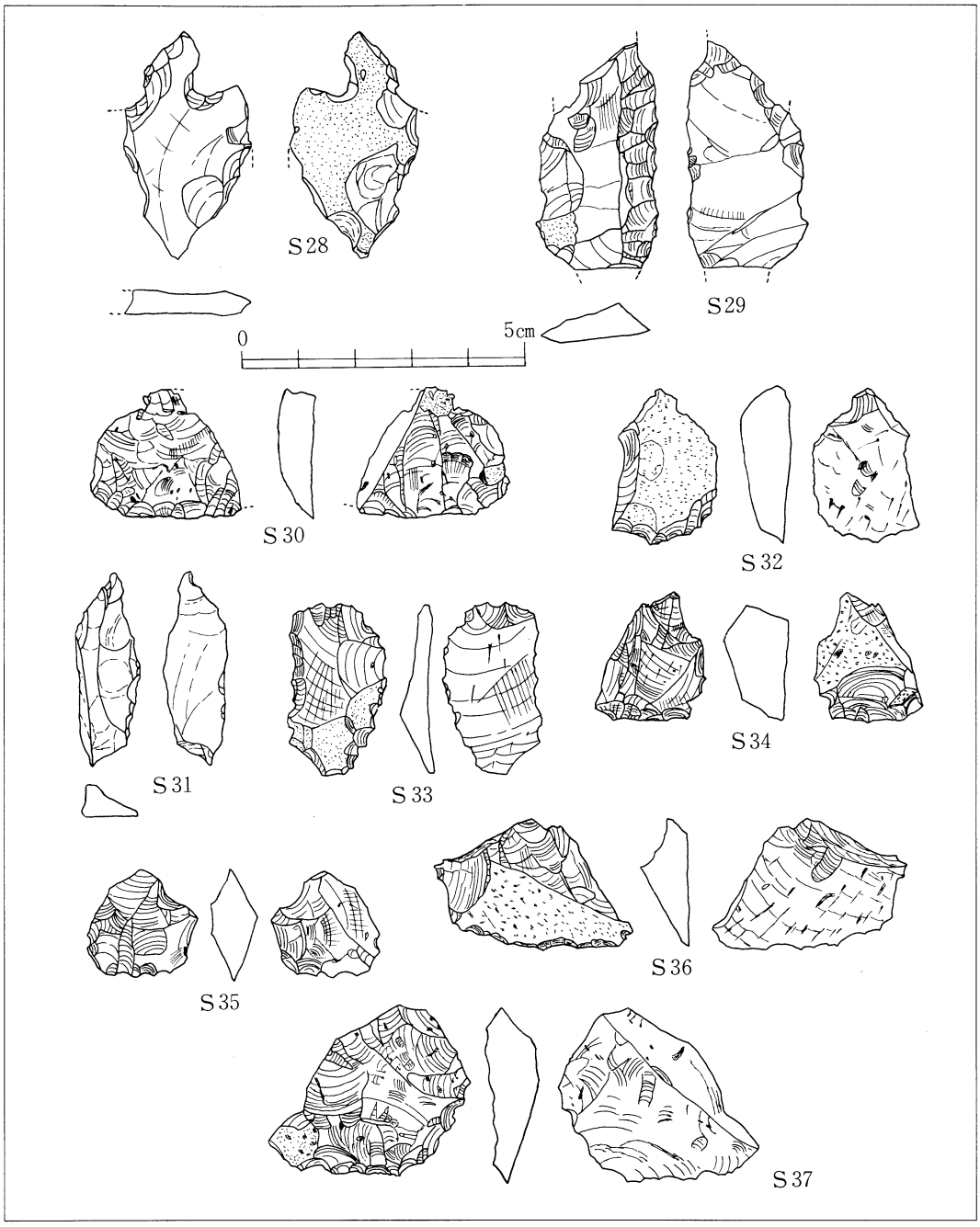
（４）スクレイパー（第51図・第52図**Ｓ32～Ｓ40**）

28点あり，短側辺を刃部としたもの（**32～35**，９点），長側辺を刃部としたもの（**36～39**，17点），周辺を広く刃部としたもの（**40**，２点）とに大きく分けることができる。ほとんど黒曜石製であるが，**39**だけが蛋白石を用いている。

32・33・36は表面部分の剝片を使用しているが，表面部分に細かい剝離を加え，片方は一次剝離面をそのまま残し，バルブ部分のみを打ち欠いている。**36**は刃部の反対側も加工しており，**33**は側辺部も一部加工している。**34**は周辺から粗く打ち欠いている。**37～39**は一次剝離面を多く残して，刃部のみに細かい剝離を加えている。**40**も一方は頂部のバルブ付近のみを少し加工しただけで，片方は周辺を細かく加工している。

（５）打製石斧（第53図**Ｓ41～Ｓ45**）

安山岩製のもの７点があり，分厚いもの（**41～43**，５点）と，扁平なもの（**44・45**，２点）とがある。**41**と**42**は表面部分を利用したもので，片面には広く自然面を残している。特に**42**の片面は自然面を刃部として使用している。側辺部には刃つぶしのための敲打痕がみられる。**41**は完形で長さ約12㎝，幅約5.5㎝の短冊形に近い形をしている。**43**も短冊形の刃部で，刃がつぶれている。側縁は両面から丁寧に打ち欠いている。他の２点も中央付近の破片で両面から丁寧に打ち欠いて

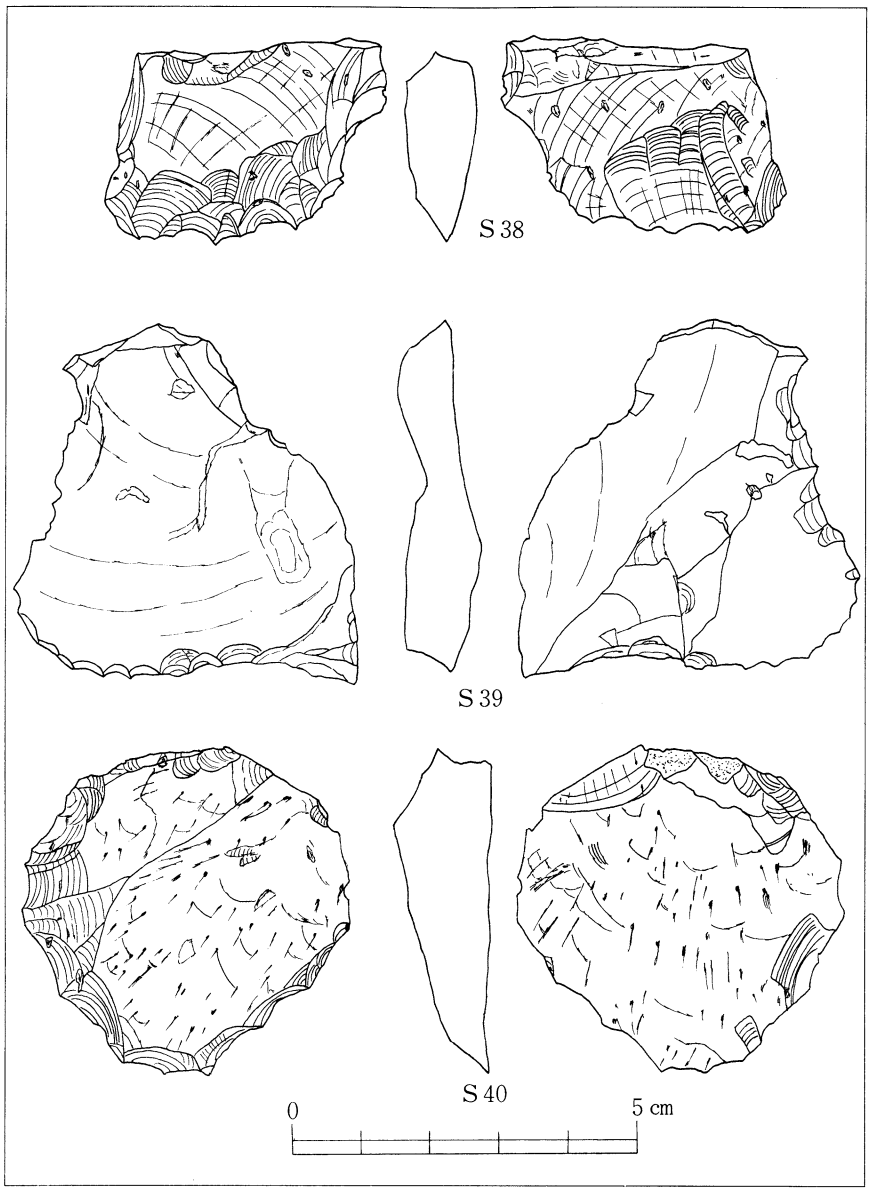


第51図　石　器　(4)

いる。**44・45**は厚さが1㎝前後で，大型スクレイパーの可能性もある。剝片を利用し，刃部は両面から打ち欠いている。

(6)磨製石斧（第53図～第55図，**S46～S64**）

小破片まで含めて31点出土している。大きさ・形態などから4種に分けることができる。

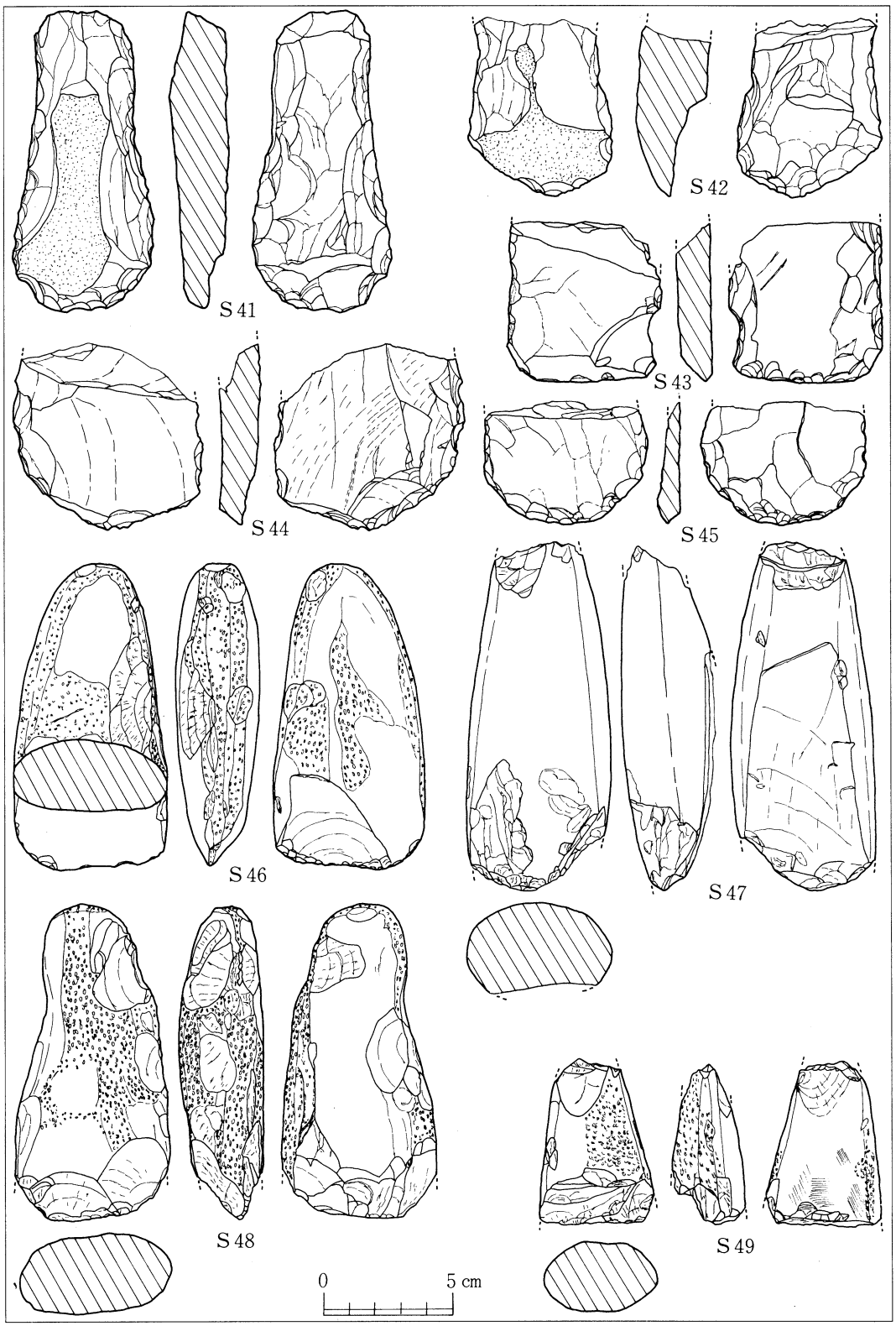


第52図　石　器（5）

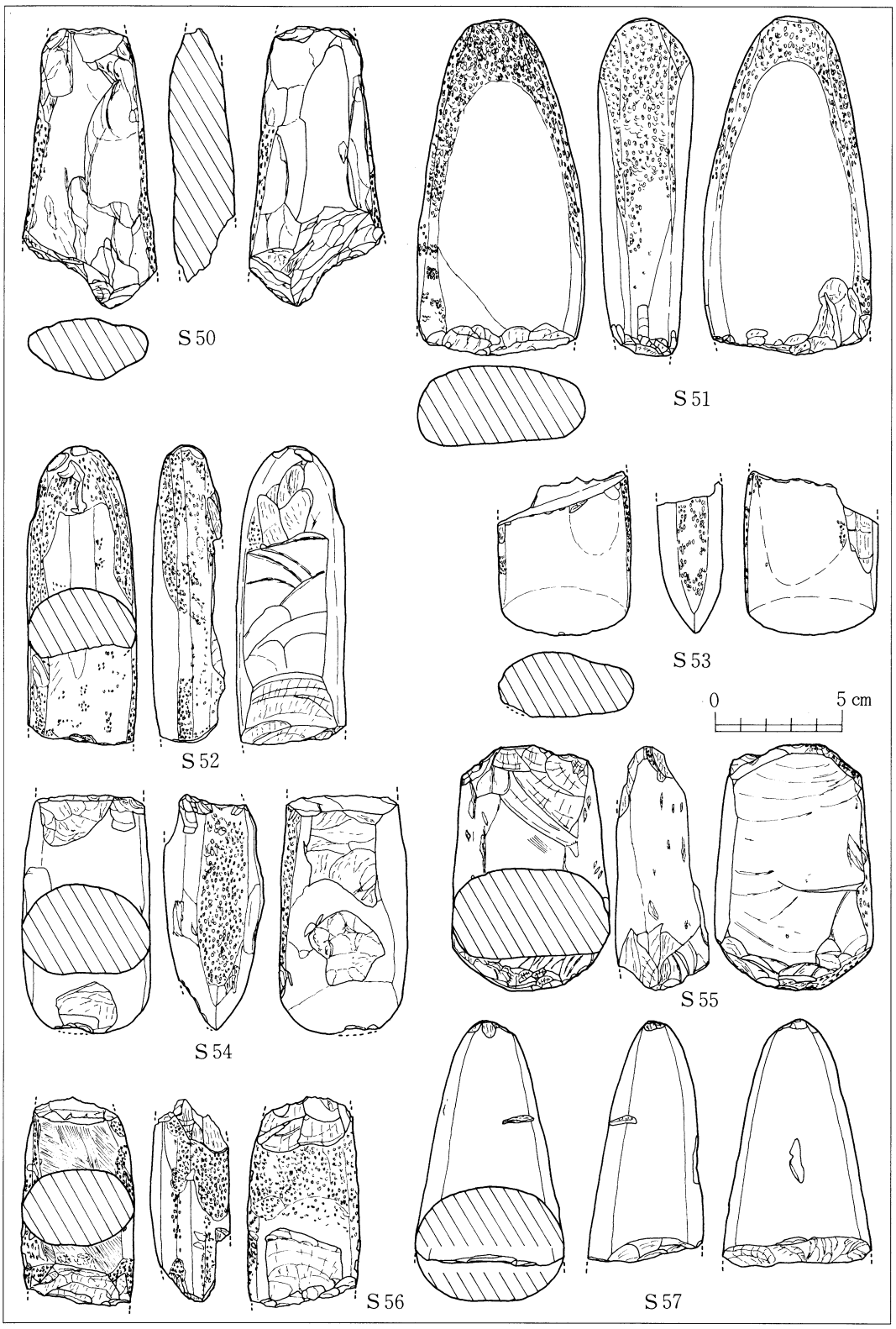
1類（**46～56**）は太形蛤刃石斧で13点ある。頭部は細くなって三角形状になっていくものと，いくらか幅を狭めるものとがある。刃部を残すものは3点しかなく，そのうち2点は欠けており，完全なものは1点しかない（**53**）。多くは刃部が欠損しており，使用によって刃部の欠けることが多かったことを示している。これらの中には2次的に叩き石あるいは磨石（**55・56**）・砥石（**51**）に転用したものもある。

2類（**57**）は5区4層で出土した乳房状石斧で1点ある。上半部のみが残っている。

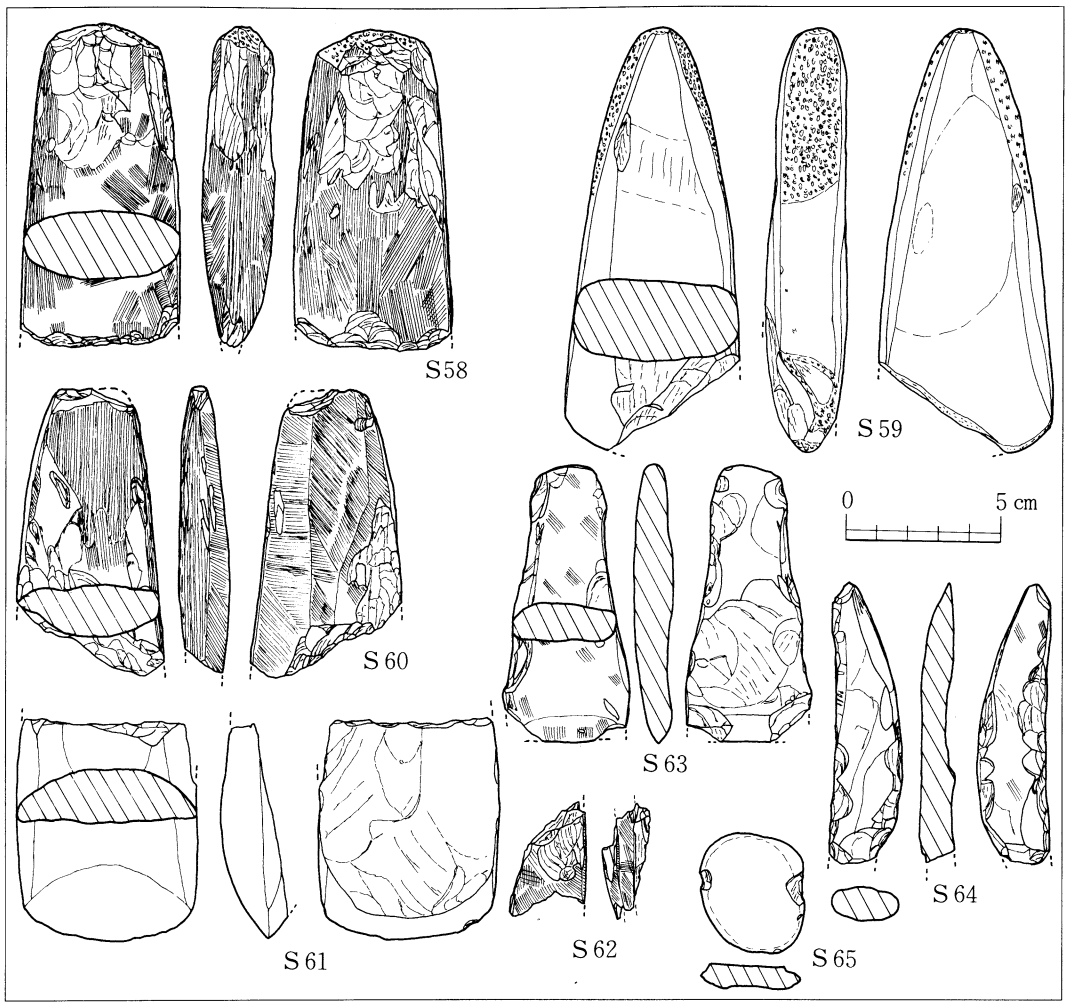
3類（**58～62**）は幅の薄いもので14点あり，うち緑泥片岩製のものが9点ある。刃部の残ったものは3点しかなく，**61**はするどく磨いているが，**58**は刃こぼれが目立ち，**59**は磨石として2次使用している。まっすぐのびているものと，頭部がやや細くなるものがある。断面形は方形のものと，楕円形のものとがあり，緑泥片岩製のもの（**58・60・62**など）は側縁部をよく磨いている。研磨方向は縦・斜め・横とあり，一定していない。



第53図　石　器　（6）



第54図　石　器　(7)



第55図　石　器（8）

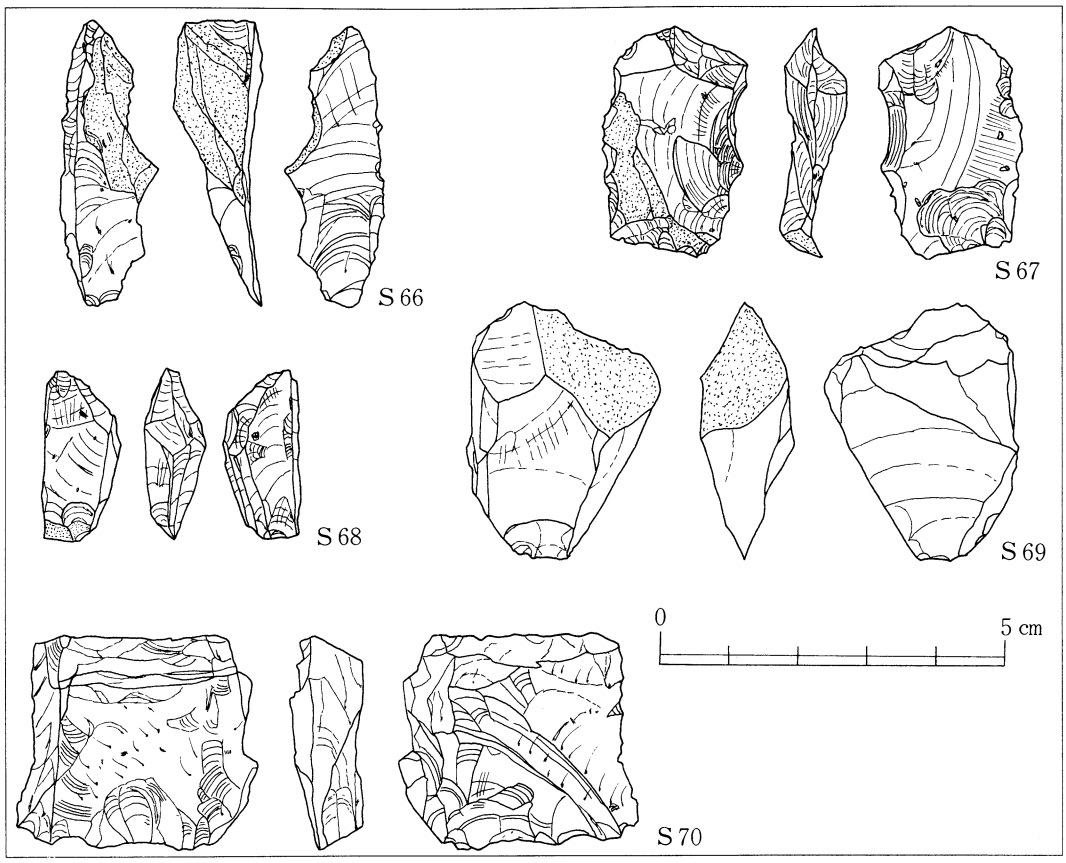
4類（**63・64**）は小型のもので3点あるが，うち1点は破片である。**63**はバチ形を呈するもので，刃部を両方から鋭く磨き，頭部近くが両方ともややくびれている。

（7）石錘（第55図**S65**）

1区4層で出土した砂岩製のものである。縦3.9㎝，横3.5㎝の楕円形礫の長側辺2か所に両面から粗い打ち欠きを加えて仕上げている。

（8）ピエスエスキーユ，禊形石器（第56図**S66～S70**）

12点出ており，縦長のもの（**66～69**，9点）と横長のもの（**70**，3点）とがある。**69**を除き，黒曜石製である。**66**は表皮を残した剝片を素材とし，上部と下部の刃部は90度回転している。**67**は横長の剝片を90度転位し短側辺部を刃部としている。**68**は石核を素材とし，短側辺の上下を刃部としている。**69**は安山岩製で分厚い剝片を利用したものである。残りの5点も幅広い剝片を利用したもの，石核を利用したもの，小型剝片を利用したものなどがある。**70**は気泡の多い黒曜石を利用し，長側辺を刃部としている。あと2点は縦・横が同じような大きさであるが，1点はラウンドスクレーパー状のものである。



第56図　石　器　(9)

(9)磨石（第57図 **S 71～S 75**）

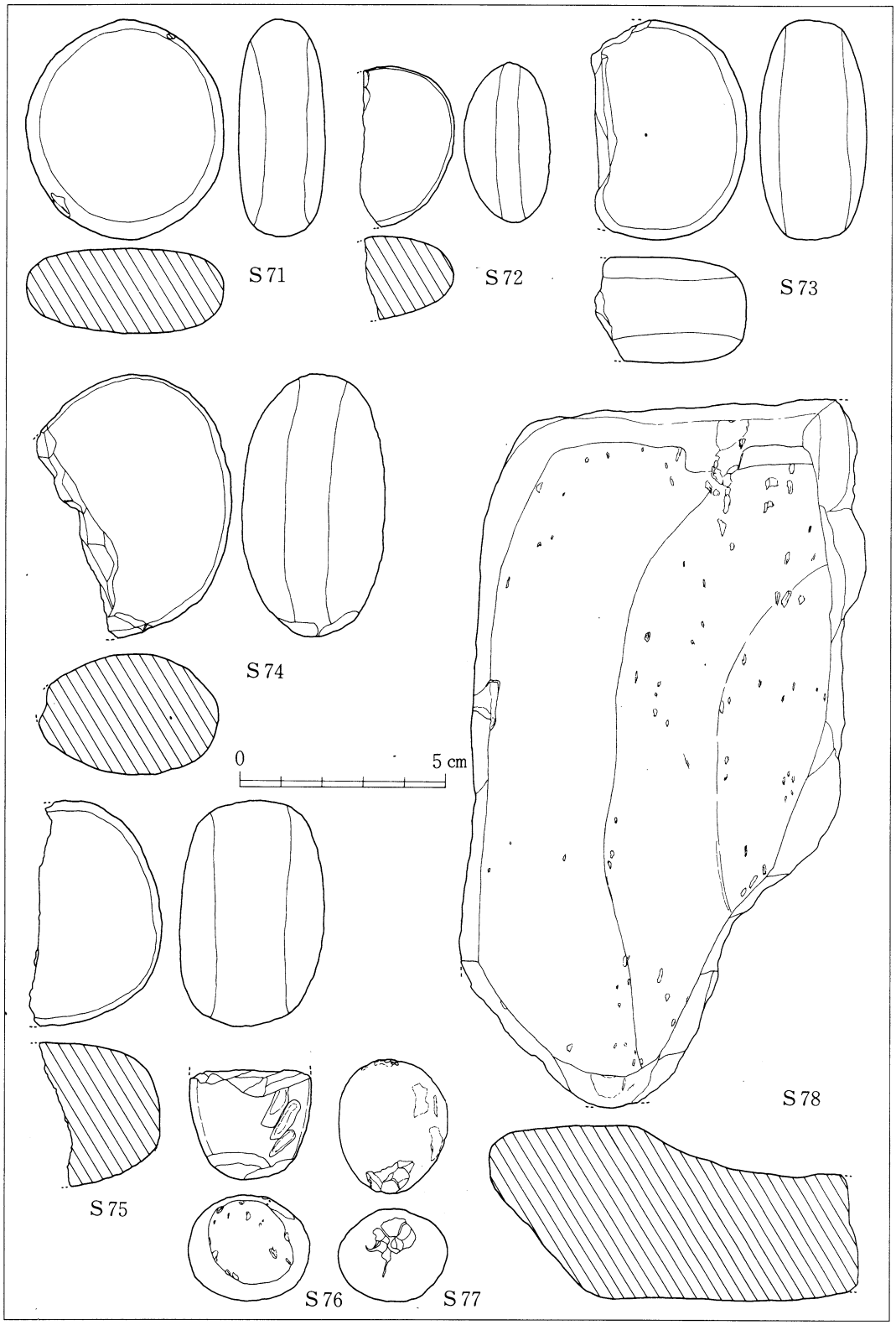
安山岩製のもの6点，砂岩製のもの1点が出ている。いずれも側縁部をよく磨っており，使用痕跡が顕著である。**71**は直径10.5cm，短径9.5cmの楕円形をした完形品で，裏・表とも表面の中央部分が擦り切れている。**72**は小型である。**73**の欠損部は古い面を残していることから，最初から現状の形をしていた可能性もある。側面は深く磨りこんでいる。**74・75**は分厚いもので，**75**の側縁部は敲打痕を残している。

(10)叩き石（第57図 **S 76～S 77**）

安山岩製のものが3点出ている。棒状のものが1点，卵状のものが2点で，**77**を除き破損している。**76**は直径6cmほどの棒状をしたもので，磨石としても使用したらしく，先端付近は磨り滅っている。**77**は完形で，短辺の両端を使用している。あとの1点は側辺に打ち欠き部分のみられる小破片である。

(11)石皿（第57図 **S 78**）

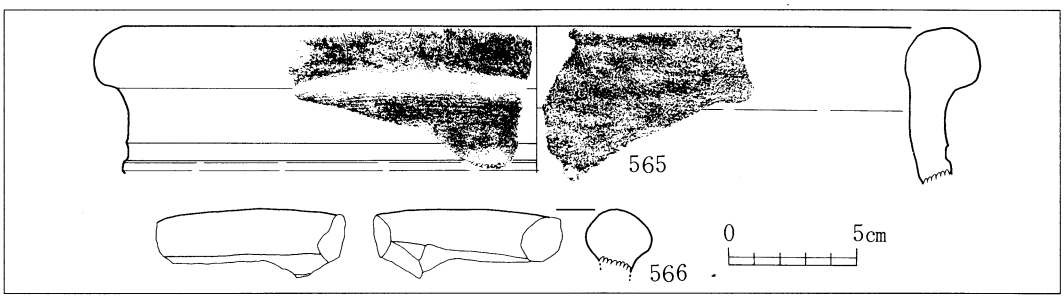
グリッド34の3層から砂岩製のものが1点出ている。現在の大きさは長さ33cm，幅17cmで縦方向に割れている。深さ3cm近くにくぼんでおり，くぼみの長さは約28cmであるが，注ぎ口の有無は不明である。表面はくぼみの部分だけでなく，その周辺も全面を使用しており，中央付近が浅くへこんでいる。



第57図　石　器　(10)

第4節　弥生時代（第58図565・566）

玉縁状の口縁をもつ甕形土器が出ている。玉縁の幅が3㎝のものと，2.5㎝のものがある。口縁部から外へ張り出しながら胴部へ移り，肩部に突帯が巡っている。**565**の口縁直径は35㎝で，同一個体と思われる破片が他に2点ある。内外とも丁寧なヘラ横ナデで仕上げている。淡茶褐色を呈しているが，口縁付近は淡黒褐色を呈し，外面はやや灰色がかっている。焼成度は普通でやや軟質である。胎土には石英と角閃石を多く含み，他に黄石・白石・茶石などの入った細砂質のものである。



第58図　弥生土器

第5節　平安時代

1．古道様遺構

3区でトレンチとほぼ並行した堅土面が検出された。途中でいくらか消滅しているが，延長8.6m，幅40㎝にわたって検出された。この周囲にも堅土面が見られることから，もともとは少し広かったものと思われる。3層上面で検出されていることから古代以降のものと想定できる。性格ははっきりしないが，規模などからして古道かと思われる。

2．出土遺物

1）土師器

（1）坏（第59図**567**～**581**）

口縁部は外へ開きながらまっすぐ伸びるもの（**567**～**570**）と，端部近くでやや内弯して丸みをもつもの（**571**），端部近くでやや外反するもの（**572**）とがある。直径は12.5～15㎝ある。**569**は外面にでこぼこがみられる。**572**は浅い坏で底部近くで強くくびれている。端部は丸くおさまっているが，**570**はやや角ばっている。すべてヘラによる横ナデ調整であるが，**568**・**569**の内面は丁寧なナデ仕上げである。

底部は丸みをもって底へ移るもの（**573**～**577**）と，端部近くで外へ開いて底にいたる充実高台風のもの（**578**～**581**）とがある。ヘラ切離しで直径は約6㎝であるが，**581**だけは5.5㎝と小さい。**576**は底に繊維状の圧痕がある。内外面ともヘラ様のものによる横ナデの調整である。ろくろびきのため底部内面にくぼんだ所があるものもある。

ほとんど乳褐色・淡茶褐色を呈しているが，**572**は表面が灰褐色，内面が灰白色を呈しており，

器形とも他のものと違っている。胎土にはよく水ひした細かい土を用いており，そのため表面が磨滅したものも多い。焼成度もあまり良くなく軟質に焼けている。

（2）埦（第59図**582**～**603**）

口縁部は外へ開きながらまっすぐ伸びており，内外ともヘラで横方向にナデている。**583**は外のでこぼこが目立つ。直径は約13㎝である。底部は開きながらまっすぐ伸びるもの（**584**），高台付きのもの（**598**～**603**），充実高台のもの（**585**～**596**），その中間形態のものとがある。**584**はヘラ切離しであるが，いびつででこぼこが激しい。充実高台のものもヘラ切離しであるが，底はややふくらむものとあげ底になるものとがある。**585**は胴部と底部との境がはっきりしており段となる。**587**は底はカヤのような圧痕がみられ，くぼんでいる。底近くで外へ張り出しているが，この部分が強く屈曲するものと丸くくぼむものがある。**597**のようにこのくぼみのところに指頭痕の残るものがある。**596**は亀裂が入って，底はやや楕円形を呈しており，底の土の剝離部分がみえる。外のでこぼこも目立つ。高台は端部が丸くなるもの，矩形状となるもの，外へ広がるものがあり，いずれも貼付高台である。貼付部は丁寧にナデているが，ここにひびの入ったもの，あるいはこの部分からはがれたものなどがある。貼付部と底部との間には段が出来る。直径７～９㎝ある。外面はヘラの横ナデで，強くくぼむものもある。内面もヘラナデであるが，横ナデのものと縦ナデのものとがある。**598**は畳付部にくぼみがあり，底の内部には段がある。**600**の内面はハケナデのあとが見える。

乳褐色・淡茶褐色を呈したものが多いが，**602**のように外面が赤みがかった淡茶褐色，内面がやや黒っぽい茶褐色を呈したものもある。焼成度は良く，割合に堅く焼けているが，軟質で磨滅しているものもある。胎土は長石・石英・赤色石・白色石・茶色石などの割合に細かい土を用いているものが多いが，**591**・**594**のように５㎜大の小石を含む砂質土を用いたものもある。

（3）鉢（第59図**604**・**605**）

浅鉢の口縁部と底部がある。

604は直径が20㎝ある口縁部である。口縁部が最も広く緩やかに曲がりながら底部へ向かっている。口縁端部周辺はヘラによって横方向の丁寧な研磨が施されている。その下は横方向にナデられているが，特に外面は丁寧にナデられている。灰色がかった乳白色を呈しているが，内面はやや赤みを帯びている。赤色石などの細かい土を含む精製土を用いているが，時に４㎜大ほどの大きな石を含んでいる。硬質に焼けている。

605は直径が10㎝あるややあげ底気味の平底で，部厚い作りをしており，底から緩やかに広がりながら立ち上がっている。内外とも横方向にナデられ，底もヘラで丁寧にナデている。白っぽい淡茶褐色を呈し，胎土は砂質を帯び，白色石，石英を多く含んでいる。軟質である。

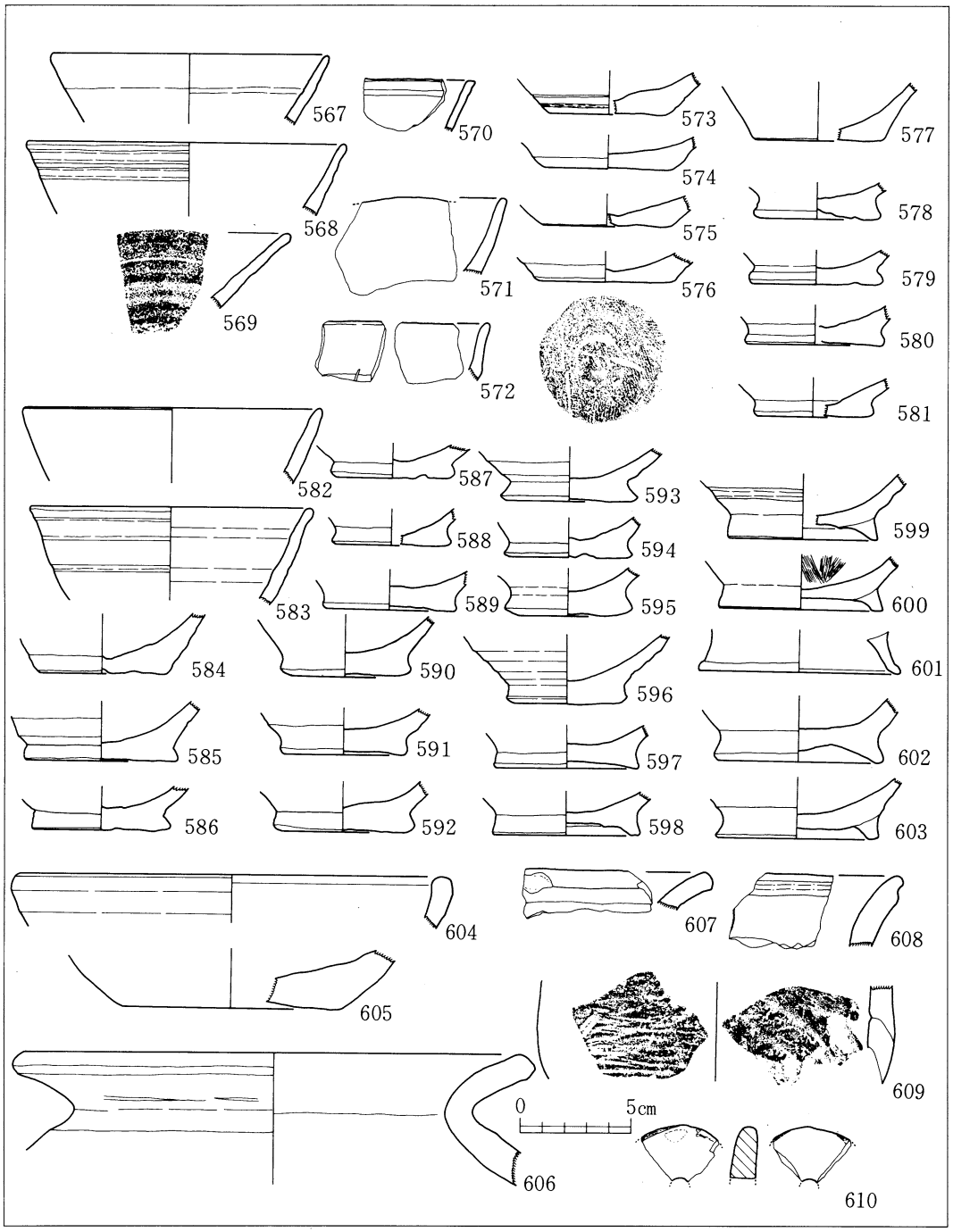
（4）甕（第59図**606**～**609**）

口縁部は緩やかに外反するものと強く外へ折れるものがある。**608**は緩やかに外へ外反するもので，端部は丸くおさまるが外面に１条の凹線がある。内外ともヘラで横方向にナデている。**606**と**607**は頸部から外へ強く折れて口縁へいくもので，**606**は直径が約23㎝ある。内外ともヘラで横方向にナデて，**606**の内面の頸下部には指で押したような痕跡が残っており，外面のくびれ

部分にはしぼり痕がある。

これらはいずれも割合に粗い土を用い，２㎜前後の砂岩・石英などが多く含まれている。赤みがかった淡茶褐色を呈し，焼成度はやや不良のものと良好で堅いものとがある。

609は胴部で，外面にはタタキ様の条痕がある。内面には輪積みの痕跡がはっきり残っており，



第59図　土師器

その上を横方向にヘラでナデている。胎土は口縁部とほとんど同じで，表面のみ淡茶褐色となる乳褐色を呈し，焼成度はやや不良である。

2）土製品

（1）紡錘車（第59図**610**）

直径6㎝，孔径0.5㎝，厚さ1.2㎝のもので，上・下面とも丁寧にナデている。淡茶褐色を呈し，焼成度は普通である。赤色石など細かい土を用いている。孔は焼成前にうがっている。

3）内面研磨土師器

内面を丁寧にみがいた内面研磨土師器には内面が黒いもの（内黒土師器），内面が赤色塗彩されたもの（内朱土師器），内面が灰色のもの（内灰土師器）とがある。

(1)内黒土師器（第60図**611**～**630**）

内黒土師器の器種は埦のみである。口縁部はまっすぐ伸びるもの（**611**・**613**～**615**）と端部近くで外反するもの（**612**・**616**～**619**）とがあるが，丸みをもった器形を呈している。**611**は口縁直径13.5㎝，底部直径6.5㎝，高さ5.5㎝の完形品である。外面はでこぼこが目立つが，内面は丁寧に磨いて光沢のある黒色を呈している。磨きは縦方向であるが，口縁部付近は横方向である。口唇部はややふくらんで丸みをもっている。外面は横方向のヘラナデで，淡茶褐色を呈しているが，黒斑もみられる。高台は矩形を呈す。焼成は良い。**612**は口縁直径が15.5㎝と大きく，口縁端部近くで強くへこんでいる。外面は明るい淡茶褐色で，口縁上部から内面は光沢ある黒色を呈している。焼成は普通である。まっすぐ伸びるものは端部が丸みを帯びて終わり，厚さが5㎜を越すものと，足りないものとに分けられる。**613**は口縁下部に浅い凹線が巡っている。外反するものの中には**617**のように強く反って端部が玉縁状を呈するものもある。底部は高台付きのもの（**620**～**629**）と充実高台のもの（**630**）とがある。高台には畳付き部が矩形を呈し低いものと，外へ細くなって丸く終わるものとがある。直径は6.5～8㎝ある。すべて貼付高台で，貼付部は丁寧にナデて貼付部分が明瞭でないものが多いが，**625**は境のナデ調整が雑で，高台部分がはっきりしている。**620**は底部に×印の沈刻線がみられる。**627**の内底にはもみ痕がみられる。充実高台は端部が強く外に張り出し，わずかに上げ底気味でヘラ切り離し状となっている。直径が5.5㎝ある。

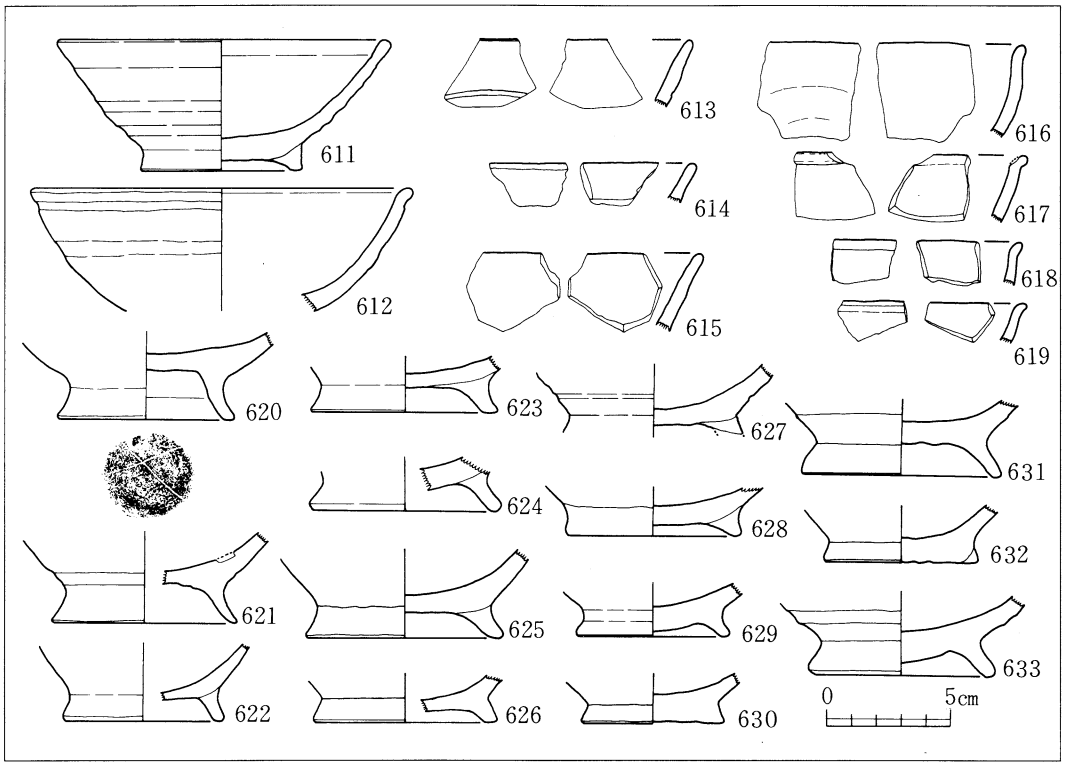
外面はヘラで横方向に丁寧にナデており，内面は口縁部が横方向，底部付近が縦方向に丁寧なヘラ研磨が見られる。内面は光沢を呈するものと鈍いものとがある。乳褐色を呈しているものが多いが，淡茶褐色を呈するものもある。胎土は細かく水ひした土を使っているが，5㎜大ほどの礫を含んでいるもの（赤石などの入っているもの）もある。焼成度は時に堅いものもあるが概して軟質である。

(2)内朱土師器（第60図**631**）

631は高台付きの埦で，直径が8㎝ある。底部はでこぼこしているが，貼付部は丁寧にナデて，痕跡がはっきりしない。高台は丸みを帯びて，胴部下半に段がある。外面は乳褐色を呈し，焼成はやや不良で磨滅もみられる。長石・白色石などの多い細かい砂質土を用いている。

(3)内灰土師器（第60図**632**・**633**）

632は貼付けによって充実高台風にした底部をもつ埦で，底はヘラ切りでややでこぼこしてい



第60図　内面研磨土師器

る。外面は横ナデ，内面は丁寧なヘラミガキ仕上げで，内外とも明茶褐色を呈しているが，内面はやや灰色がかっている。赤土を多く含む砂質土で，焼成は良好である。

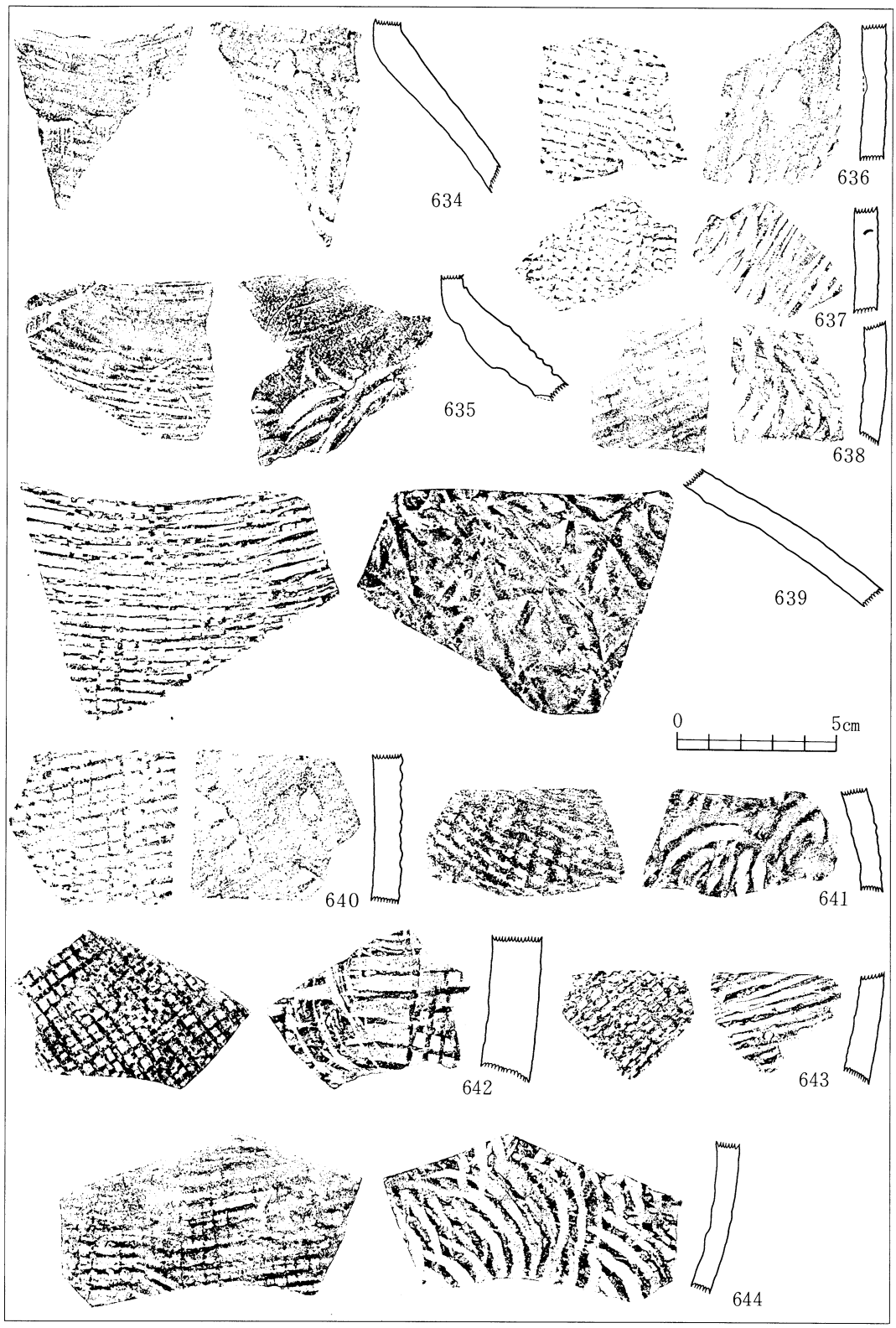
633は高い高台の付く埦で，外面は段となっている。底の中央は部厚くなっている。外面は横ナデ，内面は丁寧な横方向ヘラミガキ仕上げである。外面はピンクがかった明茶褐色，内面は灰色ないしは赤みがかった茶褐色を呈し，剝脱が目立つ。白色石の多い細かい土を用い，焼成はやや不良である。

4）須恵器（第61～63図**634**～**653**）

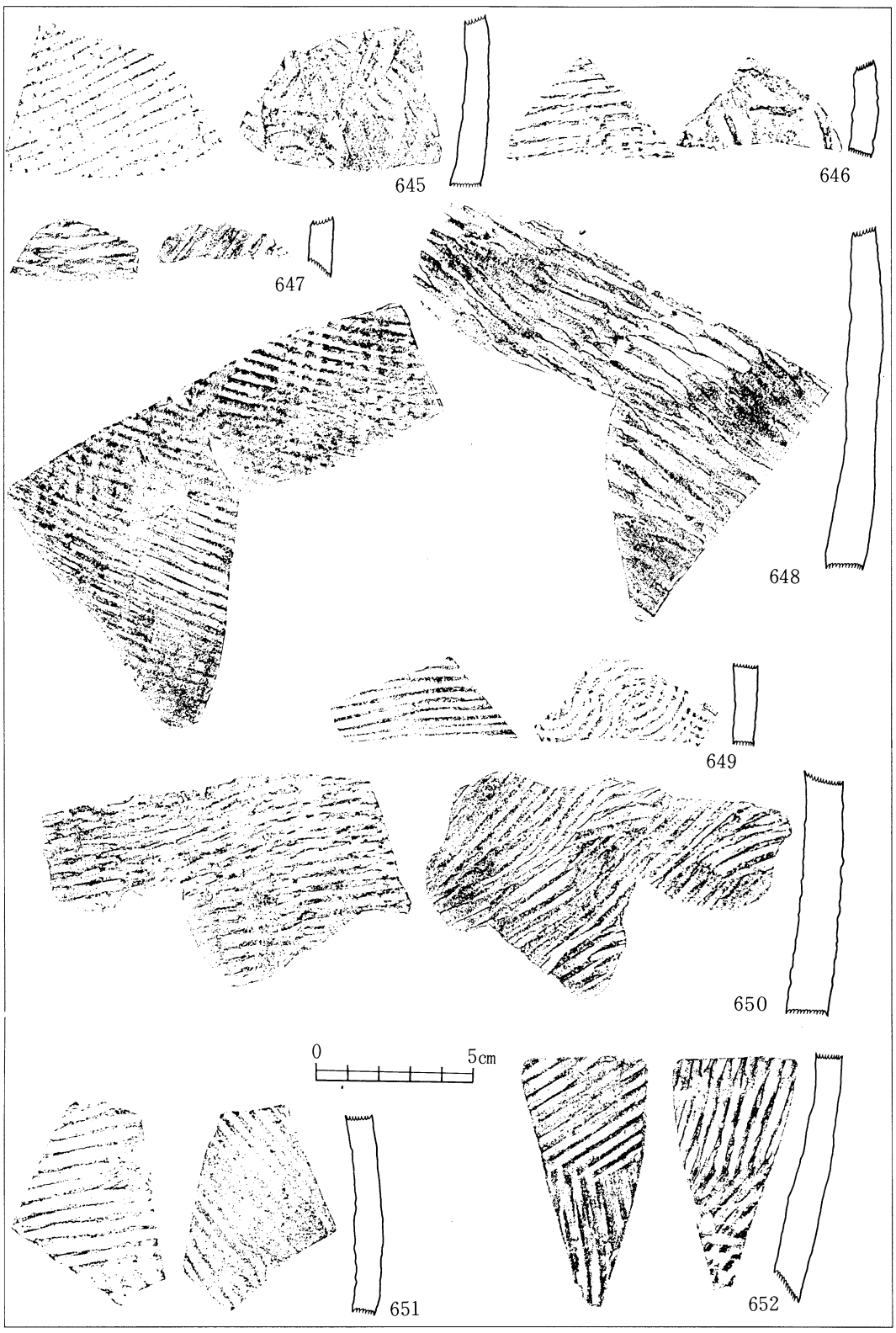
器種は甕（**634**～**652**）と壺（**653**）がある。

634・**635**が肩部で，他はいずれも胴部である。肩部の立上り部分はいずれもタタキのあとをヘラの横ナデで消している。外面には格子（正格子・長方形格子・細かい格子などがある）タタキと条痕タタキとがある。内側も条痕タタキと同心円タタキとがあり，一部ではタタキをなで消したものもある。**636**は内面がタタキを磨り消しているもので，鉄分が多く付着している。**639**は胴の上半部で，青っぽい灰色を呈している。内面のタタキは車輪文タタキであるが，一般的に見られる車輪文タタキと異なり，放射状の陽起部分だけで，周囲の円がない。

641も肩近くの破片である。**642**の内面は条痕タタキのあと，正格子タタキを加えており，一部はヘラ様のものでナデ消している。**644**のタタキは内面が深い同心円文タタキであるのに対して，外面は浅い条痕タタキである。**650**は外面が黒灰色，内面が赤っぽい茶褐色を呈しており，外面は横長の格子タタキである。胎土に軽石のような軟質の大きい石粒を多く含んでいるのが特徴的



第61図　須恵器　（1）



第62図　須恵器　（2）

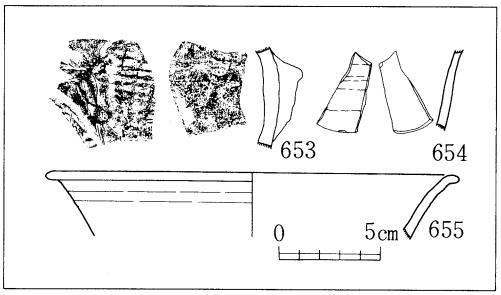
である。**652**の外面タタキは菱形様に施している。**648**の内面は半がわきの時に叩いたためか，端部がやや崩れている。

焼成は概して良くて堅いが，時に軟質のものがある。堅いものは灰褐色を呈しているが，軟質のものは黄っぽい灰褐色などを呈している。胎土に石英・白色石・雲母などを多く含んでいるが，割合に細かい土を使っている。

653は壺の肩部で，こぶ状の貼付突起が付着している。外面は横長の格子タタキ，内面はナデ整形である。赤みがかった茶褐色を呈しているが，外面には黒・緑・黄色などの自然釉がかかっている。

5）青磁（第63図**654・655**）

口縁直径が20.5cmの同一個体と思われる碗の破片が2点出土している。外へ開きながら端部が外反している。黄みがかった暗緑色を呈し，部分的に紬だまり・紬切れが見られる。内外とも横方向のナデ仕上げである。越窯青磁と思われる。

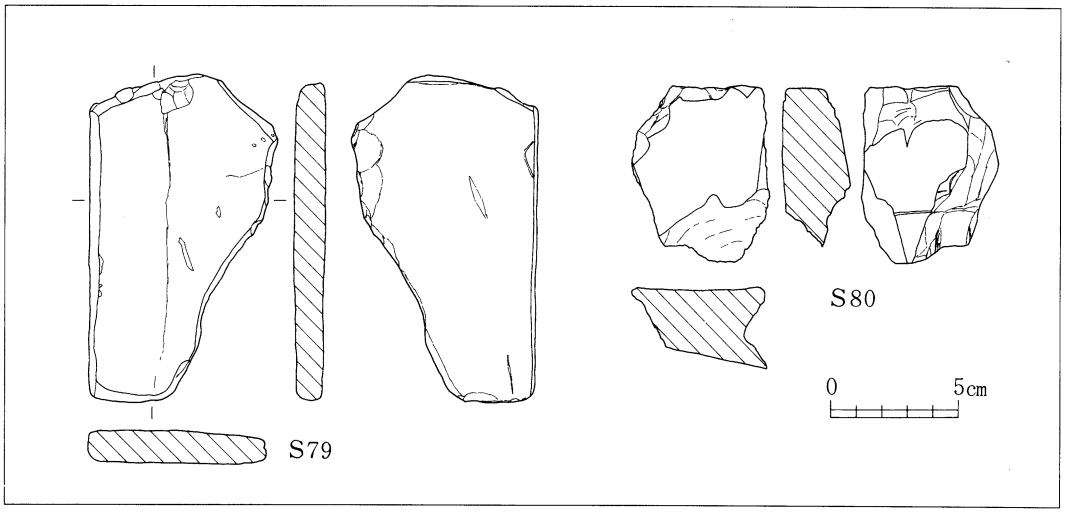


第63図　須恵器（3）・青磁

6）石製品（第64図）

砥石が2点出土している。

S79は厚さが1.2cmしかない砂岩製の扁平な砥石で，残存部で3面を使用している。**S80**は花崗岩製の砥石で，残存部で3面を使用している。2面は中央がくぼんでおり，平らになる一面には鋭く食い込んだ1条の細い沈線がみられる。



第64図　石製品

第5章　まとめにかえて

九日田遺跡では狭い面積であったが，旧石器時代から平安時代にかけての多量の遺物が出土した。ここでは時代ごとにその既要を記し，まとめにかえたい。

1．旧石器時代

隣接地に麦生田遺跡という周知の旧石器時代遺跡があるが，その広がりがここまで延びているようである。当遺跡の下層には旧石器時代の包含層があるものと思われるが，当時そこまでの調査ができず，表面採集あるいは縄文土器との混入による出土である。これらは三稜ポイント・台形石器からなるナイフ形石器文化と，細石刃・細石刃核からなる細石器文化の２文化層に分かれる。細石刃核はすべて野岳休場タイプのものであり，麦生田遺跡のものとも同一型式である。今後，周辺地域の調査があれば，これら２文化層のものが層位的に出土する可能性がある。

2．縄文時代

最近，発掘調査の増加によって南九州における縄文時代遺跡の豊富さが明確となってきた。資料も増加し，新しい知見も増えてきつつある。しかし，その中にあって後期の，特にその前半についてはまだ未知の部分が少なくない。その解明のためにここで出土した多くの資料は貴重なものだと思われる。層位的に出土していないため，型式的に分類せざるを得ず，すべての資料をうまく整理することは出来なかったが，気付いた点を書きとめ，今後の研究の基礎資料にしたいと思う。

1)土　器

縄文土器は多様であるため15類に分けた。この他にもＸⅥ類とした型式不明のもの，晩期のものがある。

Ⅰ類は胎土に多くの滑石を含む並木式土器である。太くて浅い凹線の間に刺突文がある。

Ⅱ類は太い凹線によって文様構成される阿高式土器である。この類にこの遺跡では多くの種類に含まれるねじり紐の貼付文がみられるが，この類が貼付文のはしりであろう。

Ⅲ類は細くて浅い凹線文様のみられる土器で，協和式あるいは岩崎下層式土器に近いものであるが，調整痕に貝殻条痕がみられない点が本来の岩崎下層式土器とは異なる。

Ⅳ類は縦横・Ｓ字状・半月形・三角形・ノの字文等の文様が刻まれるもので，生がわきの時に削るものもある。南福寺式土器である。

Ⅴ類は口縁部近くに幅広い突帯をもうけ，そこに縦方向・斜方向・三日月形・刺突文・押圧文などのヘラによる凹線・押圧文が付されるもので，出水式土器である。

Ⅵ類は口縁部近くの文様帯がやや肥厚し，ここに押圧文が付されるもので，口縁端に粘土ひもなどを使って突起部を作るものがある。出水式土器である。

Ⅶ類は細い凹線が施されるもので岩崎上層式土器である。口唇部に刻みのあるものとないものとがある。

Ⅷ類は口縁端あるいは口縁下部に貼付突帯をおき，その間に凹線文・押圧文を施すものであ

る。出水式土器である。

Ⅸ類は口縁部にヘラ・二枚貝・竹などを用いて押圧を加え，その下に凹線文のあるもので，平縁のものや，粘土ひもを貼付けるものなどがある。

Ⅹ類は沈線文様のあるもので，口縁部は刻みのあるものとないものとがある。

ⅩⅠ類は磨消縄文をもつ土器で，在地のものにつけたものと，鐘崎式土器（266～273）・北久根山式土器・西平式土器（274・275）などがある。

ⅩⅡ類は疑似縄文の土器で，指宿式土器である。

ⅩⅢ類はヘラ・二枚貝などによる鋸歯状の文様をもつ土器である。大平式土器にみられる特徴である。

ⅩⅣ類は口縁部が肥厚し，ここに沈線等の文様が描かれるもので，松山式土器・市来式土器などが該当する。

ⅩⅤ類は無文の土器で，口唇部に刻みのあるもの，ないもの，突起部のあるもの，ないものなど数型式の土器が混ざっている。

底部には平底のものと，上げ底あるいは脚台付きのものがある。平底にはアンペラ状の敷物をしたものも多い。

台付浅鉢・壺・浅鉢・把手のついた深鉢なども数点含まれている。

Ⅰ類からⅩⅥ類は中期中葉から後期中葉に及ぶ長期間の土器型式が含まれているが，主体となるのは中期末から後期前半の阿高式土器・岩崎下層式土器・出水式土器などがある。今回，これらを層位的，分布域に分けることは不可能であったが，今後，型式的に再分類し整理し直せば，この時期の土器の編年も可能かもしれない。貼付文や磨消縄文などを付したものが多く含まれていることから，北からの影響も強い。当遺跡が県北部に所在するという地域性も見出せるかもしれない。

晩期の土器は黒川式土器（深鉢・浅鉢・まり・鉢）と，突帯文土器とがある。

この時期に多くみられる円盤形土製品が，ここでも多く出土している。これらがどういう意味をもっているのか，時期の設定も含め今後解決していかねばならない問題である。

石器は人吉市桑の木津留産あるいは大口市日東産の黒曜石を用いたものが多く，石鏃・石匙・石錐・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・ピエスエスキーユ・磨石・叩石・石皿などの定形石器の他にも剝片・石核など多量にある。

石鏃は大きさ，あるいはえぐりの有無などによって5種に分けられた。調整の丁寧なもの，粗いものなど色々ある。時期による違いなのか，同時期の形態差なのか等は層序的な調査ができなかったためはっきりしなかった。スクレイパーは縦型・横型・周囲型など3種あり，その数も多い。また剝片の中には使用痕のあるものもあり，スクレイパーと同じような使用法をしたと思われるものがある。これらの出土は，当時採集・加工用などの使用法が多かったことを示している。県内のこの時期には多くみられる磨石がこの遺跡でも多く出土しており，石皿の出土とあわせ，木の実採取の盛んだったことが伺える。打製石斧も7点出土しており，竪穴住居の掘削用なども考えられるが，ヤマイモなど根菜類の採集も盛んだったことが伺え，中期後半から後期前半に遺

跡の数，規模とも増加する山間部遺跡の生産形態を示す資料として注目される。磨製石斧の石材に蛇絞岩が多く含まれているのは，伊佐盆地を中心に多くみられる現象と一致し興味深い。また，形態・規模の多様さも伐採，削平，穿孔など各種の用途を示すものとして重要である。この他，今回検討できなかったが，剝片・石核の調査も石器製作法の検討のため今後は必要であろう。それだけの量がここでは出土している。

3．弥生時代

玉縁状の口縁をした甕形土器がある。こうした口縁部をもつものは南九州では類例が少ないが，あえて形態の類似性を求めるなら，逆L字形の口縁部と三角突帯の存在から山ノ口式土器に近い時期のものだと思われる。類似の土器は菱刈町前畑遺跡や出水市老神遺跡で出土している。

4．古　代

土師器・内黒土師器・内朱土師器・須恵器・青磁・紡錘車・砥石など平安時代のものと思われる遺物が採集されている。

土師器は坏・埦・鉢・甕が出ているが，坏はすべてヘラ切り離しの底部である。口縁部は外反するものはなく，南九州特有のまっすぐのびる形態である。埦も同様で，充実高台のものと高台付きのものとがあるが，いずれも低いという特徴がある。甕は頸部が強くくびれている。南九州ではこの時期の土器について細分化がされていないため時期設定が困難であるが，形態からしても短期間のものと思われる。

須恵器は坏・埦がないため年代設定が難しいが，甕の内面タタキに放射状のもの，正格子のものがあり特徴的である。また鉄分を多く含んだものもあり，壺の形態などから考えても9世紀頃の肥後国の影響を受けたものかと思われる。

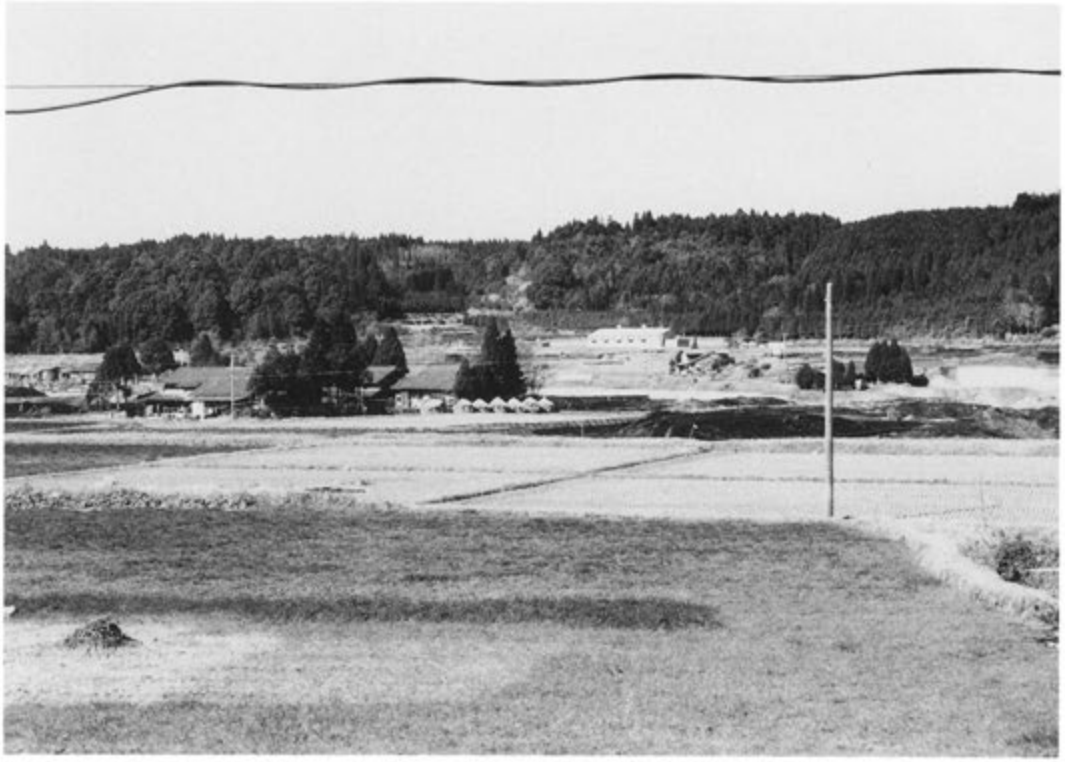
内面研磨の土師器が多いのもこの遺跡の特徴としてあげられ，今後周辺地域のあり方と比較する必要がある。特に従来，類例の少ない内朱・内灰土師器の出土は当遺跡の性格を考えるうえに重要な意味をもつだろう。

また，越窯青磁碗の出土は注目される。古墳時代に高塚古墳3基や多くの地下式横穴群が存在する北方古墳群を眼下に望む当地は伝統的にこの周辺の中心地として繁栄したことを示している。一方で，川内川を挟んで対面にある山崎B遺跡，木場C遺跡でも越窯青磁碗が出土しており，墨書土器の出土などもあわせ役所の存在の可能性も予想されている。川内川が蛇行する地に造られた穀倉地を前面にした台地上にいかなる性格の集落が営まれたのか，今後は，これらの遺跡を包括的にとらえて解釈することも必要であろう。

注

(1)土器の分類については河口貞徳氏，弥栄久志氏の御指導・教示を得た。

図版1

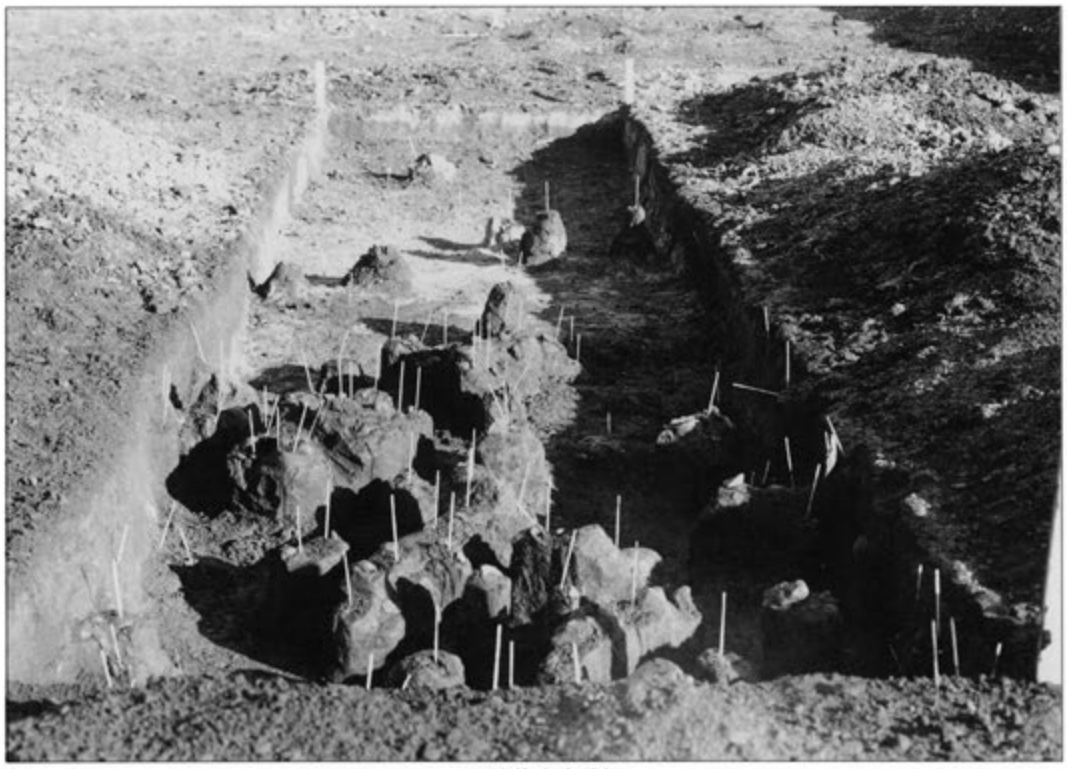


1．近景（西から）

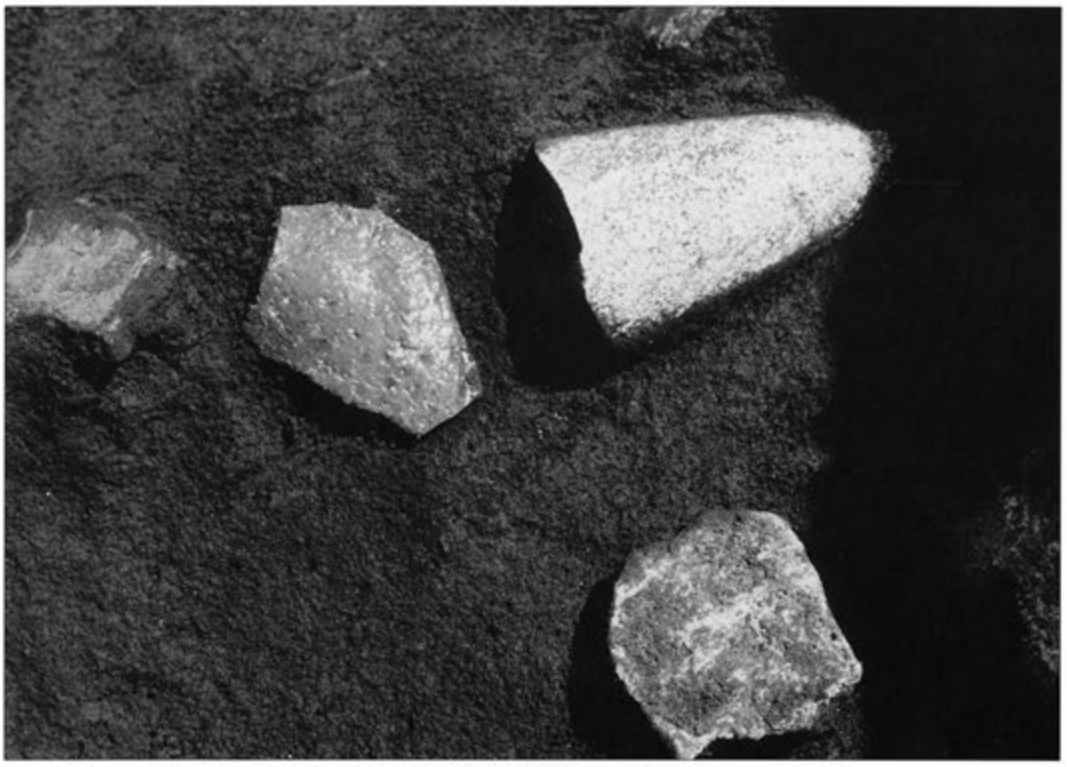
2．近景（西から）

図版2

1．3区（西から）



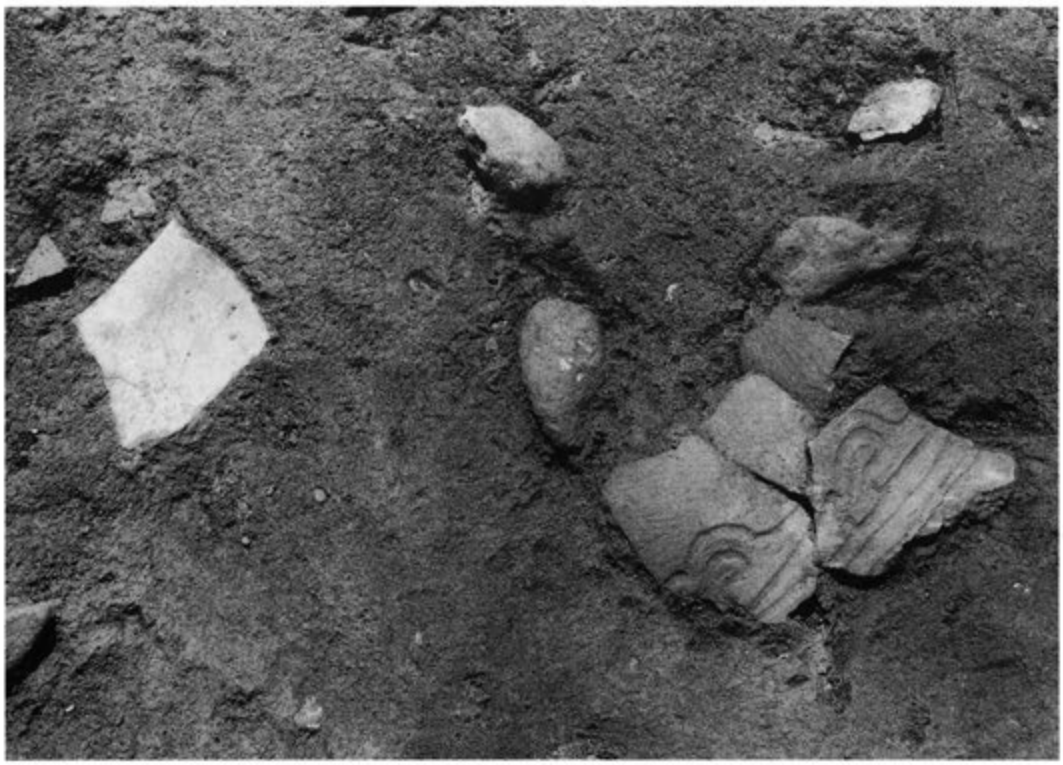
2．遺物出土状況



1．遺物出土状況（5区）

2．遺物出土状況（6区）

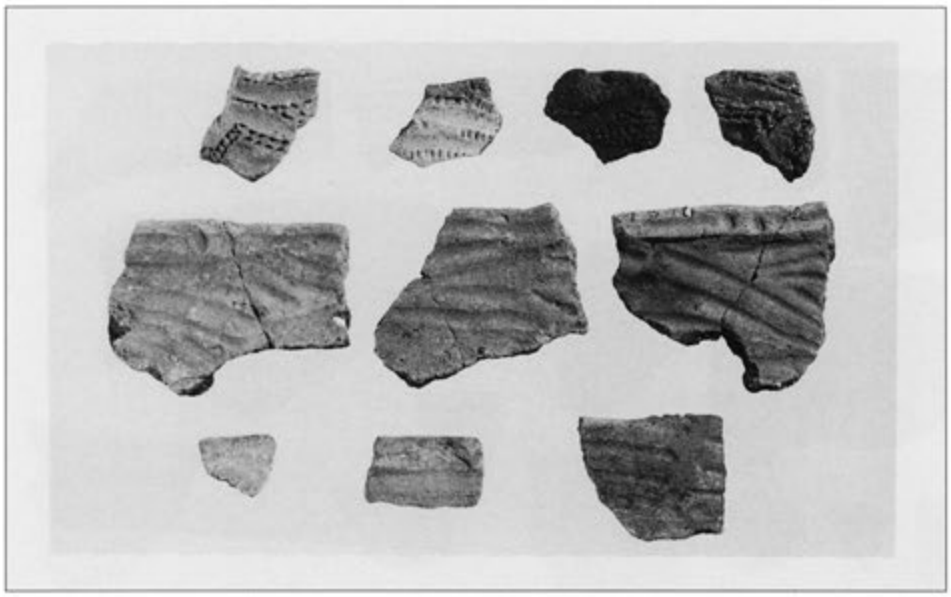
図版4



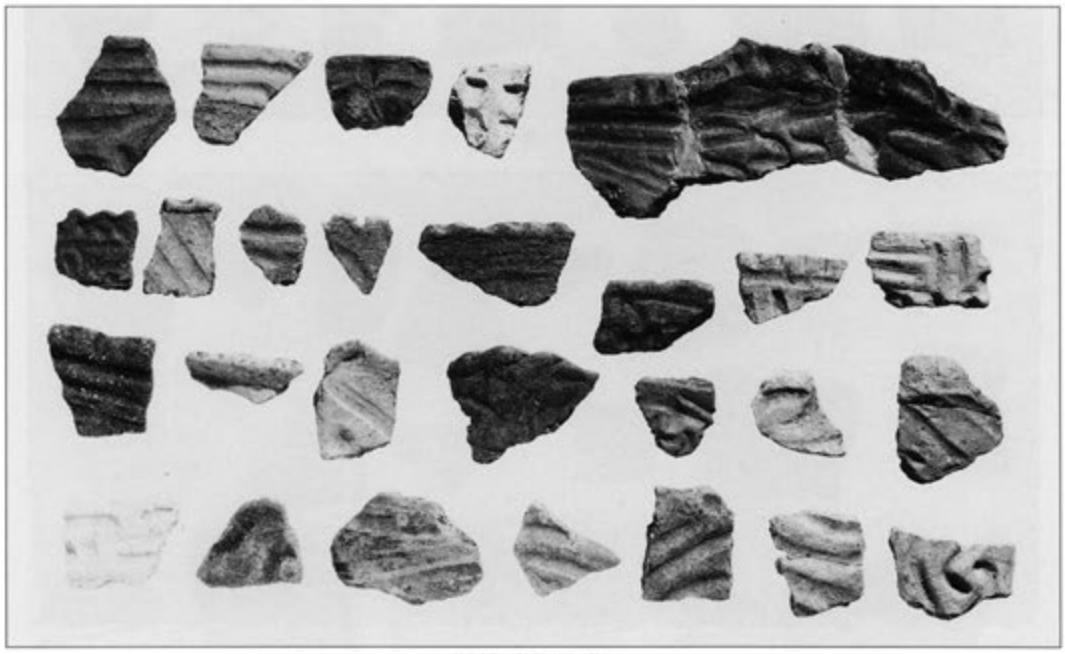
1．遺物出土状況（4区）

2．遺物出土状況（2区）

図版5　縄文土器



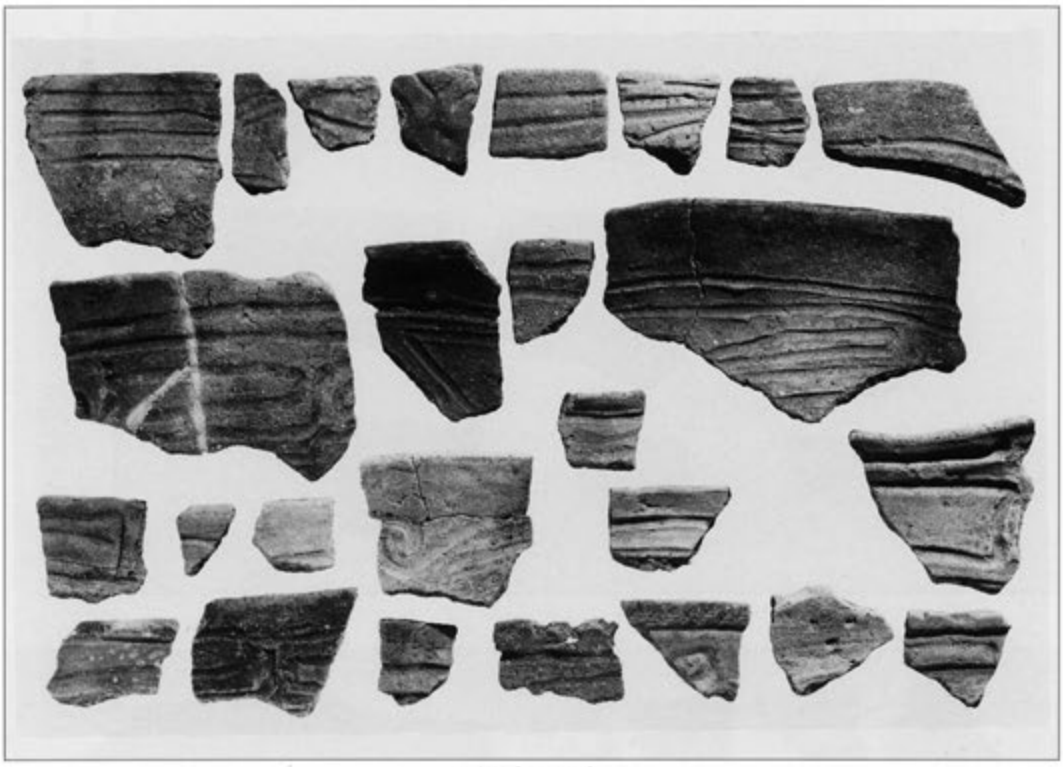
Ⅰ・Ⅱ類（1～8）



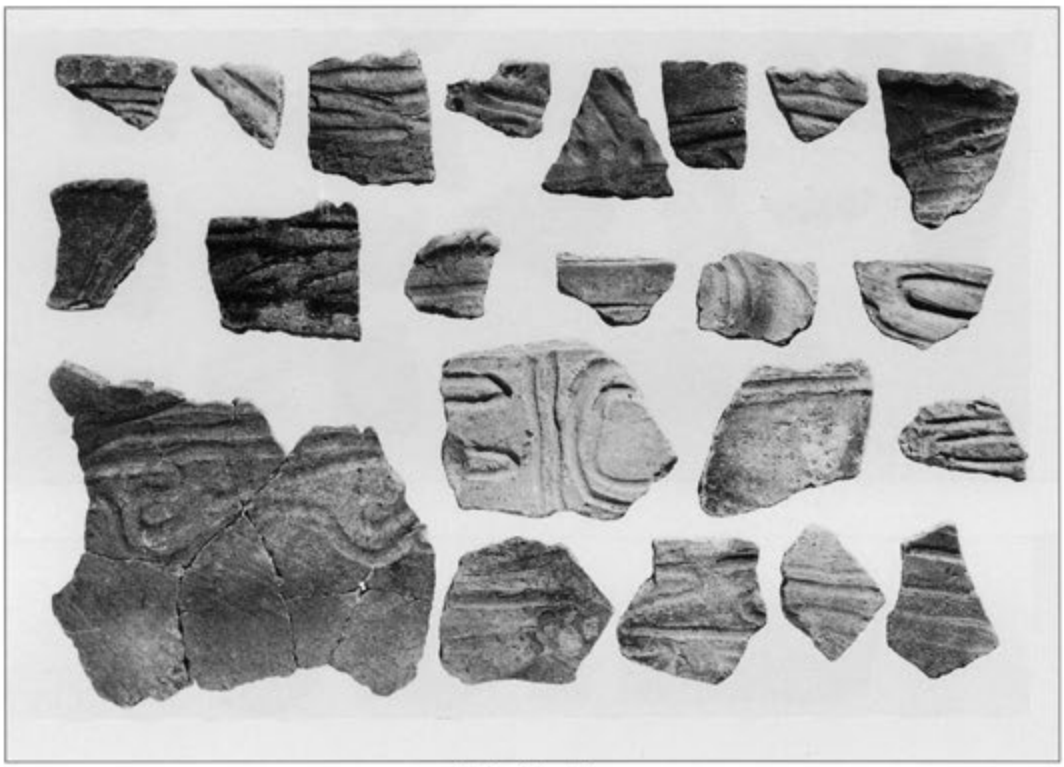
Ⅱ類（9～35）

Ⅶ類（189～192）

図版6　縄文土器

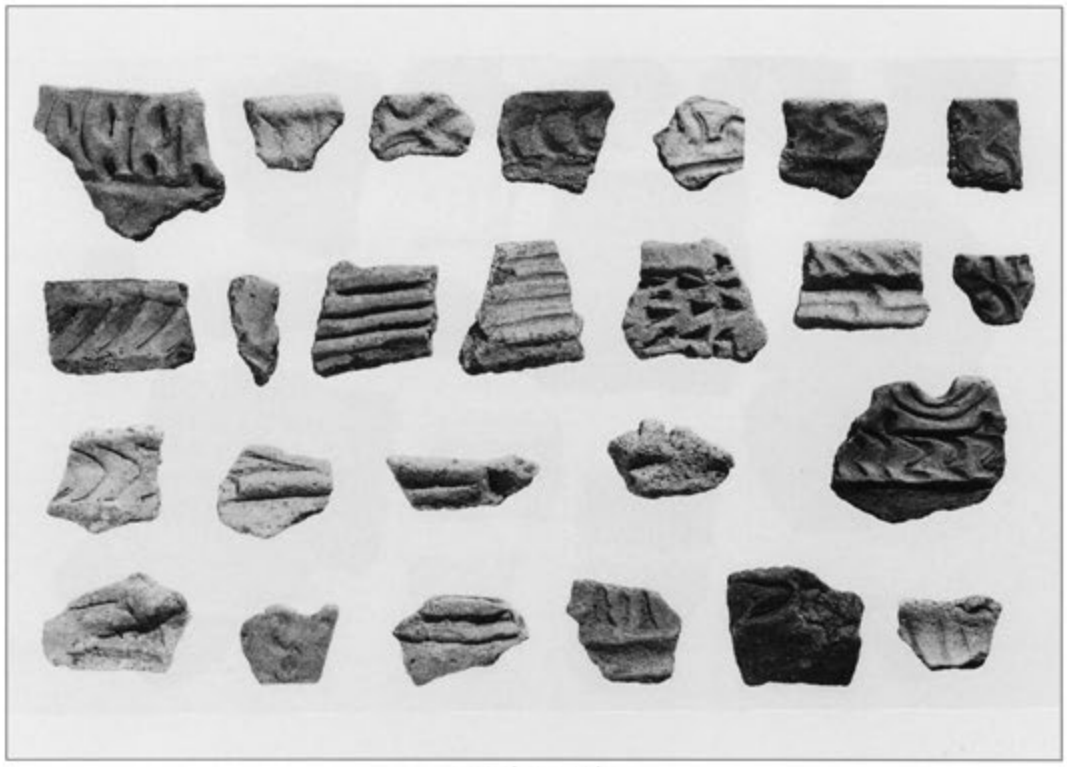


Ⅲ類（36～61）

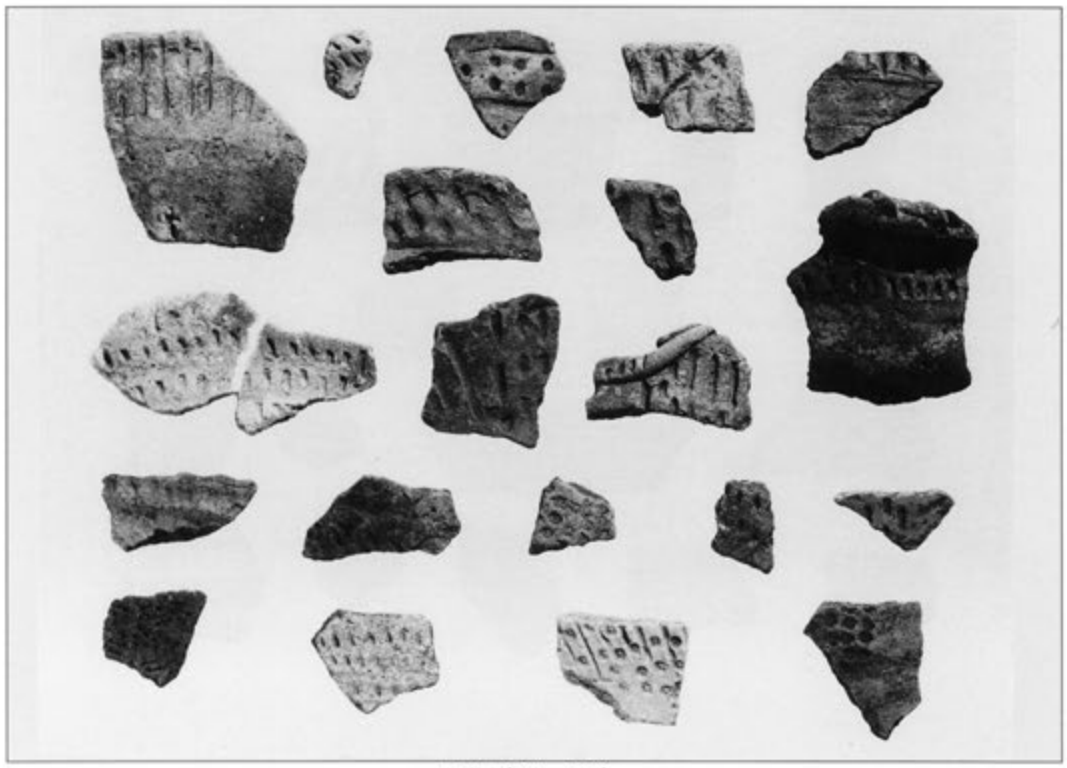


Ⅲ類（62～84）

図版7　縄文土器

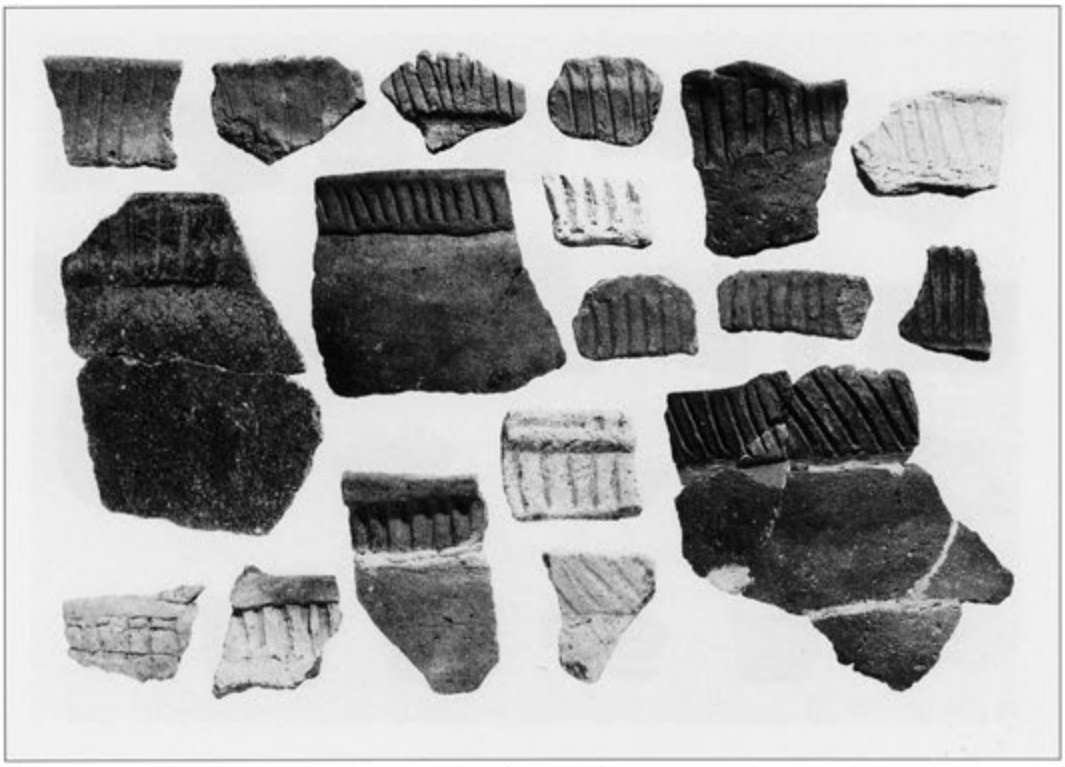


Ⅳ類（85～109）

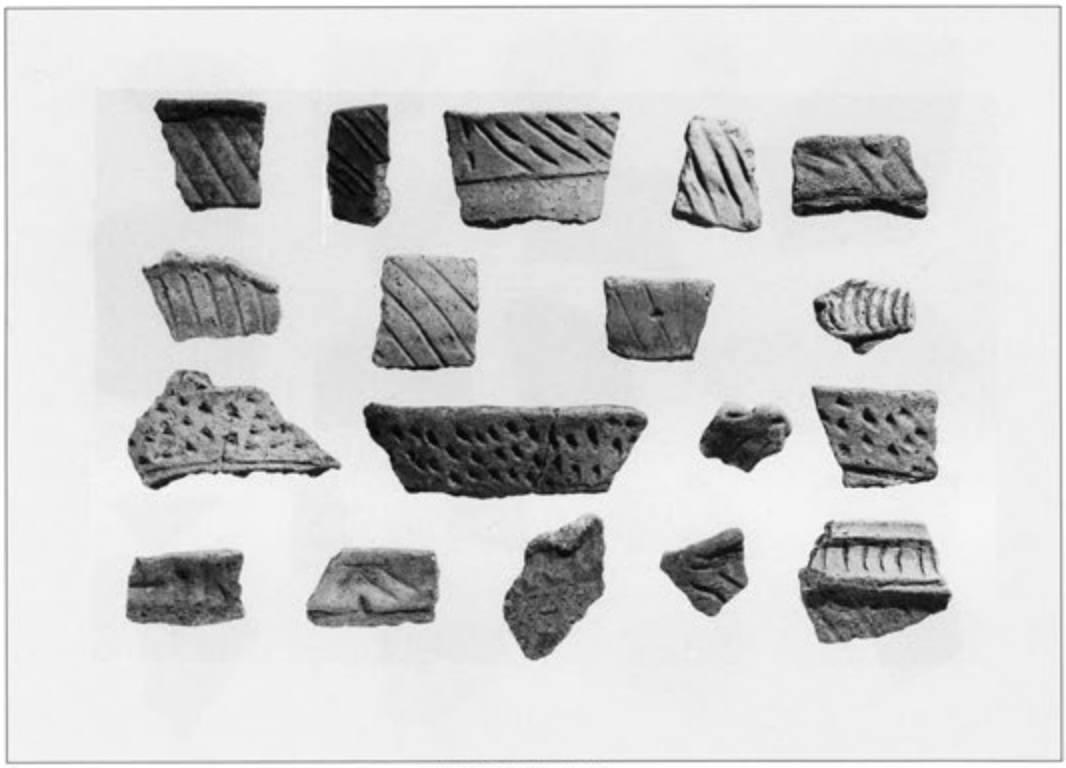


Ⅵ類（146～165）

図版8　縄文土器

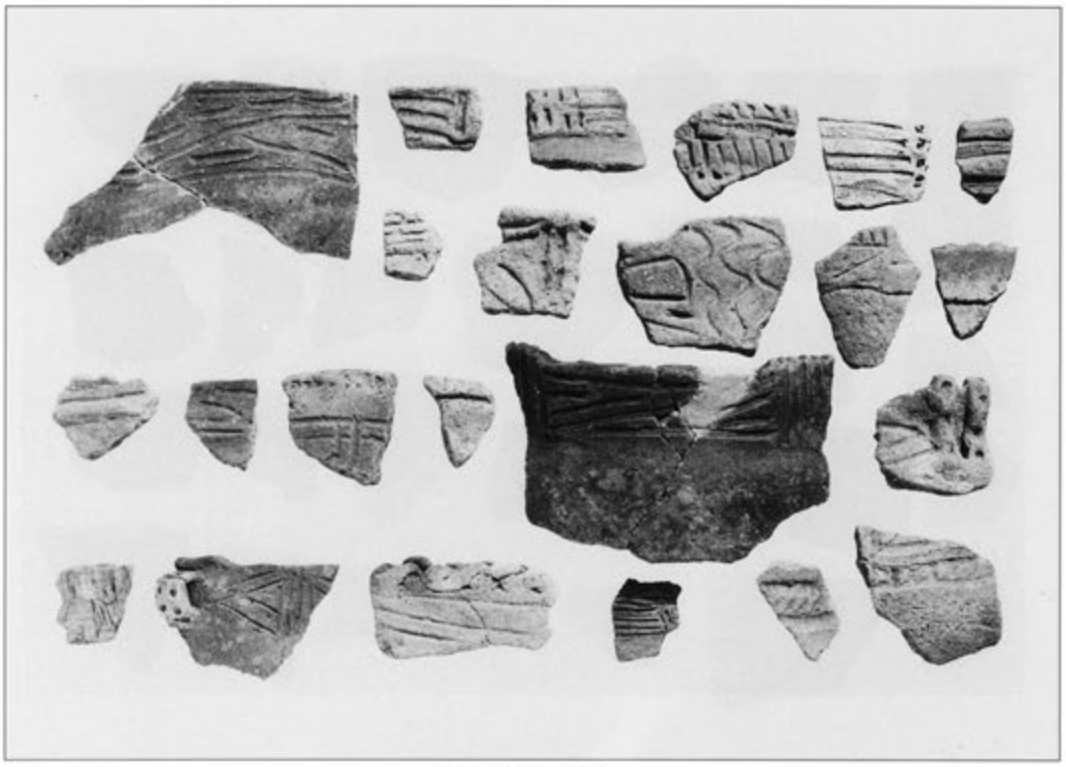


V類（110～127）

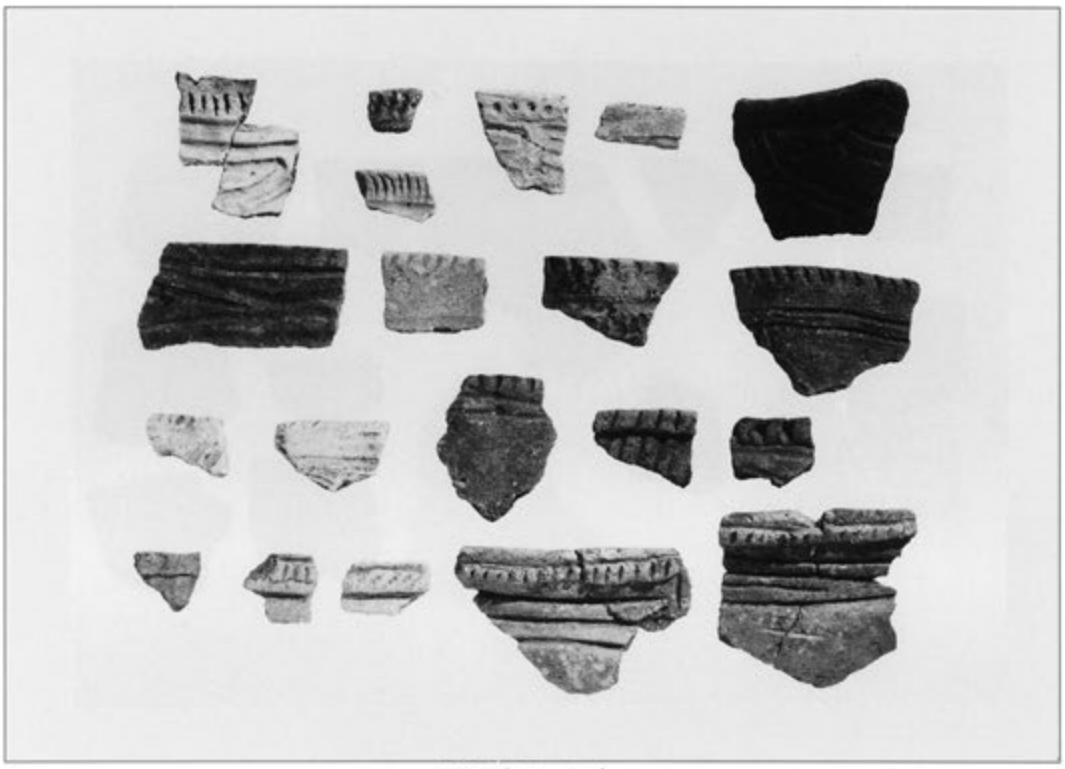


V類（128～145）

図版9　縄文土器

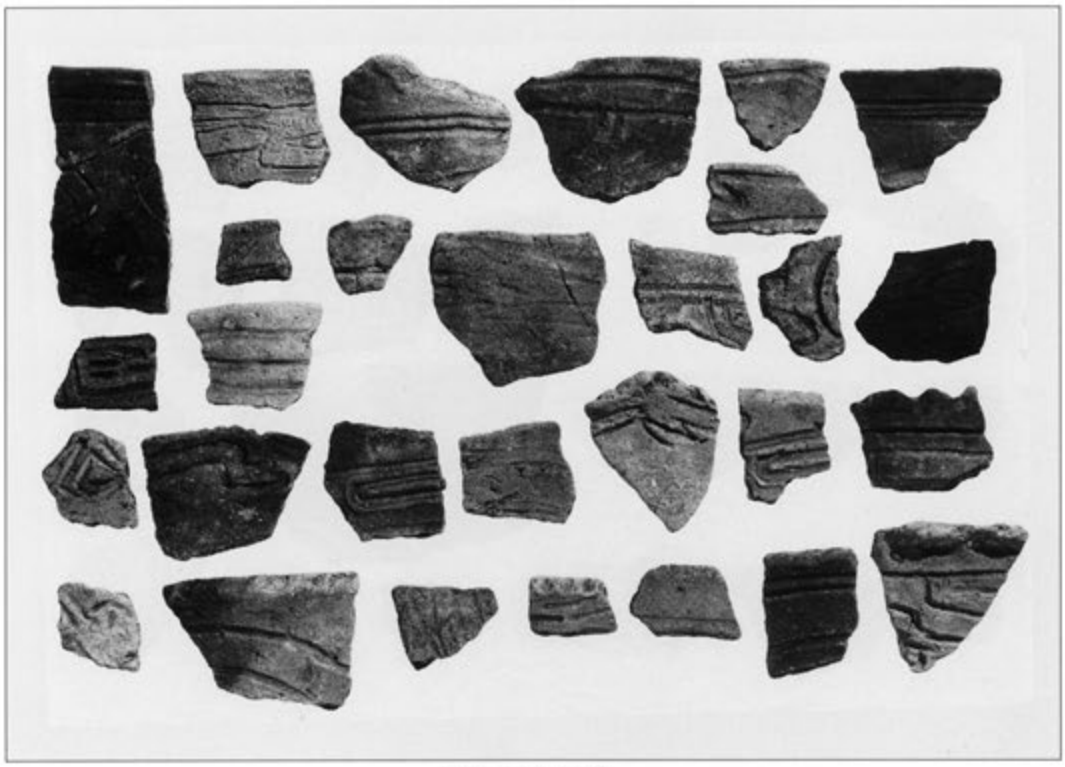


Ⅶ類（166～188）

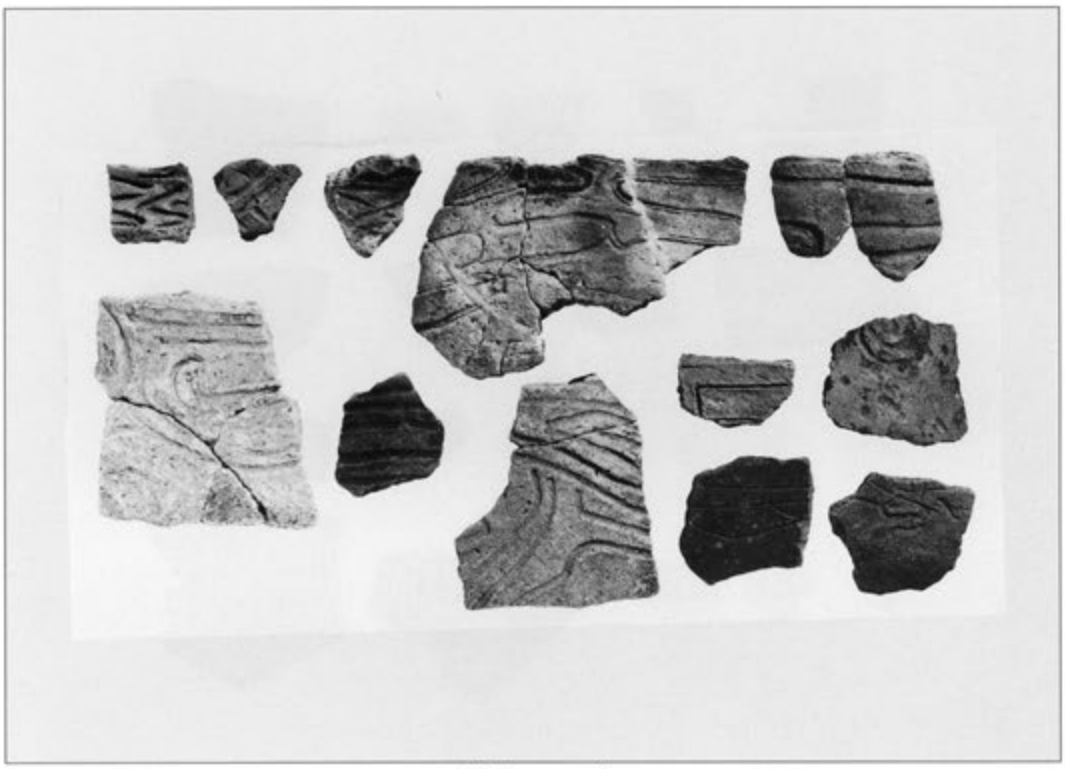


Ⅸ類（193～212）

図版10　縄文土器

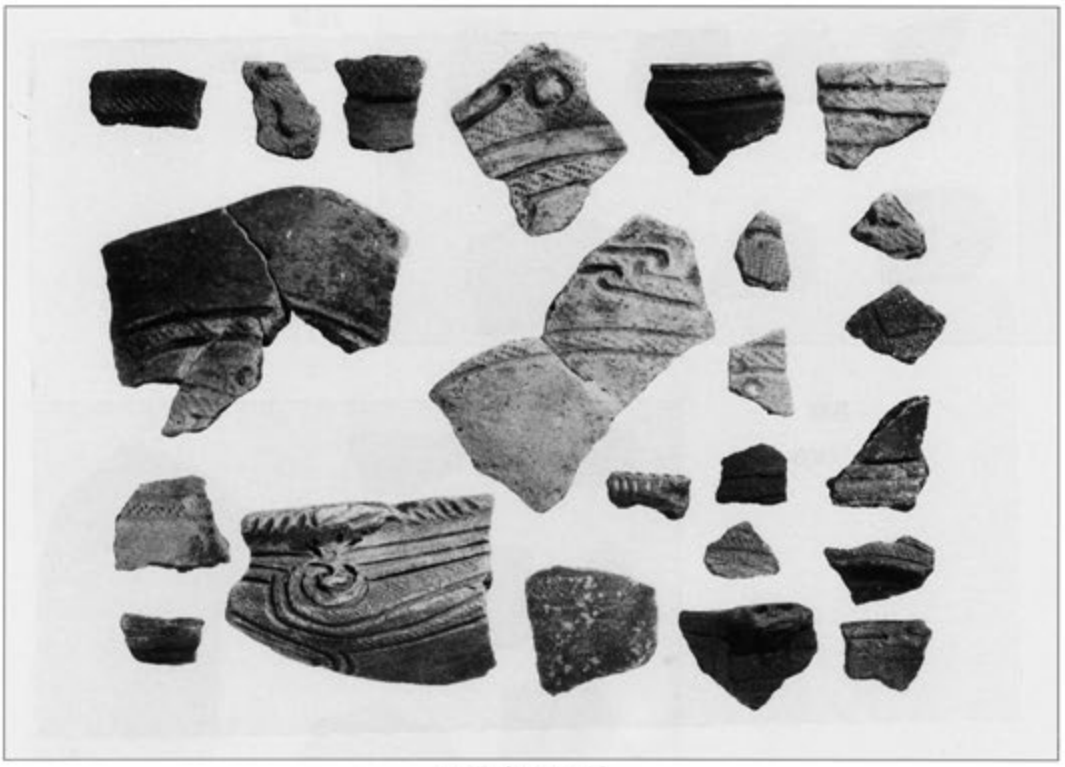


X類（212～240）

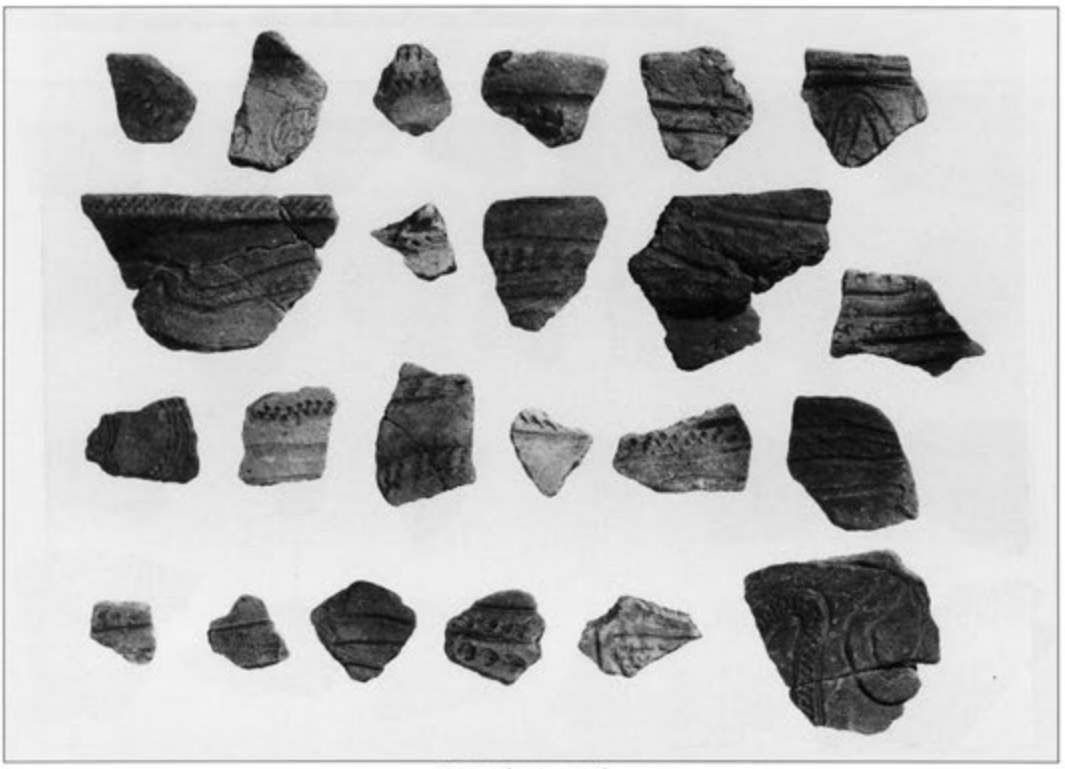


X類（241～252）

図版11　縄文土器



XI 類（253～275）

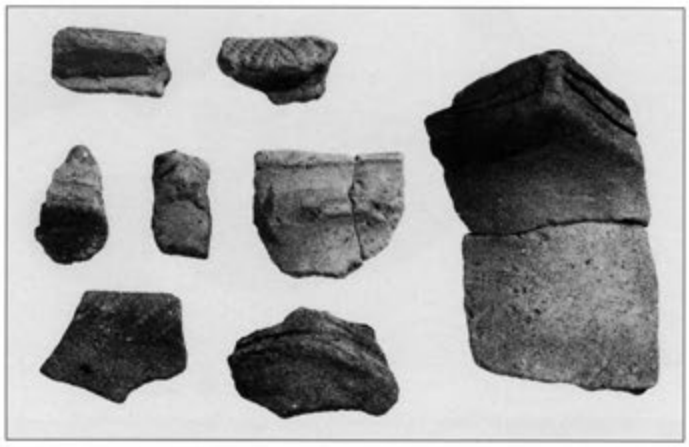


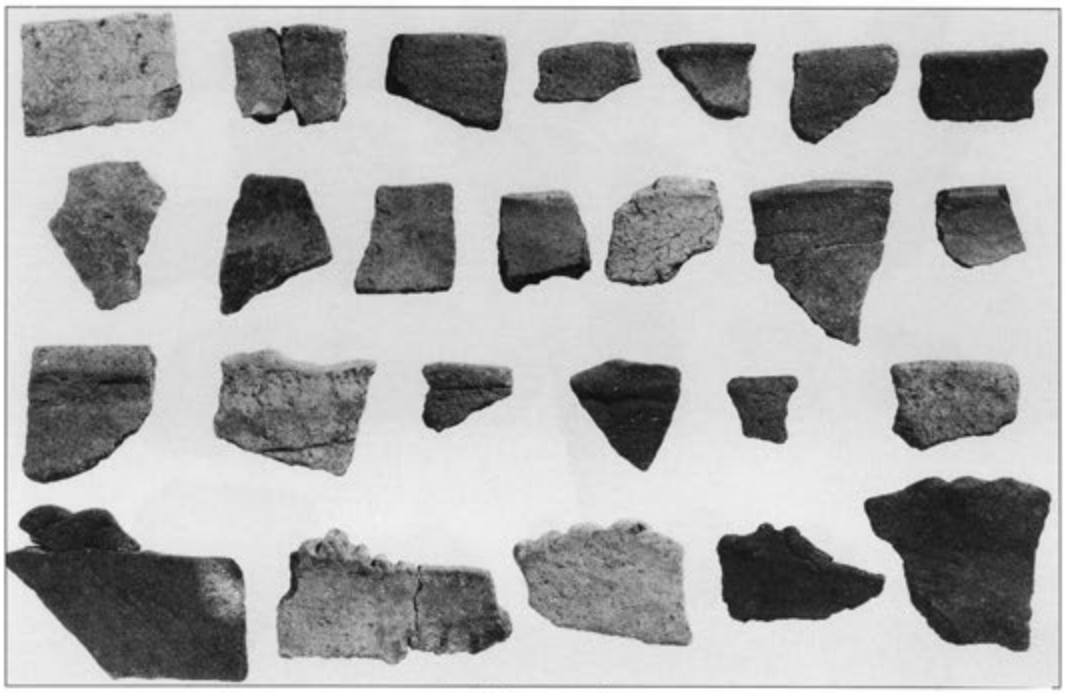
XII 類（276～298）

図版12　縄文土器

XIII類
(299～305)

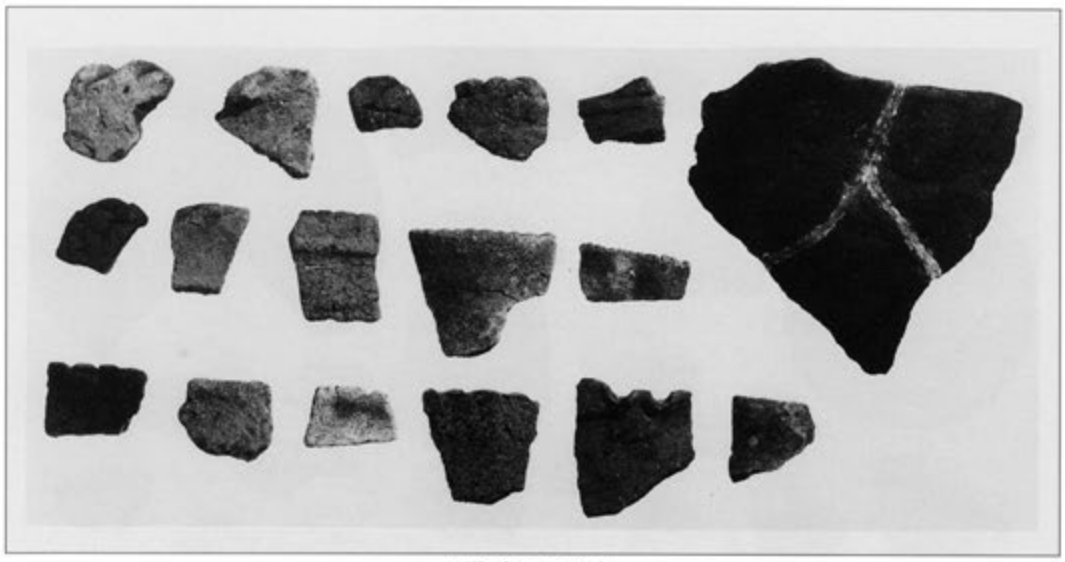
XIV類
(306～313)





XV類 (314～338)

図版13　縄文土器



XV類（339～355）

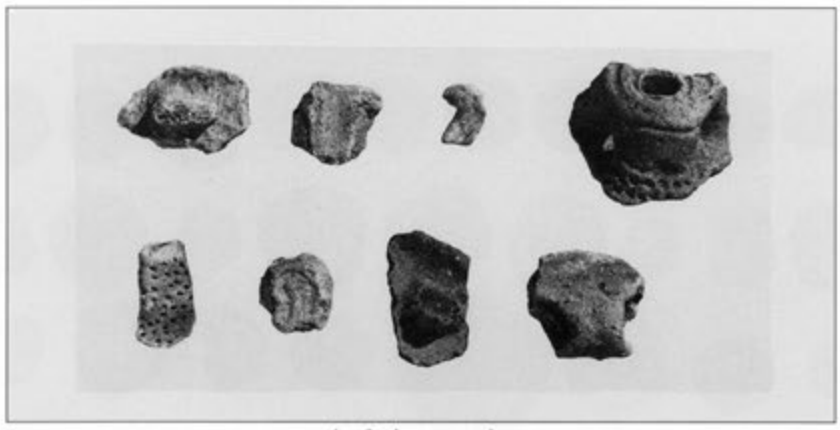
XVI類（356～376）

台付浅鉢など（440～454）

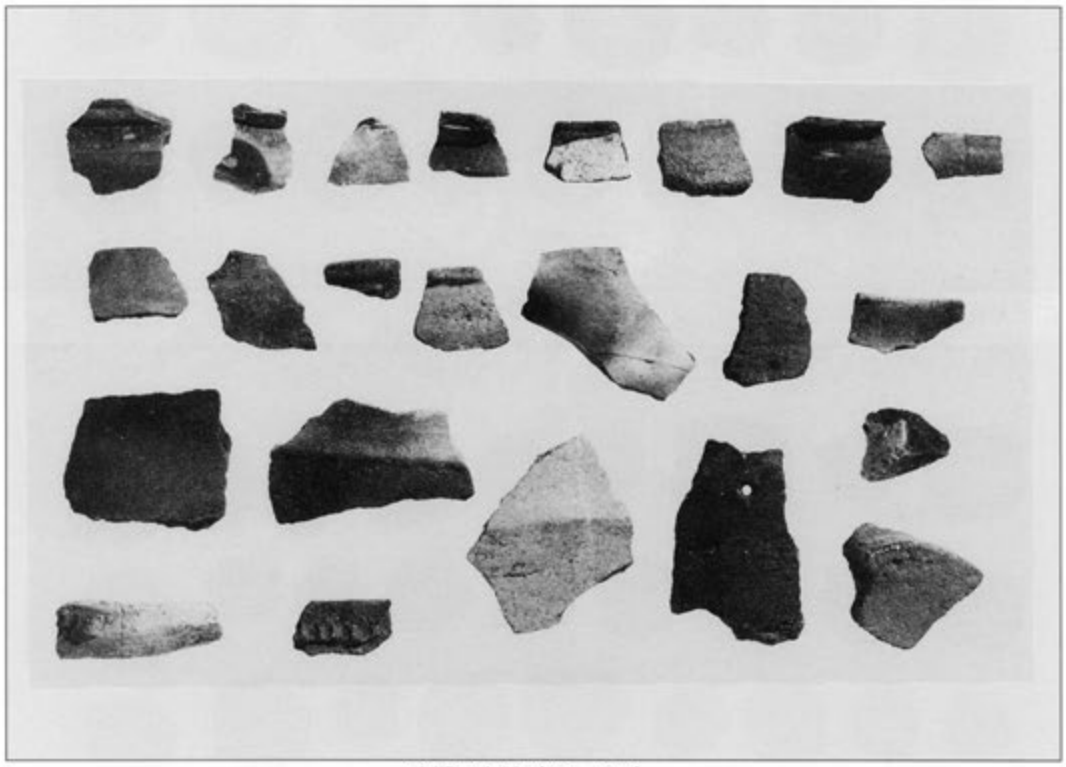
図版14　縄文土器

底部（385～411）

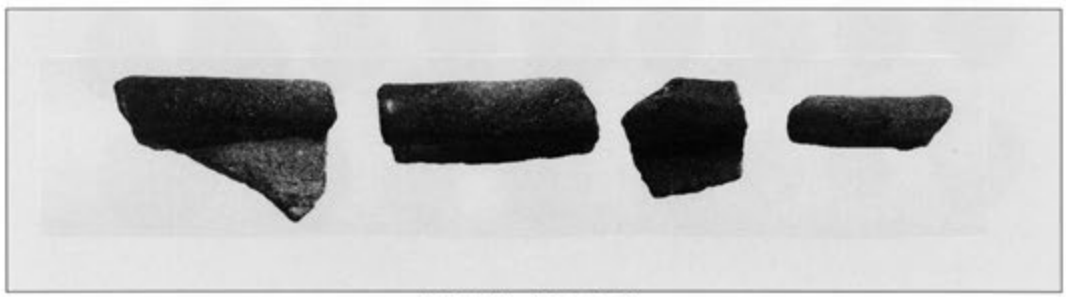
底部（412～433）



把手（377～384）

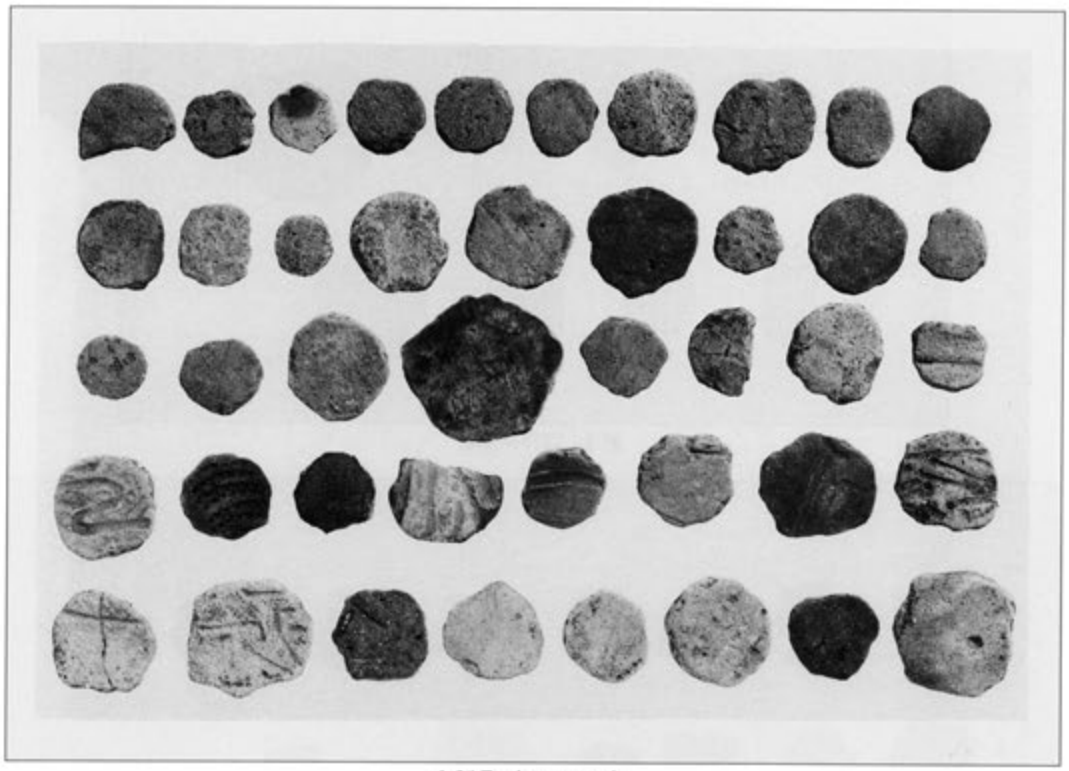


晩期の土器（455～477）



弥生土器（565・566）

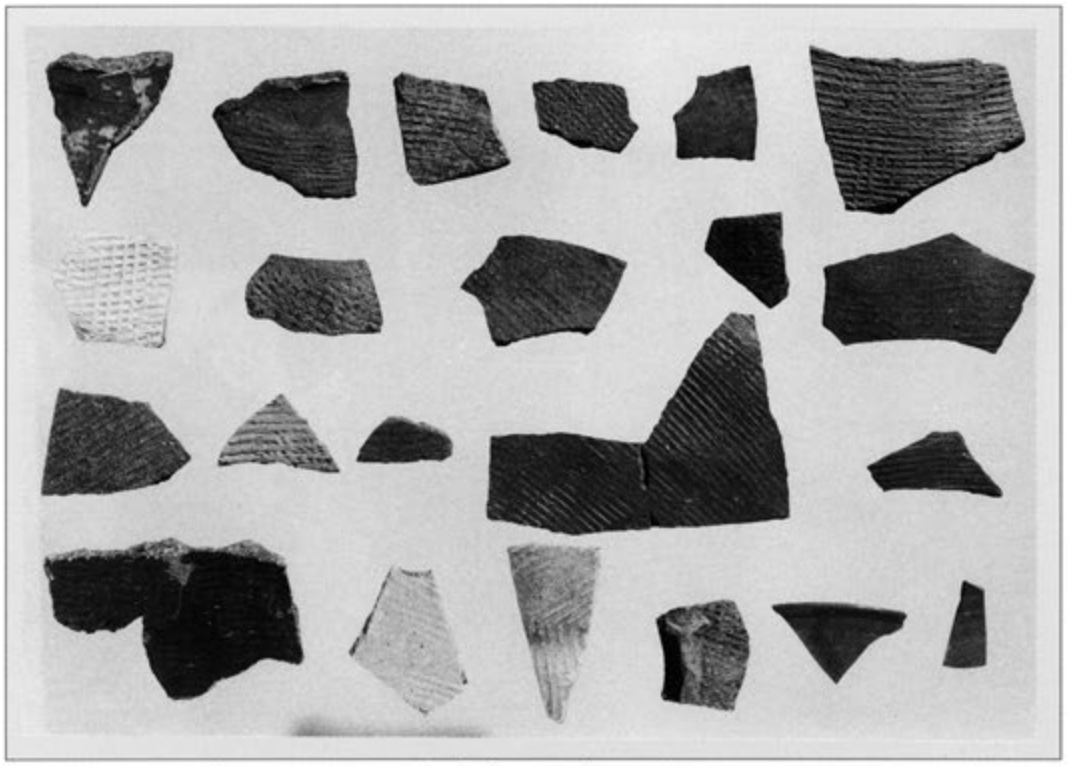
図版16　土製品



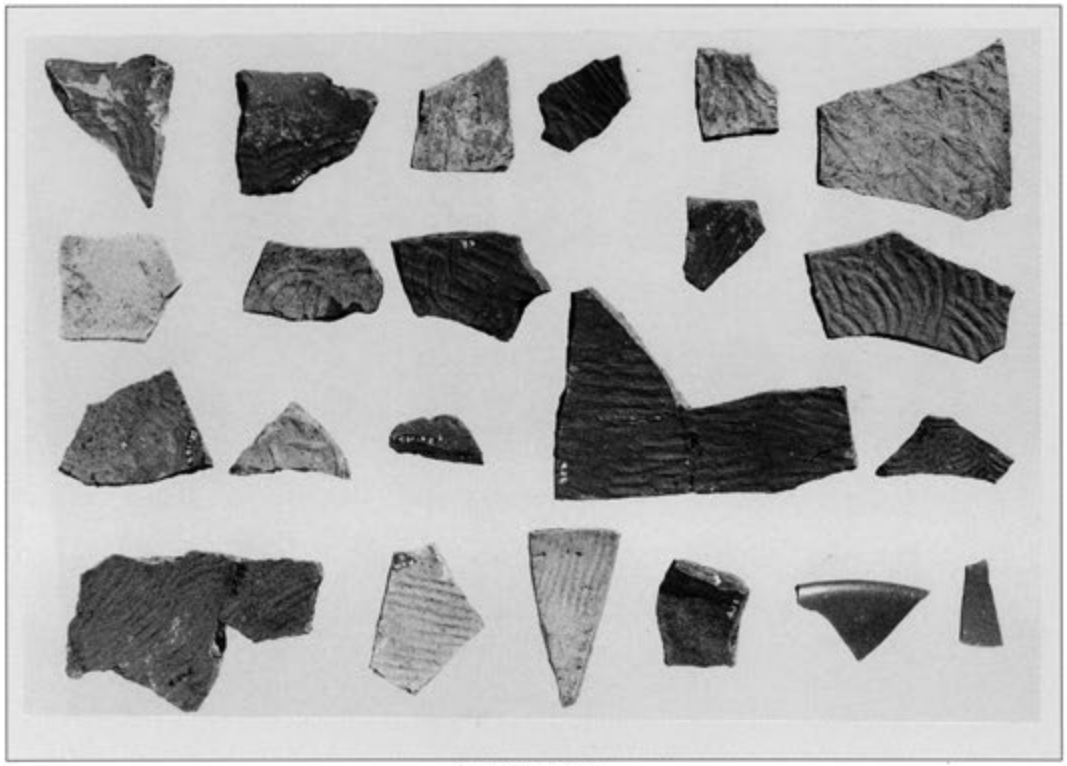
土製品（478～520）

土製品（521～564）

図版17　須恵器・青磁

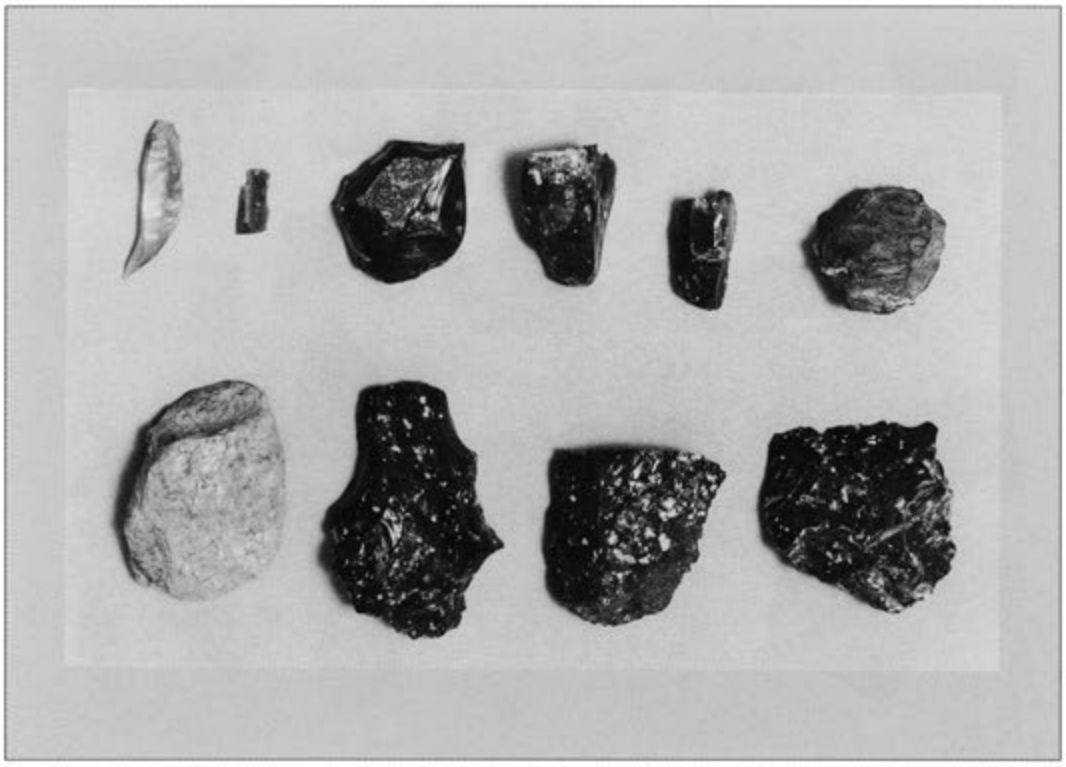


表（634～655）

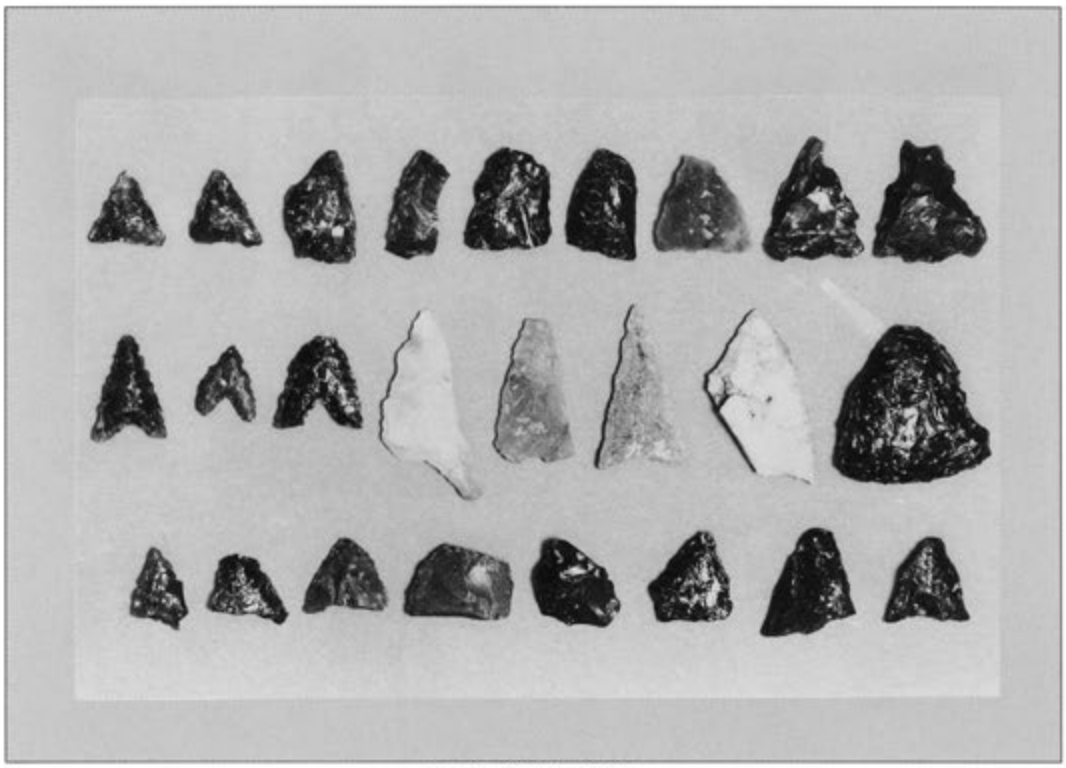


裏（634～655）

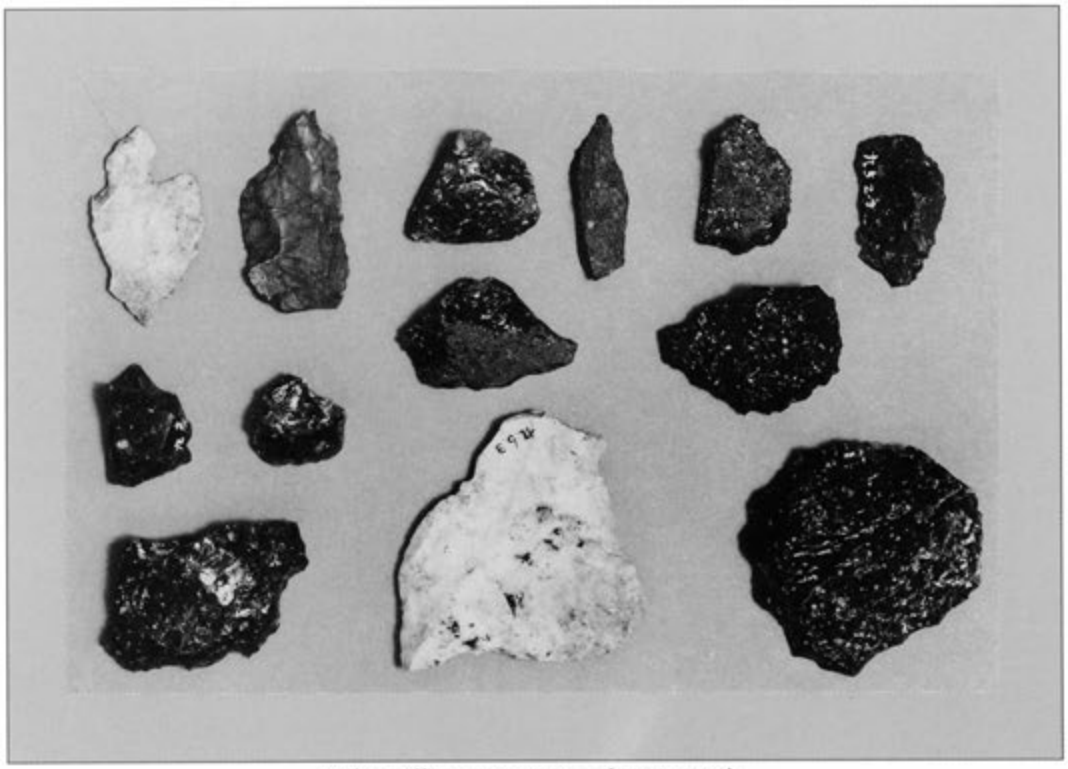
図版18　石器



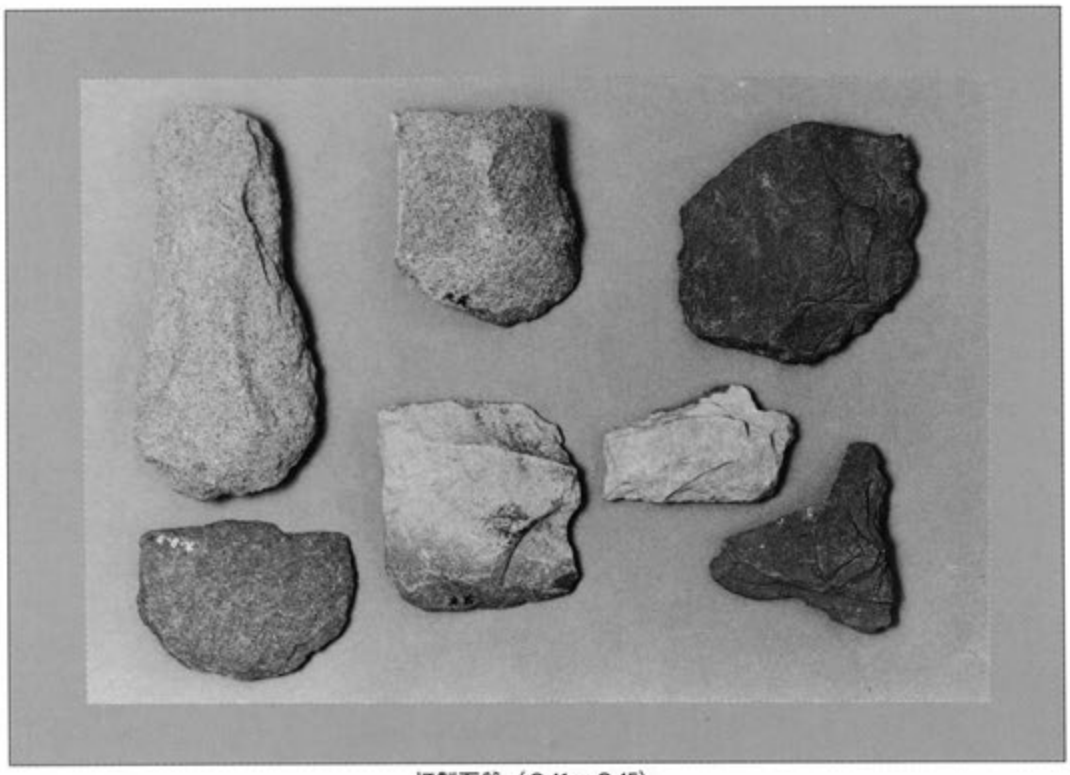
旧石器時代の石器（Ｓ１～Ｓ10）



石　鏃（S11～S27）



石匙・石錐・スクレイパー（S28～S40）

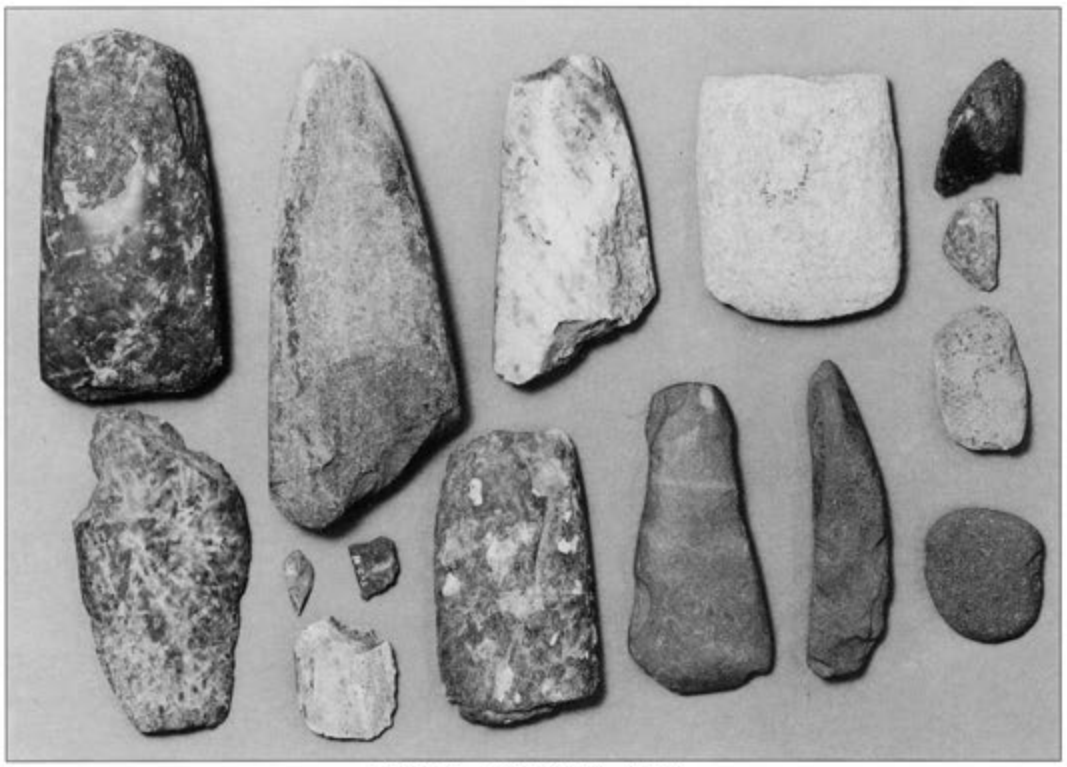


打製石斧（S41～S45）

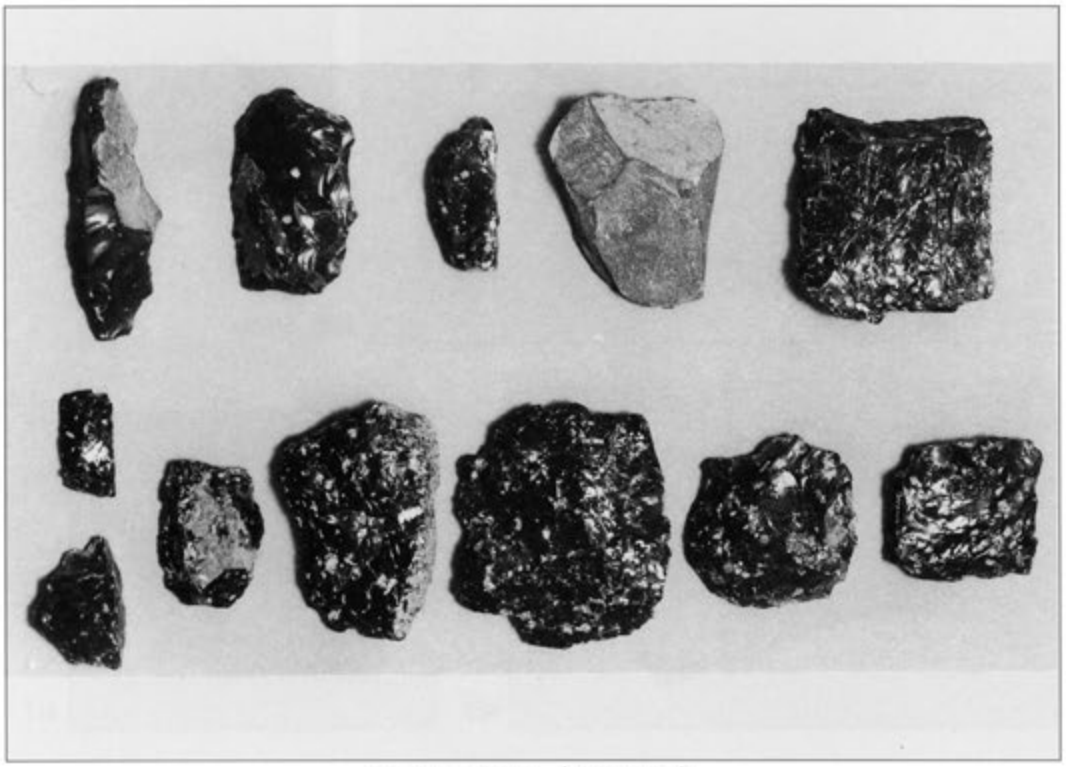
磨製石斧（S46～S51）

磨製石斧（S52～S57）

図版21　石器

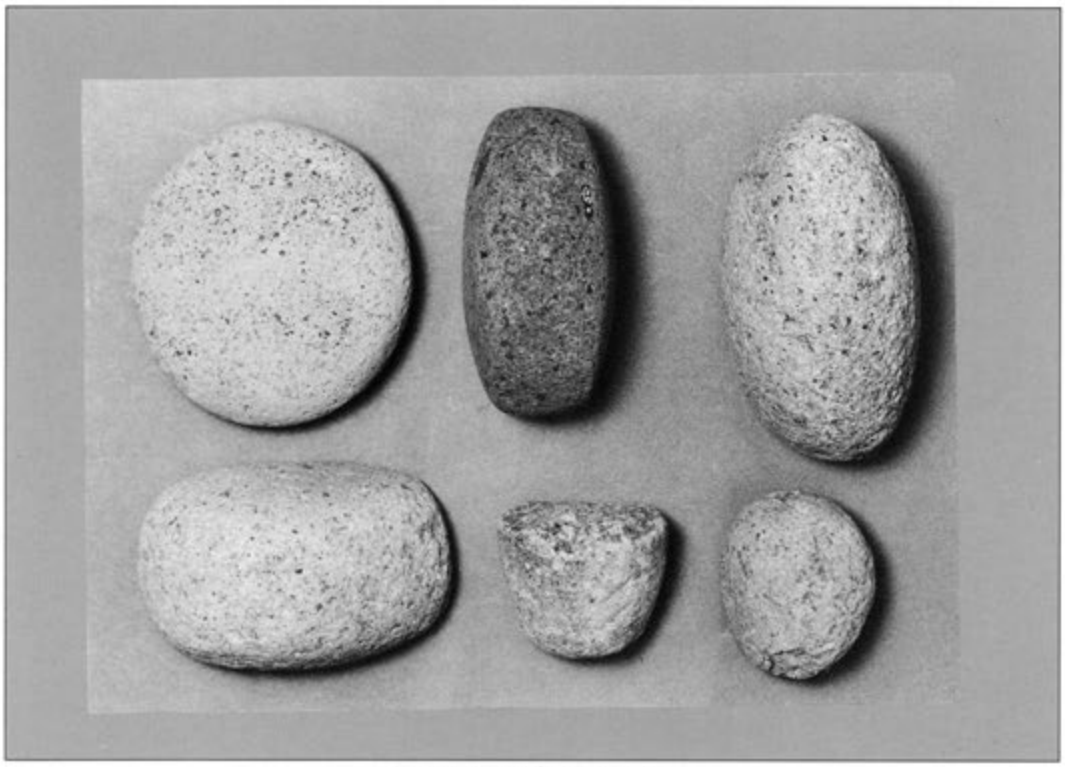


磨製石斧・石錘（S58～S65）



ピエスエスキーユ（S66～S70）

図版22　石器・縄文土器底部



磨石・叩き石（S71～S77）

石皿（S78）

433

423

417

あとがき

九日田遺跡は昭和54年１月に一町民の通報によって所在が確認されたようになっているが，その４年前に刊行された栗野町郷土誌によればその存在は既に紹介されていた。埋蔵文化財行政が未熟な時期のことである。今日では起こりえないようなきっかけで始まった発掘調査はその仕上げにおいてもとまどってしまった。多くの貴重な遺物を出しながら始末がつかずほったらかしにされてしまったのである。

あれから14年，ようやくここに一つの区切りをつけることができた。既に記憶の片隅から消え去ってしまったことを思い出すには余りに長い空白期間だったため，出土品の紹介だけに留まってしまった。出ないよりはましという自己満足の報告書であっても，いつかはまた編年等の一助になるかもしれない。

発掘者の名簿は忘却の彼方にある。申し訳ないが省略させてもらいたい。

最後にようやくここに報告書を出すに至って労をとられた皆さんに深く感謝して筆を置く。

（整理作業に従事された皆さん）

松元　雅子　・　木田　安枝　・　相良　政子　・　川畑　明子　・　竹下　淳子

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（２）

九日田遺跡

発行日　平成５年３月30日

発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-56 姶良郡姶良町平松6252

☎(0995)65－8787

印　刷　渕上印刷株式会社

鹿児島市樋之口町6-6

☎(0992)25－2727